

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新築工事に伴う長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 20 年 3 月

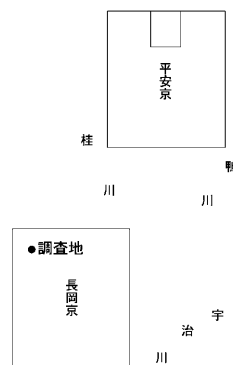
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡
長岡京右京第 903 次調査（7 ANUNK-2 地区）
- 2 調査所在地 京都市西京区大原野上里南ノ町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼
- 4 調査期間 2007 年 4 月 16 日～2008 年 1 月 10 日
- 5 調査面積 1,500 m²
- 6 調査担当者 高橋 潔・大立目 一・津々池惣一
- 7 使用地図 国土地理院発行の 1：50,000 地形図「京都西南部」、京都市発行の都市
計画基本図（縮尺 1：2,500）「石見」・「粟生」を調整して使用した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 遺構規模 本文中の遺構の規模についての記載は、特に断りのない限り、それぞれ
その遺構の検出面での規模を示し、深さも検出面からの深度を示す。
- 15 掲載写真 一部を除き、遺構・遺物ともに村井伸也・幸明綾子が担当した。
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 高橋 潔・大立目 一・津々池惣一
- 18 執筆分担 高橋・津々池・大立目（分担は
目次に記した）
- 19 編集・調整 児玉光世・近藤章子・山口 眞
・柏田有香

- 20 謝辞 発掘調査および整理作業において、次の方々に
御指導・御助言を頂いた。記して謝意を示す。

坪井清足氏・狭川真一氏（財団法人元興寺文化財研究所）、泉 拓良氏（京都大学）、金原正明氏（奈良教育
大学）、國下多美樹氏（財団法人向日市埋蔵文化財セ
ンター）、伊藤敦史氏（京都大学埋蔵文化財センター）



（調査地点図）

目 次

1. 調査の経緯	（高橋）	1
(1) 調査に至る経緯		1
(2) 調査経過		2
2. 遺 跡	（津々池）	4
(1) 遺跡の位置と環境		4
(2) 周辺の調査		4
3. 遺 構		10
(1) 層序と遺構の概要	（高橋）	10
(2) 長岡京期の遺構	（大立目）	11
(3) 長岡京期造営以前の遺構	（大立目）	22
(4) 弥生時代前期の遺構	（高橋）	25
(5) 縄文時代晩期の遺構	（高橋）	31
4. 遺 物		44
(1) 遺物の概要	（高橋）	44
(2) 長岡京期の遺物	（大立目）	44
(3) 弥生時代の遺物	（高橋）	50
(4) 縄文時代の遺物	（高橋）	55
5. ま と め	（高橋）	59
6. 付章 縄文時代晩期の溝遺構の年代と植物化石	（パリノ・サーヴェイ株式会社）	62

図 版 目 次

図版1	遺構	平面図	第1面	(1:300)
図版2	遺構	平面図	第1-2面	(1:300)
図版3	遺構	平面図	第2面	(1:300)
図版4	遺構	平面図	第3面	(1:300)
図版5	遺構	平面図	第4面	(1:300)
図版6	遺構	平面図	第5面	(1:300)
図版7	遺構	1	第1面	全景(西から)
		2	第1面	一条大路路面および南側溝(西から)

- 図版 8 遺構 1 第 1 面 建物 1・2 (北から)
 2 第 1 面 建物 1 柱穴 126 柱痕検出状況 (北から)
 3 第 1 面 建物 1 柱穴 127 柱痕検出状況 (北から)
- 図版 9 遺構 1 第 1 面 柱穴列 5 A および溝 222 (北から)
 2 第 1 面 溝 222 木樋検出状況 (東から)
 3 第 1-2 面 土坑 67 A 遺物検出状況 (北から)
- 図版 10 遺構 1 第 1-2 面 一町整地層 163 除去状況 (北西から)
 2 第 1-2 面 土坑 67・223 完掘状況 (北から)
- 図版 11 遺構 1 第 2 面 全景 (西から)
 2 第 2 面 土器棺墓 89 (南から)
 3 第 2 面 土器棺墓 275 (西から)
- 図版 12 遺構 1 第 3 面 全景 (西から)
 2 第 3 面 竪穴住居 687 検出状況 (北西から)
- 図版 13 遺構 1 第 4 面 全景 (西から)
 2 第 5 面 全景 (西から)
- 図版 14 遺構 1 第 5 面 竪穴住居 1294 (東から)
 2 第 5 面 炉 1326 (南から)
 3 第 5 面 集石 1631・土器棺墓 1640 (北から)
- 図版 15 遺構 1 第 5 面 土器棺墓 436 (東から)
 2 第 5 面 土器棺墓 978・1078 (西から)
 3 第 5 面 土器棺墓 845 (東から)
 4 第 5 面 土器棺墓 1271 (西から)
- 図版 16 遺構 1 第 5 面 溝 1067 (北西から)
 2 第 5 面 溝 1215 (北から)
- 図版 17 遺物 長岡京期 出土土器 1
- 図版 18 遺物 長岡京期 出土土器 2
- 図版 19 遺物 1 竪穴住居 687 出土土器
 2 竪穴住居 687、土器棺墓 89 出土土器
- 図版 20 遺物 弥生時代各遺構出土土器および縄文時代出土玉類
- 図版 21 遺物 1 竪穴住居 1294 出土土器
 2 溝 1067 出土土器
- 図版 22 遺物 縄文時代 土器棺墓出土土器
- 図版 23 遺物 1 各遺構出土縄文時代石器 1
 2 各遺構出土縄文時代石器 2
- 図版 24 遺物 各遺構出土縄文時代石器 3

挿 図 目 次

図 1	長岡京と調査地点図 (1 : 50,000)	1
図 2	調査前全景 (東から)	2
図 3	作業風景 (北東から)	2
図 4	調査区配置図 (1 : 1,500)	2
図 5	2006 年度調査縄文時代晩期遺構全景 (西から)	3
図 6	今回の調査地と周辺の調査 (1 : 5,000)	5
図 7	調査区南壁断面図 (1 : 100)	12
図 8	調査区東壁断面図 (1 : 100)	13
図 9	建物 1 実測図 (1 : 60)	14
図 10	建物 2 実測図 (1 : 60)	16
図 11	柱穴列 3 実測図 (1 : 50)	17
図 12	柱穴列 5 A 実測図 (1 : 60)	17
図 13	溝 222 実測図 (平面図 1 : 100、断面図 1 : 20)	18
図 14	溝 172 断面図 (1 : 40)	18
図 15	柱穴列 4 実測図 (1 : 50)	19
図 16	柱穴列 5 B 実測図 (1 : 50)	19
図 17	溝 16 断面図 (1 : 40)	19
図 18	溝 188 断面図 (1 : 40)	20
図 19	溝 13A・B 断面図 (1 : 50)	20
図 20	溝 164A・B 断面図 (1 : 50)	21
図 21	溝 162 断面図 (1 : 50)	22
図 22	小溝 180・189～194 断面図 (1 : 50)	22
図 23	土坑 223 実測図 (1 : 100)	23
図 24	土坑 67A・B 実測図 (平面図 1 : 150、断面図 1 : 50)	24
図 25	土坑 280A・B 実測図 (平面図 1 : 150、断面図 1 : 40)	24
図 26	土坑 230 実測図 (1 : 40)	25
図 27	竪穴住居 687 実測図 (1 : 60)	27
図 28	土器棺墓 89・275、土坑 311・253 実測図 (1 : 20)	28
図 29	土坑 411・541 実測図 (1 : 20)	29
図 30	土坑 429・490・499・539 実測図 (1 : 20)	30
図 31	土坑 597 実測図 (1 : 20)	31
図 32	土坑 779 実測図 (1 : 20)	31

図 33 溝 358 実測図 (1 : 80)	31
図 34 竪穴住居 1294 実測図 (1 : 50)	32
図 35 炉 1280 実測図 (1 : 20)	33
図 36 炉 1326 実測図 (1 : 20)	33
図 37 土器棺墓 340・349・354・436 実測図 (1 : 20)	34
図 38 土器棺墓 845・855・967・968 実測図 (1 : 20)	35
図 39 土器棺墓 978・1010・1064・1078 実測図 (1 : 20)	36
図 40 土器棺墓 1271・1288・1291・1452 実測図 (1 : 20)	37
図 41 土器棺墓 1640・集石 1631 実測図 (1 : 20)	38
図 42 土壙墓 1611 実測図 (1 : 20)	39
図 43 土坑 344 実測図 (1 : 20)	39
図 44 土坑 847 実測図 (1 : 20)	40
図 45 土坑 1532 実測図 (1 : 20)	40
図 46 溝 1067 断面図 (1 : 50)	41
図 47 溝 1215 断面図 1 (1 : 50)	42
図 48 溝 1215 断面図 2 (1 : 50)	43
図 49 土坑 67 出土遺物実測図 1 (1 : 4)	45
図 50 土坑 67 出土遺物実測図 2 (1 : 4)	46
図 51 土坑 223 出土土器実測図 (1 : 4)	48
図 52 溝 222 出土遺物実測図 (1 : 4)	49
図 53 その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)	49
図 54 竪穴住居 687 出土土器実測図 (1 : 4)	51
図 55 土器棺墓 89 出土土器実測図 (1 : 4)	52
図 56 土器棺墓 275 出土土器実測図 (1 : 4)	53
図 57 その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)	54
図 58 土器棺墓 340・349・1291・1640 出土土器実測図 (1 : 4)	56
図 59 土器棺墓 354 出土土器実測図 (1 : 4)	57
図 60 滑石製勾玉・翡翠製丸玉実測図 (1 : 1)	58
図 61 長岡京期・縄文時代晩期遺構略図 (1 : 1,200)	60
図 62 溝 1215 埋土の累重状況	62
図 63 暦年較正結果	63

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	11
表 3	遺物概要表	44
表 4	放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果	63
表 5	炭化物同定結果	64

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

本調査は、京都市建設局道路建設部道路建設課による、I・II・3伏見向日町線道路新築工事に先立って実施した発掘調査である。この道路新築工事に先立ち、これまでに西方より継続して調査を行っており、2001年度に試掘調査、2003年度・2005年度・2006年度に発掘調査を行い、本調査は発掘調査として四年度目にあたる。調査地は京都市西京区大原野上里南ノ町地内に所在し、対象となった遺跡は長岡京跡の右京二条三坊一町・八町および上里遺跡である。長岡京跡における調査では右京第903次調査（R903）となる。¹⁾

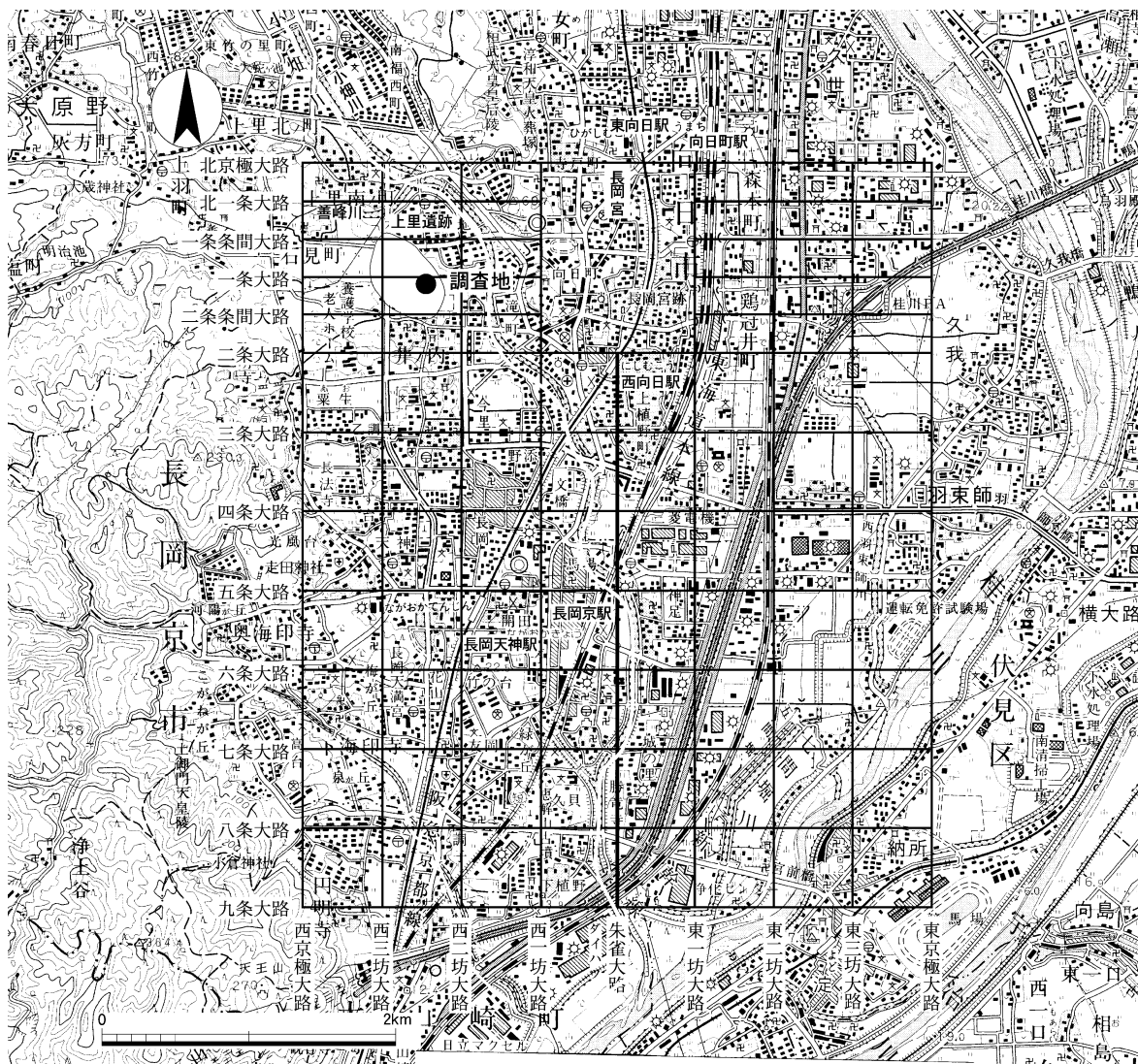


図1 長岡京と調査地点図（1：50,000）



図2 調査前全景（東から）



図3 作業風景（北東から）

(2) 調査経過

調査範囲 本年度調査の範囲は、2006年度調査地の東隣接地であり、東西58m、南北32m、敷地面積は約1,860㎡である。調査地北側に幅約4m、東西33mの農作業用通路を確保したため、これを除いた範囲に1,500㎡の調査区を設けた。

調査目的 西に隣接する2006年度調査は、長岡京右京二条三坊八町の北端部西側にあたり、八町の東西の中央に整然と並ぶ二間×五間の東西棟掘立柱建物5棟を検出した。また、下層の上里遺跡では、弥生時代前期の土器棺墓4基・土坑・柱穴・炉跡・溝など、縄文時代晩期の竪穴住居8棟・土器棺墓6基・土壇墓3基・土坑・落込みなどを検出している。

本調査区でも同様の成果が見込まれた。以下の点を調査の目的とした。

長岡京期 長岡京条坊に係る一条大路および南側溝、西三坊坊間東小路および東西両側溝が推定されており、これらに関連する遺構の検出。さらに一町・八町宅地内の状況の把握。

上里遺跡 2006年度調査で検出されている縄文時代晩期・弥生時代前期、それぞれの時期の遺構の拡がりおよび層位的な関係、また遺跡の立地と地形の成り立ちの把握。

調査経過 調査に先立ち、周辺の農道・農地・水路の保全対策などを行った後、大型車などの進入用仮設道路の施工を行った。

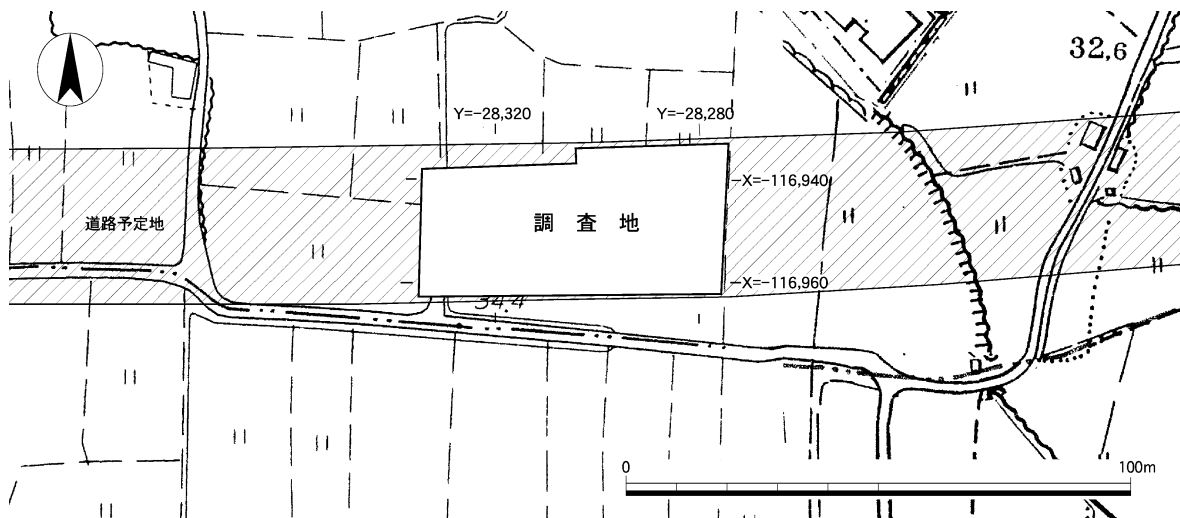


図4 調査区配置図（1：1,500）

調査面は結果として、長岡京期1面（第1面）、弥生時代前期2面（第2・3面）、縄文時代晩期2面（第4・5面）の、大きく三時期・5面の調査を行った。調査は2007年5月7日に重機による現代耕作土の除去を開始し、第1面（長岡京期）の調査に入り、第5面（縄文時代晩期）まで順次進めた。各面の調査は基本的に人力によったが、第2面から第3面、



図5 2006年度調査縄文時代晩期遺構全景（西から）

第3面から第4面、第4面から第5面への移行時の各層の掘削、また土層堆積状況の確認のための南壁・東壁沿いの断割掘削、および溝1215上層掘削には重機を使用した。排土はすべて場内に仮置きし、必要に応じてダンプなどによる小運搬を行って移動させた。

京都市文化市民局文化財保護課と京都市建設局道路建設課の協議により、第5面縄文時代晩期の遺構面を全面現状保存することになったため、大きく状況を変えるような断割りなどは最小限にとどめ、調査は12月20日に終了とした。埋め戻しは第5面の現状保存の決定に伴い、全面を約30cmの厚さの保護砂で覆い、その上を排土で埋めた。埋め戻しは2008年1月9日に終了し、1月10日に現場詰所等撤去を行い、すべての作業を終了した。

この間、長岡京期（第1面）の成果については6月9日に、縄文時代晩期（第5面）の成果については12月1日にそれぞれ現地説明会を開き、一般に公開した。このほか、中学生のチャレンジ体験の一環として発掘調査体験を6月26日に受け入れる（神川中学校）など、随時現場および成果の公開に努めた。

また、後述するように縄文時代晩期（第5面）西部で検出した溝1215からは、多くの土器・石器類と共に多量の炭化物が出土している。これらを含む土壤に当時の周囲の植生などの自然環境の復元に有効な植物遺体や廃棄物としての食物残渣が含まれる可能性が考えられた。このため、土壤のサンプルをできるだけ多く採取して、現在分析を行っている。このうちの一部について、自然科学的な分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を付章として掲載した。

註

- 1) 長岡京跡の調査に対する調査次数は、長岡京連絡協議会に拠るものである。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

地理的環境 この地域一帯は京都盆地の西、向日丘陵をさらに西に越えた西端に位置する。西に丹波層群からなる西山山地がそびえ、山裾に大阪層群が露頭する丘陵地がひろがる。その丘陵地の東側には高位、低位の平坦地を構成する段丘面があり、さらに東に小畑川などにより形成された低地をなす沖積層である氾濫原によって構成される。

調査地周辺は、西山丘陵から東へ延びる低位段丘の北側に広がる、小畑川やその支流である善峰川によって形成された沖積層の氾濫原に立地しており、現在は水田地帯である。南西側には西山からの低い丘陵が東へ張り出し、竹林を形成する。東側の小畑川までは約 200 m あり、北東約 600 m には善峰川と小畑川の合流点がある。調査地の標高は、西で 34.8 ～ 35.0 m、東で 34.0 m で、北西から南東へ緩やかに傾斜した地形を呈する。しかし、断層によって生じた西山山地との高低差により土砂の流出は激しく、洪水等による旧河川道が北西方向から南東に流れ、現在見られる景観とは異なり、かつては起伏に富んだ地形をなしていた。

歴史的環境 調査地の周辺では大原野石見町遺跡や井ノ内頭本遺跡などで旧石器時代の遺物が採集されており、当地の歴史がこの時代まで遡ることが判明している。

調査地は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である上里遺跡に含まれる。調査地の西側には古墳時代後期の芝古墳群、南西側には古墳時代後期の井ノ内古墳群や井ノ内稲荷塚古墳、南側には縄文時代後期から中世までの集落跡である井ノ内遺跡が位置する。さらに南側には、長岡京遷都以前における乙訓地域の中心地とされる乙訓寺や、乙訓坐火雷神社とされる角宮神社が所在する。延暦三年（784）に長岡に遷都されると、この地域も長岡京右京北西部の中に含まれるに至った。

(2) 周辺の調査

これまで、調査地周辺では多くの発掘調査などが行われている。各調査の成果などについては、一覧表にゆずり、ここでは時代別に検出された主要な遺構・遺物の概要を記す。

縄文時代 調査地南西側の調査⑱で中期後半の土壌を検出、南側の調査⑦で後期の土壌・柱穴などを検出した。調査地西隣の調査⑧において晩期中葉（滋賀里Ⅲ a・Ⅲ b 式）の竪穴住居跡 8 棟、土器棺墓 6 基、土坑墓 3 基等を検出した。調査⑱の A 1・2 区では、晩期後葉の土器棺墓 3 基や土壌墓 4 基を検出した。出土した土器から滋賀里Ⅳ式から船橋式、長原式のものである。調査地西北西側の調査①で晩期から弥生時代前期の柱穴状遺構と土器・石器が出土した。

弥生時代 調査地西隣の調査⑧においては、土器棺墓 4 基のほか土坑、柱穴群、炉、溝などを検出した。畿内第Ⅰ様式中段階から新段階にあたる。調査地南側の調査⑦では、土坑から前期（畿内第Ⅰ様式新段階）の土器や石鏃・サヌカイト剥片が混在して出土した。調査地南東側の調査②では、方形周溝墓を検出した。調査地西側の調査⑱では A 1～4 区で方形周溝墓・溝・流路、A 7・8 区では溝、B 4・5 区では溝・流路を検出した。

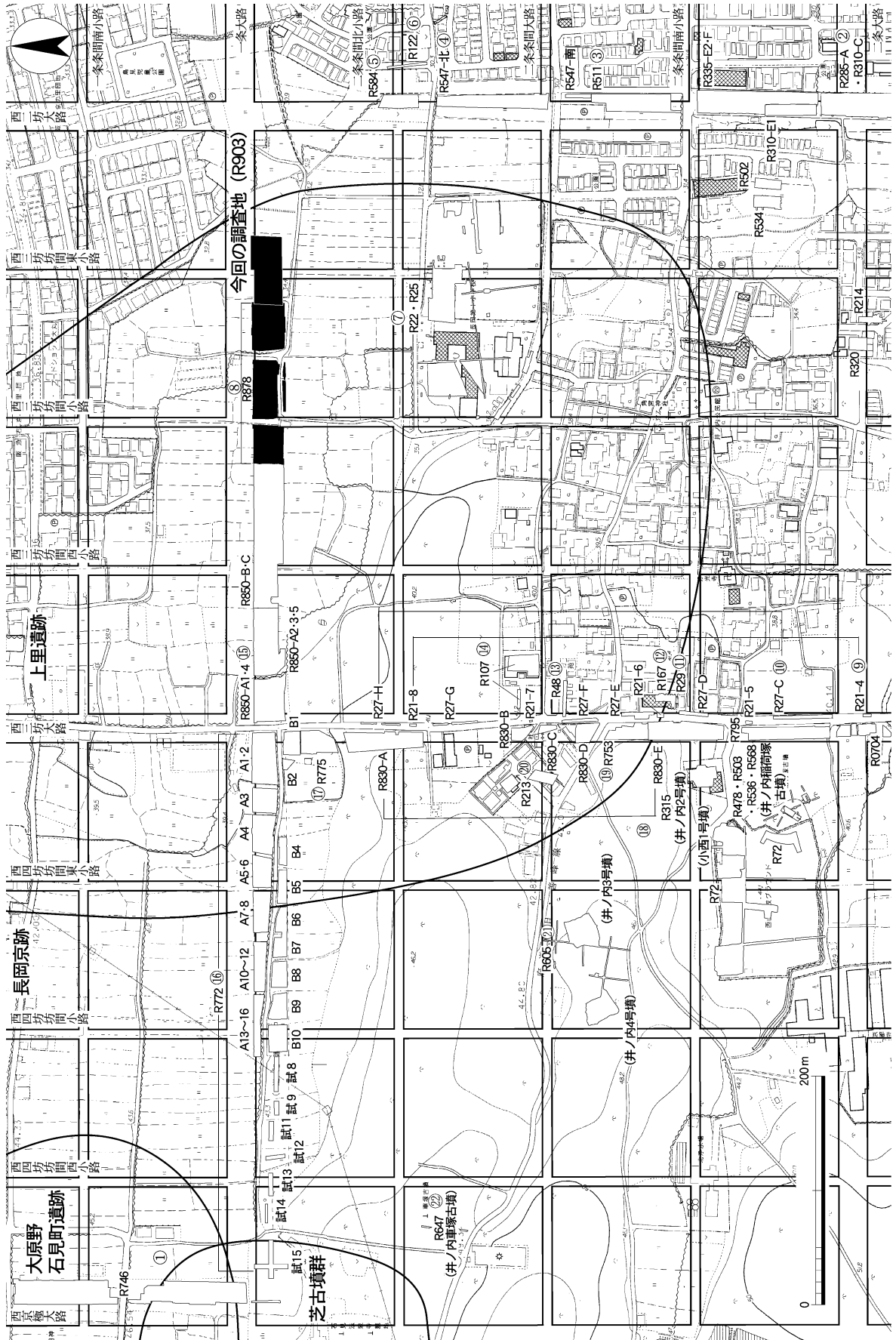


図6 今回の調査地と周辺の調査 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

位置番号	新条坊・調査回数	調査地所在地	調査機関・調査期間	長岡京期の調査概要	奈良時代以前の調査概要
①	右京一条四坊十三・十四町 R746	京都市西京区大原野石見町ほか地内	京都市研 2002.8.8～ 2003.2.28	一条条間南小路南北両側溝（道路幅5.5～7.2m）。その他土坑、溝、柵列など。一条大路両側溝は削平、検出できず。	古墳前期：流路。縄文後期～弥生前期：流路。
②	右京二条二坊十三町 R285・R310・R335	長岡京市今里更ノ町・井内下印田	京都府セ 1988.11.12～ 1990.2.27	西二坊大路の東側溝（南北132m分）。二条大路の南側溝。長岡京造営時の轆群、丸太敷路盤改良遺構。	奈良期：井戸、掘立柱建物2棟。井戸埋土から「園宅」「園司」墨書土器、「御司」木簡など。古墳後期：住居跡群9棟、集落区画溝、方形周溝墓3基。
③	右京二条二坊十四町 R511	長岡京市井ノ内地内	京都府セ 1996.10.20～ 1997.2.28	新旧の南北方向溝及び柱根列（西二坊大路の東側溝か）。「安麻呂此口」銘墨書土器など。	調査⑦で検出した流路の続き。
④	右京二条二坊十四・十五町 R547	長岡京市井ノ内・西ノ京	京都府セ 1996.10.7～ 1997.2.13	西二坊大路東側溝推定位置で南北溝、その東側で南北柱列。	奈良：柱穴。墨書土器など。古墳中期：井戸。凝灰岩製管玉など。弥生期：自然流路。
⑤	右京二条二坊十五・十六町 R584	長岡京市井ノ内的21田	京都府セ 1994.12.1～ 1995.1.27	明確な遺構、遺物は確認できず。	特筆すべき遺構確認できず。
⑥	右京二条二坊十五・十六町 R122	長岡京市西ノ京15-4・91	長岡京市セ 1983.1.24～ 1983.2.3	明確な遺構、遺物は確認されず。	特筆すべき遺構確認されず。
⑦	右京二条三坊二・七町 R22・R25	長岡京市井ノ内玉ノ上・北裏（長岡第十小学校）	長岡京市セ 1979.2.7～ 1979.3.5、 1979.4.2～ 1979.9.22	二町：ほぼ中心で南北二面底をもつ4間以上×4間の東西棟掘立柱建物。その北側で3間以上×2間の東西棟掘立柱建物。西三坊坊間東小路東側溝に近い西端付近で塵芥処理穴と思われる土坑3基。その北側で10間以上×1間の南北棟掘立柱建物。 七町：3間×3間の総柱掘立柱建物、3間一面の南北棟建物。西三坊坊間東小路西側溝推定位置に近い所で南北掘立柱列。旧流路から「弟国」銘、包含層から「舎人寮」銘墨書土器。	古墳期：自然流路、土坑。弥生期：土坑。縄文後期の土坑、柱穴など。
⑧	右京二条三坊八・九町 R878	長岡京市大原野上里南ノ町地内・井ノ内北裏	京都市研 2006.6.12～ 2007.3.16	一条大路南側溝（約220m分）。同南築地相当側柱列と内溝。西三坊坊間小路の両側溝。 八町：北側ほぼ中央で5間×2間東西棟5棟。	弥生前期：土器棺墓4基、柱穴群、土坑、炉跡など。縄文晩期：住居跡7棟、土器棺墓6基、土壇墓3基など。
⑨	右京二条三坊十三～十五町 R21	長岡京市井ノ内ほか	京都府教委 1978.11.20～ 1978.12.27	No.6グリッドで土坑。一括土器群（土師器杯・皿・碗・甕・ミニチュア鉢・ミニチュアカマド、須恵器杯・蓋・壺・鉢など）。	No.8グリッドで縄文後期後半期の土器片・石匙など。
⑩	右京二条三坊十三～十六町 R27	長岡京市井ノ内ほか	京都府教委 1979.6.18～ 1979.8.31	明確な遺構、遺物は確認されず。	古墳期：竪穴住居1棟、土坑など（Eトレンチ）。
⑪	右京二条三坊十四町 R29	長岡京市井ノ内広海道17	長岡京教委 1980.2.15～ 1980.3.15	明確な遺構、遺物は確認されず。	時期不明：楕円形の土坑を検出。
⑫	右京二条三坊十四町 R167	長岡京市井ノ内広海道16-1ほか	長岡京教委・長岡京跡研 1980.9.12～ 1980.10.14	明確な遺構、遺物は確認されず。	奈良期：掘立柱建物2棟（南底をもつ2間×3間以上1棟、規模不明1棟）、東西溝、土坑。

位置番号	新条坊・調査回数	調査地所在地	調査機関・調査期間	長岡京期の調査概要	奈良時代以前の調査概要
⑬	右京二条三坊十四町 R48	長岡京市井ノ内西ノ口16	長岡京市教委・長岡京跡研 1980.9.12～1980.10.14	明確な遺構、遺物は確認されず。	古墳期：竪穴住居と考えられる土坑、焼土層、柱穴状遺構。弥生期：方形周溝墓と考えられる溝、土坑を検出。
⑭	右京二条三坊十五町 R107	長岡京市井ノ内西ノ口17-13、17-4	京都府セ 1982.7.20～1982.10.2	明確な遺構、遺物は確認されず。	古墳後期～末期：土壙墓3基。
⑮	右京二条三坊九・十六町 R850	京都市西京区大原野上里南ノ町地内	京都市研 2005.6.17～2006.6.9	調査地西端で南北方向の柵(20m)。北端で一条大路南側溝と考えられる東西方向の溝(220m)。西端の一条大路南側溝の南側で東西方向の柱穴列(35m)。二列に並ぶ東西方向の柱穴列(75m、築地関連施設か)。十六町：掘立柱建物2棟。九町：二時期の掘立柱建物8棟。	古墳期：3時期の建物群。1期(5世紀末)；竪穴住居跡。2-2期(6世紀後半)；方形総柱建物群。2-2期(6世紀末～7世紀初)；掘立柱建物群。
⑯	右京二条四坊一・八・九町 R772	京都市西京区大原野石見町地内	京都市研 2003.1.6～2003.8.6	一条大路南側溝(総延長230m)。A5・6区で木棺墓など。B1区で西三坊大路西側溝、内溝。A3区で掘立柱建物(3間×2間北庇)。B4区で掘立柱建物(2間×2間以上東庇)。B6区で掘立柱建物(5間×1間以上北庇)、覆屋のある井戸。B7区で柵列。B9区で掘立柱建物(2間×3間以上)。	古墳中期の竪穴住居15棟、掘立柱建物3棟、溝、屋外炉。弥生期：方形周溝墓。縄文晩期：土器棺墓、土壙墓。縄文～弥生期：流路など。
⑰	右京二条四坊一町 R775	京都市西京区大原野石見町地内	京都市研 2003.5.22～2003.8.12	西三坊大路路面・西側溝・内溝。2時期の門遺構、2間×3間以上の掘立柱建物、区画柵列、溝など。	古墳後期～末期：掘立柱建物6棟、区画柵列、溝など。
⑱	右京二条四坊一～四町 R830	長岡京市井ノ内頭本・広海道	京都府セ 2004.7.26～2005.3.9	明確な遺構、遺物は確認されず。Aトレンチの平安時代の井戸から「□万呂」の墨書瓦が出土。	古墳後期：竪穴住居1棟、掘立柱建物。縄文中期：土坑。
⑲	右京二条四坊三町 R753	長岡京市井ノ内広海道	京都府セ 2002.12.11～2003.2.21	明確な遺構、遺物は確認されず。時期不明の総柱建物(2間×2間以上)。	古墳後期：掘立柱建物1棟、竪穴住居1棟、土坑。
⑳	右京二条四坊二・三町 R213	長岡京市井ノ内頭本3-3他	長岡京市教委 1985.11.22～1985.12.24	明確な遺構、遺物は確認されず。Aトレンチで時期不明の東西溝(二条条間大路南側溝推定位置)。	明確な遺構、遺物は確認されず。
㉑	右京二条四坊六町 R605	長岡京市井ノ内宮山8番地ほか	長岡京市セ 1998.5.25～1998.9.14	記述なし。	古墳期：方墳2基の周溝(井ノ内3・4号墳)。3号墳から円筒埴輪や種々の形象埴輪出土(中期)。4号墳からは石製紡錘車出土(後期)。
㉒	右京二条四坊十五町 R647	長岡京市井ノ内向井芝	長岡京市セ 1999.7.19～1999.8.17	記述なし。	古墳後期：井ノ内車塚古墳(全長36m、前方後円墳)葺石は認められず。

※調査団体については、以下の略号を使用した。

京都府教委：京都府教育委員会

京都府セ：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都市研：(財)京都市埋蔵文化財研究所

長岡京市教委：長岡京市教育委員会

長岡京跡研：長岡京跡発掘調査研究所

長岡京市セ：(財)長岡京市埋蔵文化財センター

古墳時代 調査地に西接する調査⑩・⑪・⑫では中期（5世紀末）から後期（6世紀末から7世紀初）の竪穴住居・掘立柱建物・区画溝・流路などを検出した。R 107 調査⑭で後期（6世紀後半から7世紀初頭）の土壇墓などを検出した。

調査地南西側の調査⑬では後期（6世紀末）の竪穴住居・掘立柱建物の一部、調査地南側の調査⑦では後期の流路・土壇、調査⑪・⑫では竪穴住居群が廃絶した後に掘立柱建物群が造られる。また、調査⑫東端では弧状の溝を検出し、当該期の集落の東を限る溝と考えた。調査⑩では竪穴住居が検出された。

奈良時代 今回の調査区の南東約200mに位置する長岡京市立長岡第十小学校建設に伴う調査⑦では、段丘崖に沿って北西から南東方向に流れる幅約15m前後の自然河川を検出し、善峰川の旧河道と推定された。この河川は当該期にはほぼ埋没し、河川内に杭で護岸された溝が造られる。この溝埋土中から、「弟国」と書かれた墨書土器が出土して注目された。この調査地からさらに南東へ約200mに位置する調査③では、この河川の続きを検出した。この河川は、河道をかえながらも各時代を通じて北西から南東方向に流れる。その南側の調査②では、長岡京造営時に整地された河川の下層から、大量の土器類や木製品に混じって、墨書土器や文字を記した檜扇・木簡などが出土した。出土遺物には長岡京期のものも一部含まれ、「園宅」・「園司」の墨書土器や「御司」の木簡などから、周辺に当該期の宮内省園池司に関連する施設「乙訓園」が存在した可能性が推定される。調査②では石敷きの排水施設をもつ井戸も長岡京造営にあたって整地・廃棄されたようで、前記の「園」に関する施設の一部と思われ注目される。

長岡京期 調査地に西接する調査⑩・⑫・⑬では、一条大路南側溝を検出し、調査⑪・⑫では、西三坊大路西側溝を検出し、大路に東面して四脚門・築地が造られたことが明らかとなった。調査⑫では、右京二条三坊十六町で掘立柱建物・柵・井戸などを検出し、右京二条三坊九町では北側中央部に掘立柱建物・柵などを検出した。九町では建物の造られた部分のみ、一条大路に面して築地・内溝が存在したことが明らかとなった。さらに、調査⑬では一町の中央部に身舎5間×2間の東西棟5棟を南に開いた「コ」字形に配置された状態で検出した。調査地北西側の調査①では、一条条間南小路を検出し、この地域では東西条坊道路が西京極大路付近まで施行されたことが判明した。調査地南側の調査⑦では、掘立柱建物・柵などが多数検出された。特に右京二条三坊二町では、ほぼ中央に南北に庇が付く大規模な掘立柱建物が配置される。調査⑫・⑬と共に宮域に比較的近いという立地環境から、高位・高官の邸宅または官衙的施設との関連が窺える。

【各調査報告書】

- 調査① 網 伸也ほか『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 調査② 石尾政信ほか「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要(7ANIFC・GSN地区)」『京都府遺跡調査概報』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 調査③ 辻本和美ほか「長岡京跡右京第511次発掘調査概要(7ANGKN地区)」『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- 調査④ 柴 暁彦ほか『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年
- 調査⑤ 八木厚之『京都府遺跡調査概報』第80冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998年
- 調査⑥ 山本輝雄『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983年
- 調査⑦ 山本輝雄他「長岡京跡右京第22・25次調査報告書」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第11集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997年
- 調査⑧ 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 調査⑨ 奥村清一郎ほか『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983年
- 調査⑩ 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980-2』京都府教育委員会 1980年
- 調査⑪ 岩崎 誠『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1987年
- 調査⑫ 小田桐淳『長岡京市埋蔵文化財センター年報』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985年
- 調査⑬ 岩崎 誠『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1987年
- 調査⑭ 山下 正「長岡京跡右京第107次遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』第8冊 京都府教育委員会 1983年
- 調査⑮ 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 調査⑯ 加納敬二ほか『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 調査⑰ 網 伸也ほか『長岡京右京二条四坊一町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 調査⑱ 増田孝彦「長岡京跡右京第830次(7ANGKT-2・GHD-9地区)・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006年
- 調査⑲ 奥村清一郎ほか『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- 調査⑳ 中尾秀正『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1986年
- 調査㉑ 小田桐淳『長岡京市における後期古墳の調査 長岡京市文化財調査報告書』第44冊 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 2002年
- 調査㉒ 福永伸也ほか『長岡京埋蔵文化財調査報告書』第41集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 2000年

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要 (図7・8)

基本層序 今回の調査地は北西から南東へ緩やかに下降する傾斜地に位置しており、周辺には田畑が広がる田園地帯である。本調査地も調査着手以前は水田・畑として利用されていた。

地表面の標高は調査区西端で 34.8～35.0 m、東端で 34.0 m 前後となっている。調査区東端から東へ約 40 m には北西—南東方向の小畑川の段丘崖があり、約 2 m の段差をもって低くなっており、以東は小畑川の氾濫原と考えられる。

基本的な層序は、上部より現代耕作土、長岡京期遺構成立層 (第①層、自然堆積層)、弥生時代前期遺物包含層 (第②層)、自然堆積層 (第③層)、縄文時代晩期遺物包含層 (第④層)、縄文時代後期以前の自然堆積層 (第⑤層) となる。

現代耕作土は、北西から南東へ下る緩傾斜地を平坦に利用するため、田畑一筆ごとに西に薄く、東に行くにつれて厚くなる。厚いところでは 0.7 m、薄いところで 0.2 m であった。耕土と床土よりなるが、これらを除去した面が長岡京期の遺構面 (第 1 面=第①層上面) となる。

第①層 第②層を蔽う弥生時代前期以降に堆積した自然堆積層と考えられる。ほぼ調査区の全面に 0.2 m 前後の厚さで確認した。主として黄褐色系の泥砂からなる。古墳時代以降の遺構検出面であり、長岡京期の遺構もこの層の上面で検出した。

第②層・第③層 縄文時代晩期以降に堆積した自然堆積層である。この層の上面が弥生時代前期の生活面に近いと考えられ、攪拌などの作用により土壌化した層の上部を第②層、土壌化の及ばない下部を第③層と、便宜的に二層に分けたが同一層と考えている。調査では土壌化の影響で遺構の輪郭把握が困難であった第②層上面を第 2 面とし、土壌層を除去した第③層上面を第 3 面とした。第 2 面、第 3 面ともに弥生時代前期の遺構を検出し、時期差はないと理解している。第②層は灰黄褐色砂泥、中央では削平され確認できない箇所もあるが、西部で約 0.2 m、東部で 0.2～0.3 m の厚さである。第③層は黄褐色砂泥、全面で確認でき、西部では 0.1～0.2 m、東部で 0.3～0.4 m の厚さである。

第④層・第⑤層 縄文時代後期以前に堆積した自然堆積層である。大まかには、比較的安定した北西から南の黄褐色系の泥砂層と、北から南東の河川氾濫などにより供給された砂礫を主体とする堆積層からなる。この砂礫層上面は砂礫の供給量の差により地形の起伏が認められ、層中には縄文時代後期と考えられる遺物を含んでいる。先の第②層・第③層の関係と同様に同一層と考えられ、第④層はこの層の上部土壌化した 0.1～0.2 m であり、土壌化の及ばない下部を第⑤層とした。第④層の上面を第 4 面、第⑤層の上面を第 5 面とし、ともに縄文時代晩期の遺構を検出した。

遺構の概要 層序と遺構面の対応関係は、第①層上面を第 1 面 (長岡京期)、第②層上面を第 2 面、第③層上面を第 3 面 (弥生時代前期)、第④層上面を第 4 面、第⑤層上面を第 5 面 (縄文時代晩期) とした。

表2 遺構概要表

時 期	遺 構
長岡京期	一条大路南側溝・築地・内溝、西三坊坊間東小路・両側溝、掘立柱建物2棟、暗渠、造営期整地遺構
奈良時代以前	溝数条
弥生時代	竪穴住居1棟、土器棺墓2基、溝2条、土坑、柱穴多数、炉
縄文時代	竪穴住居1棟、土器棺墓18基、土坑1基、溝状遺構2条、炉、土坑

第1面では、長岡京期の一条大路や西三坊坊間東小路に関する遺構と、三坊八町では掘立柱建物などを検出した。また、やや先行する造営期の遺構として三坊一町で整地に関する遺構や八町では排水に関すると考えられる遺構を検出した（第1-2面）。さらに同一面で奈良時代以前と考えられる溝などを検出した。第2面・第3面では、弥生時代前期の竪穴住居、土器棺墓、溝、土坑、ピット、炉などを検出した。第4面・第5面では、縄文時代晩期の竪穴住居、炉、土器棺墓、土坑、大溝、ピットなどを検出した。

(2) 長岡京期の遺構（図版1、7～9）

長岡京期の遺構は第1面と第1-2面で検出した。第1面は近現代の耕作土を削除してからの遺構面である。黄褐色泥砂の自然堆積層（第①層）が緩やかに東へ傾斜する。西部では長岡京期以前の面を露出する地区も一部に見られることから、後世の人為的削平、或いは自然的な削平を受けたことが窺われた。調査区内は長岡京における右京二条三坊一町・八町の北辺に当たり、一町内の主要な遺構としては柱穴列2条、溝などがある。八町内においては建物2棟、柱穴列1条、築地柱穴列1条、溝などがあり、西三坊坊間東小路に伴う遺構には東西両側溝、一条大路に伴う遺構には南側溝がある。これらは長岡京期造営期の遺構群である。

建物1（図9、図版8） 調査区の西部中央に位置する東西3間、南北3間の総柱の掘立柱建物である。条坊では八町の北東隅に相当する。柱間は東西1.5m、南北1.7mでそれぞれ等間隔で並ぶ。掘形の平面形は径0.7～1.0mの隅丸形状を呈し、深さは0.5～0.6m。径0.30～0.35mの柱を据えており、柱根の遺存するものが9基ある。柱の深さは約0.4mで底面高を揃えている。柱の材質は全て桧である。柱の径が比較的大きく、総柱であることから高床式の倉庫であった可能性が高い。柱穴掘形は東側の南北2列の規模が大きく、西側2列は小さい。また、掘形の大きい東側2列が北に対し東へ振れており、西側2列は正方位に向けて掘られている様相が認められる。建物の振れは2006年度調査と同一で、建物3057の身舎の南辺柱筋の東延長ラインと、建物1の北から2列目の東西ラインが揃えられている。

出土遺物は柱穴、掘形から土師器、須恵器などが少量出土している。木製品には桧の柱部材が

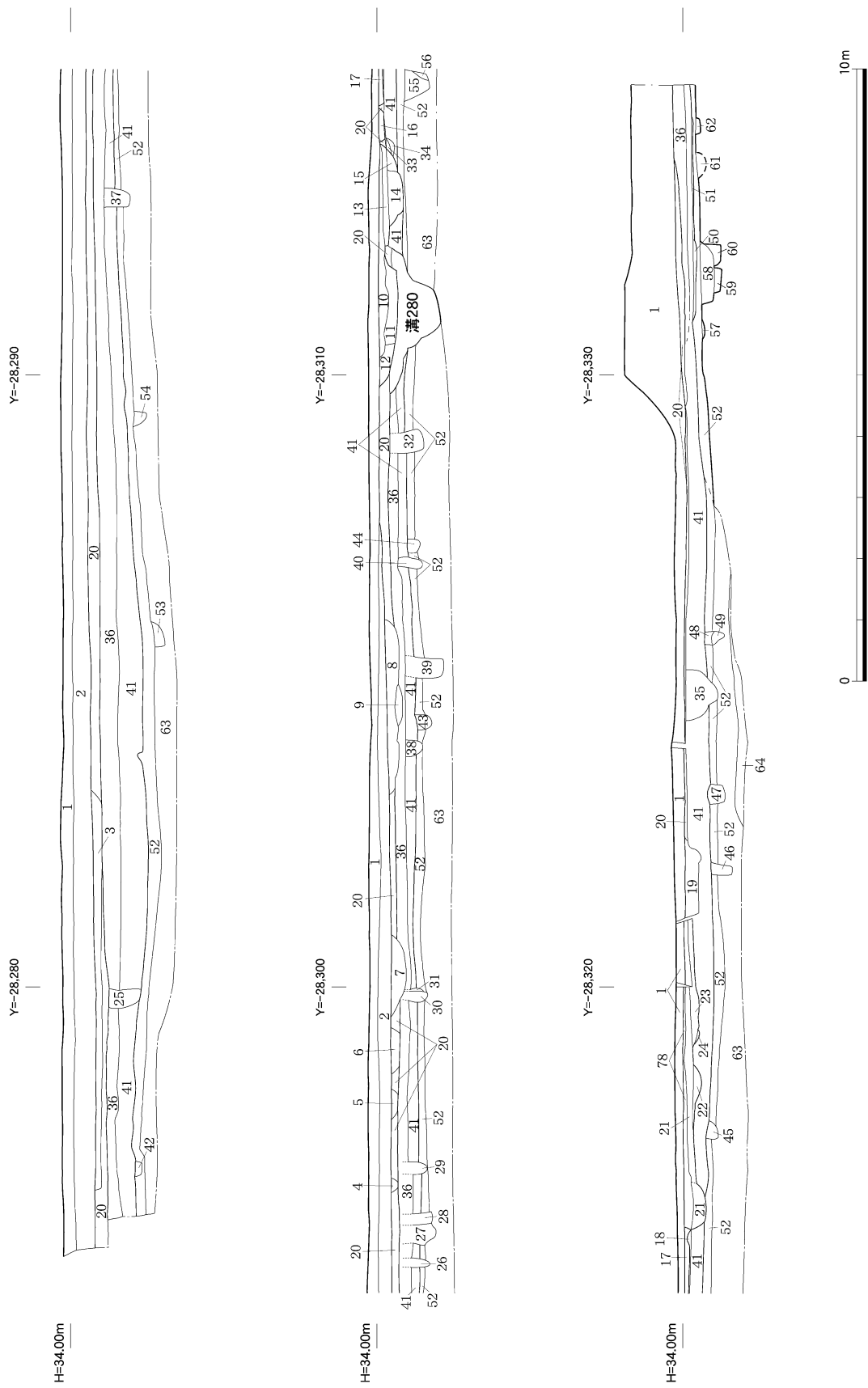


図7 調査区南壁断面図 (1 : 100)

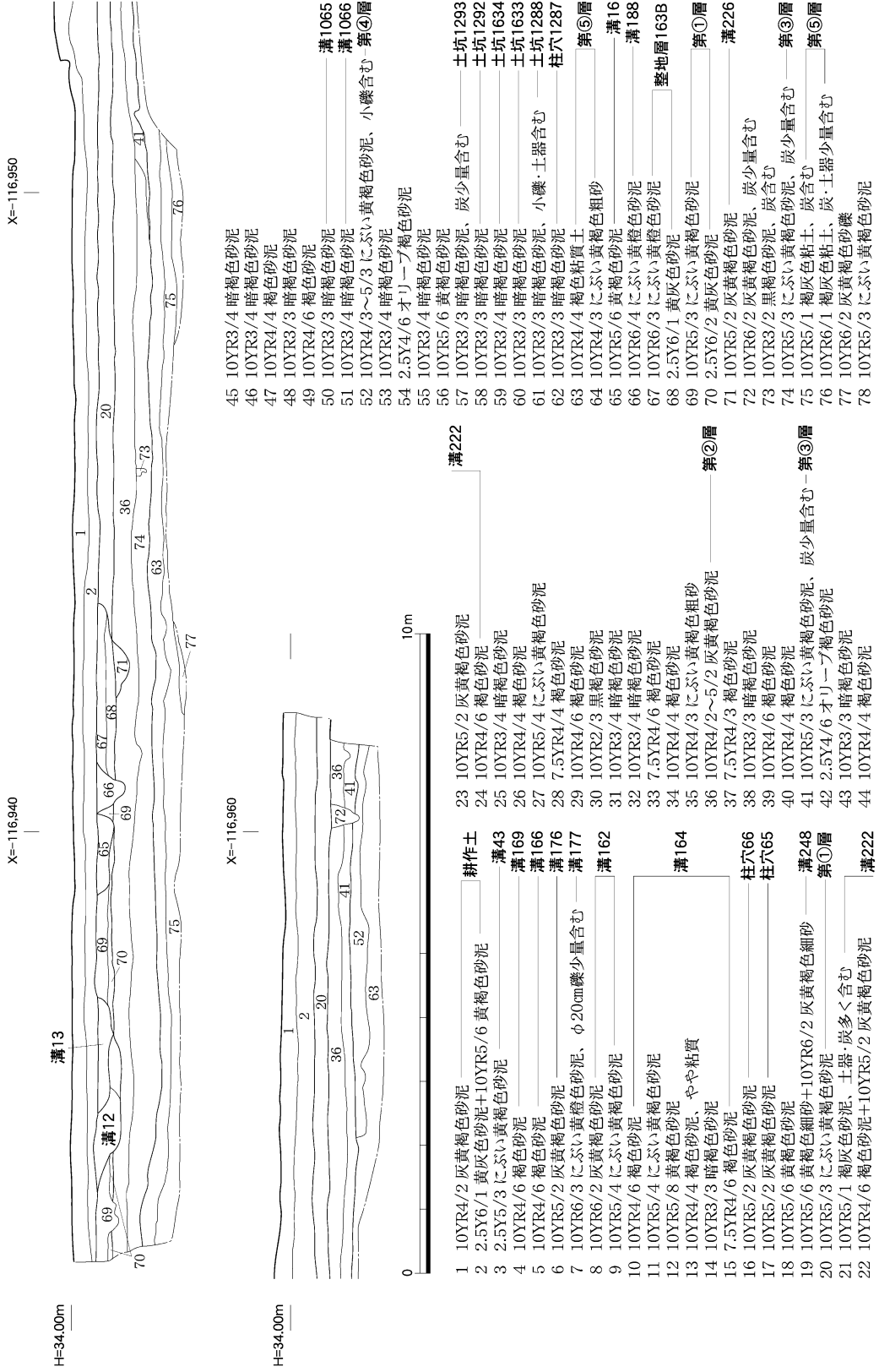


図 8 調査区東壁断面図 (1 : 100)

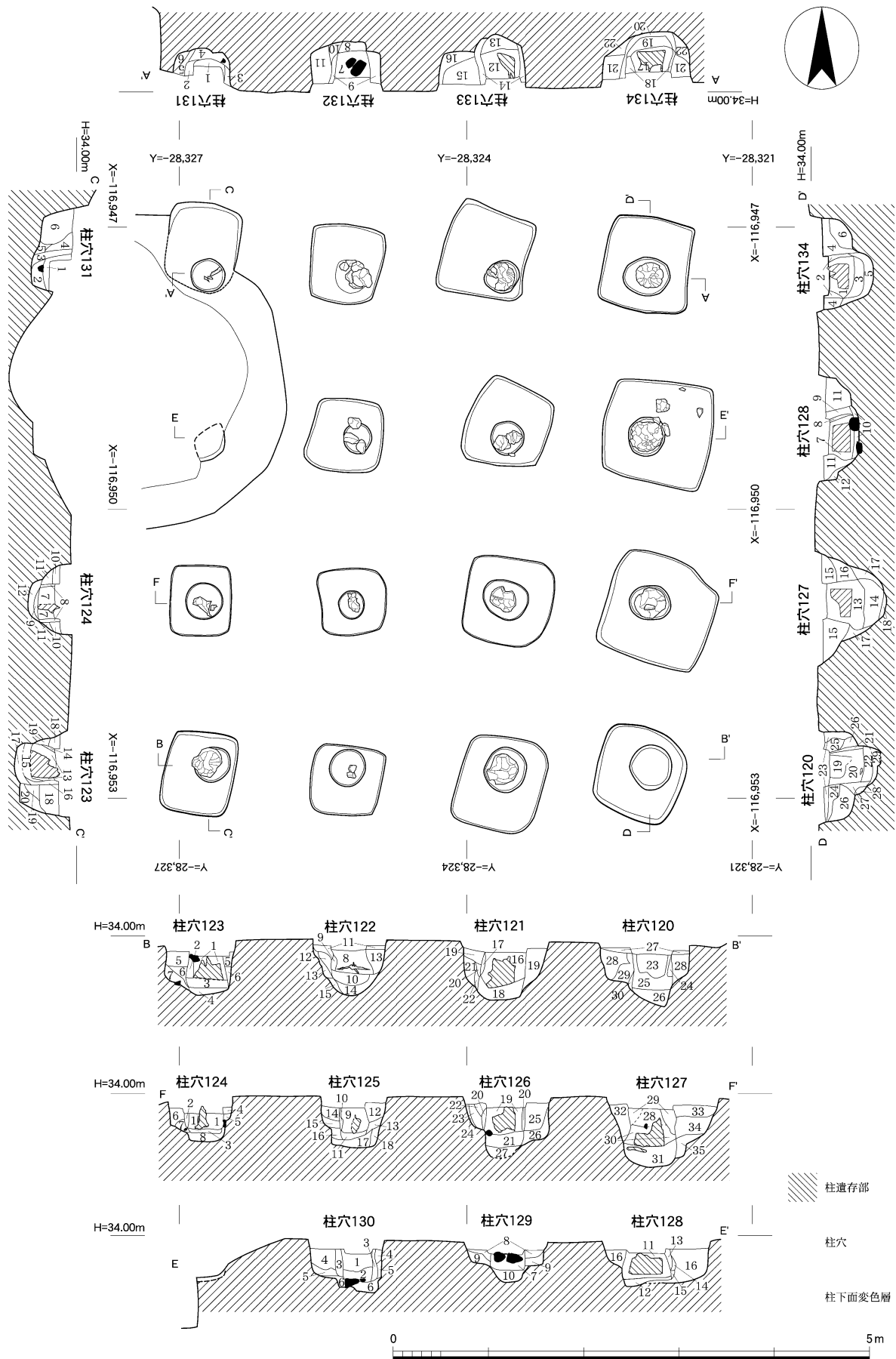
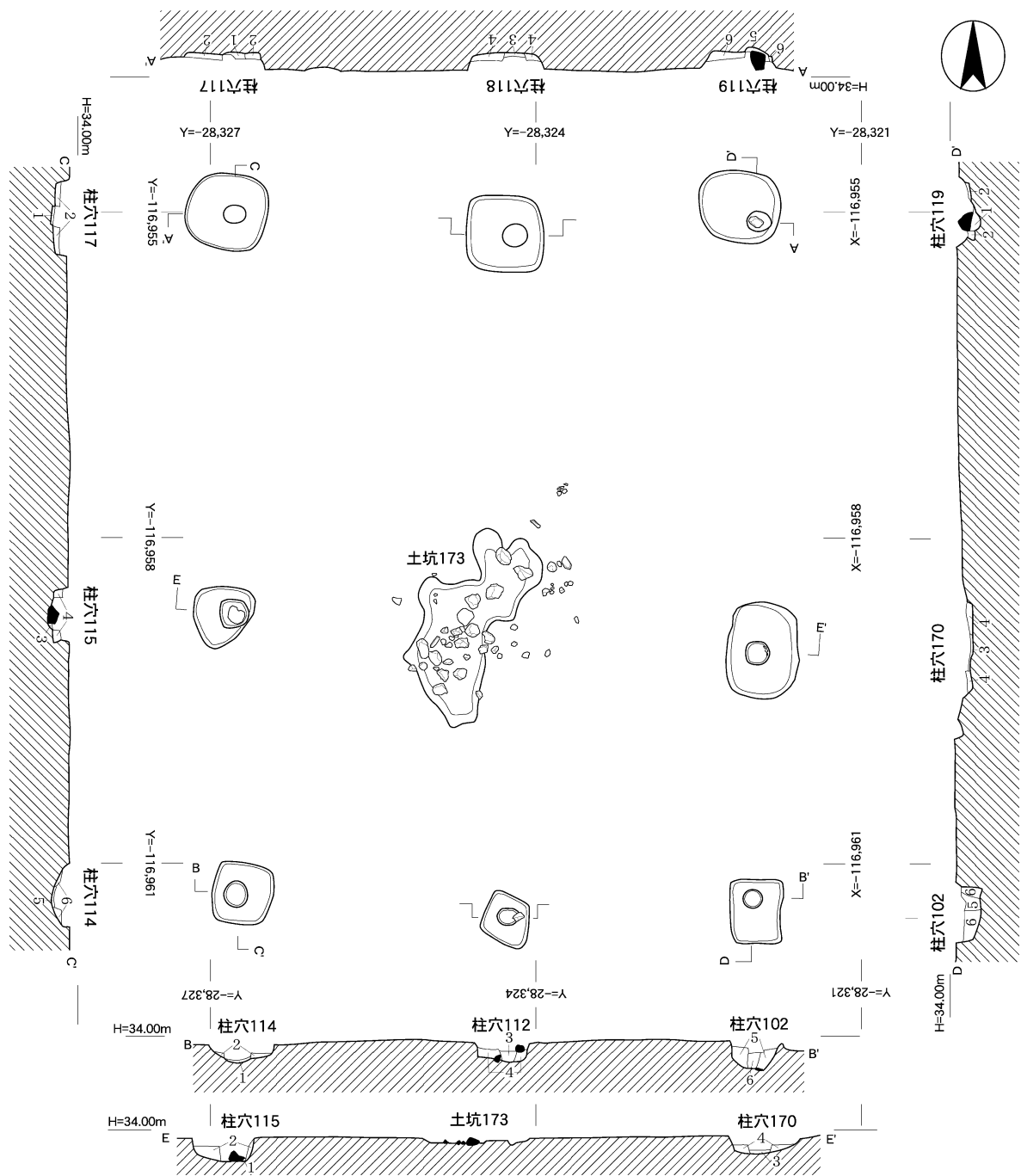


图9 建物1実測図 (1:60)

- A-A'
- 柱穴131**
 1 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (柱当)
 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 3 2.5Y6/1 黄灰色泥砂
 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 5 7.5YR4/6 褐色砂泥
 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 柱穴132**
 7 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (柱当)
 8 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
 9 10YR4/4 褐色砂泥
 10 10YR3/3 暗褐色砂泥
 11 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 柱穴133**
 12 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 13 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥
 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 15 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 16 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 柱穴134**
 17 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 18 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 19 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
 20 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 21 10YR4/6 褐色砂泥
 22 10YR3/4 暗褐色砂泥
- B-B'
- 柱穴123**
 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 3 10YR6/1 褐灰色粘質土、φ2~3cm礫含む
 4 10YR4/6 褐色粘質土
 5 10YR4/6 褐色砂泥
 6 10YR4/4 褐色砂泥
 7 10YR4/6 褐色砂泥
- 柱穴122**
 8 10YR5/2 灰黄褐色粘質土、木片含む
 9 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 10 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 11 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
 12 10YR5/6 黄褐色砂泥
 13 10YR4/6 褐色砂泥
 14 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
 15 10YR5/6 黄褐色粘質土
- 柱穴121**
 16 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (柱当)
 17 10YR5/6 黄褐色砂泥やや粘質 (柱当)
 18 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 19 10YR5/6 黄褐色砂泥
 20 10YR4/6 褐色砂泥
 21 10YR4/4 褐色砂泥
 22 10YR5/6 黄褐色砂泥やや粘質
- 柱穴120**
 23 10YR5/6 黄褐色砂泥粘質土 (柱当)
 24 10YR5/6 黄褐色砂泥 (柱当)
 25 10YR6/1 褐灰色粘質土
 26 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 27 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥
 28 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 29 10YR4/6 褐色砂泥
 30 10YR6/1 褐灰色粘質土
- C-C'
- 柱穴131**
 1 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (柱当)
 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 4 7.5YR4/6 褐色砂泥
 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
 6 2.5YR4/6 オリーブ褐色砂泥
- 柱穴124**
 7 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (柱当)
 9 2.5Y5/1 黄灰色粘質砂泥 (柱痕下面)
 10 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 11 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
 12 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、小礫含む
- 柱穴123**
 13 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 14 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 15 10YR6/1 褐灰色粘質土、φ2~3cm礫含む
 16 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
 17 10YR4/6 褐色粘質土
 18 10YR4/6 褐色砂泥
 19 10YR4/4 褐色砂泥
 20 10YR4/6 褐色砂泥

- D-D'
- 柱穴134**
 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 3 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
 4 10YR4/6 褐色砂泥
 5 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 6 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 柱穴128**
 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥やや粘質 (柱当)
 8 10YR5/6 黄褐色砂泥
 9 10YR4/4 褐色砂泥
 10 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 11 10YR4/4 褐色砂泥
 12 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 柱穴127**
 13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 14 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱痕下面)
 15 10YR4/6 褐色砂泥
 16 7.5YR4/3 褐色砂泥
 17 10YR4/6 褐色砂泥
 18 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 柱穴120**
 19 10YR5/6 黄褐色砂泥 (柱当)
 20 10YR6/1 褐灰色粘質土
 21 10YR5/6 黄褐色砂泥 (柱当)
 22 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 23 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥
 24 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 25 10YR4/6 褐色砂泥
 26 10YR2/3 黒褐色砂泥
 27 10YR6/1 褐灰色粘質土
 28 10YR3/4 暗褐色砂泥
 29 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- E-E'
- 柱穴130**
 1 7.5YR4/3 褐色砂泥 (柱当)
 2 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂やや粘質
 3 10YR5/6 黄褐色砂泥
 4 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
 5 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
 6 10YR4/4 褐色砂泥
- 柱穴129**
 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥やや粘質
 8 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥
 9 10YR4/6 褐色砂泥
 10 7.5YR4/4 褐色砂泥やや粘質
- 柱穴128**
 11 10YR5/2 灰黄褐色砂泥やや粘質 (柱当)
 12 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
 13 10YR5/6 黄褐色砂泥
 14 10YR3/4 暗褐色砂泥
 15 7.5YR3/3 暗褐色砂泥
 16 10YR4/4 褐色砂泥
- F-F'
- 柱穴124**
 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (柱当)
 3 2.5Y5/1 黄灰色粘質砂泥 (柱痕下面)
 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 5 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
 6 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 7 10YR4/4 褐色砂泥
 8 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、小礫含む
- 柱穴125**
 9 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 10 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (柱当)
 11 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (柱痕下面)
 12 10YR4/4 褐色砂泥
 13 4/3 にぶい黄褐色砂泥
 14 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 16 10YR3/4 暗褐色砂泥
 17 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
 18 10YR4/4 褐色砂泥
- 柱穴126**
 19 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質砂泥 (柱当)
 20 10YR4/4 褐色砂泥 (柱当)
 21 2.5Y6/2 灰黄色粘質砂泥 (柱痕下面)
 22 10YR5/8 黄褐色砂泥
 23 10YR5/6 黄褐色砂泥
 24 10YR3/4 暗褐色砂泥
 25 10YR4/6 褐色砂泥
 26 10YR5/6 黄褐色砂泥
 27 10YR4/6 褐色砂泥
- 柱穴127**
 28 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 29 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (柱当)
 30 2.5Y5/1 黄灰色砂泥
 31 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (柱痕下面)
 32 10YR4/6 褐色砂泥
 33 10YR4/6 褐色砂泥
 34 7.5YR4/3 褐色砂泥
 35 10YR4/6 褐色砂泥



- | | | |
|--|--|--|
| <p>A-A'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴117 <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 (柱穴) 2 10YR4/4 褐色砂泥 柱穴118 <ul style="list-style-type: none"> 3 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (柱穴) 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 柱穴119 <ul style="list-style-type: none"> 5 10YR5/2~6/2 灰黄褐色砂泥 6 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 | <p>B-B'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴114 <ul style="list-style-type: none"> 1 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 (柱穴) 2 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 柱穴112 <ul style="list-style-type: none"> 3 7.5YR4/6 褐色砂泥 (柱穴) 4 7.5YR4/3 褐色粘質土 柱穴102 <ul style="list-style-type: none"> 5 2.5Y6/2 灰黄色泥砂 6 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 (柱穴) | <p>C-C'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴117 <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 (柱穴) 2 10YR4/4 褐色砂泥 柱穴115 <ul style="list-style-type: none"> 3 7.5YR4/6 褐色砂泥、径20cm礫含む (柱穴) 4 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 柱穴114 <ul style="list-style-type: none"> 5 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 (柱穴) 6 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 |
| <p>D-D'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴119 <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR5/2~6/2 灰黄褐色砂泥、径20cm礫含む (柱穴) 2 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 柱穴170 <ul style="list-style-type: none"> 3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、炭微量・須恵器含む 4 2.5Y6/3 黄色砂泥 柱穴102 <ul style="list-style-type: none"> 5 2.5Y6/2 灰黄色泥砂 6 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 | <p>E-E'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴115 <ul style="list-style-type: none"> 1 7.5YR4/6 褐色砂泥 2 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 柱穴170 <ul style="list-style-type: none"> 3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、炭微量・須恵器含む 4 2.5Y6/3 黄色砂泥 | |

図10 建物2実測図 (1:60)

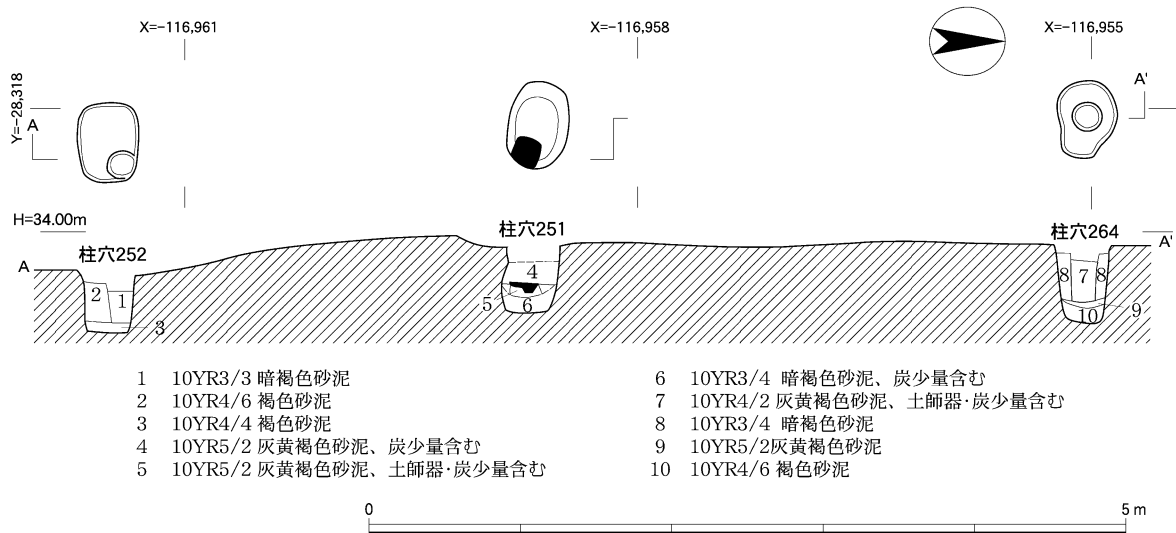


図 11 柱穴列3実測図 (1 : 50)

ある。

建物 2 (図 10、図版 8- 1) 建物 1 の南に位置する東西 2 間、南北 2 間の南北掘立柱建物である。桁行柱筋は建物 1 に揃う。柱間は梁行が西から 2.6m、2.25m と不揃いである。桁行は西列が北から 3.65m、2.55m、東列が 3.95m、2.3m といずれも北側柱間が広く不揃いで、梁行の中間柱が南に 0.15 ~ 0.2m ずれる。掘形平面形は径 0.5m ~ 0.7m の円形・方形状を呈する。深さは 0.1 ~ 0.2m 前後と浅く、柱当りも顕著に痕跡を残すものではないが、2006 年度調査の建物 9 身舎北側列柱筋の延長が桁行 2 列目の柱穴 115 とほぼ揃う。なお建物の中央南寄りでは 2 列目に並ぶ土坑 173 を検出した。平面形は不整形で深さも浅く、拳大の礫が散乱するなどの状況を確認したが、柱穴は検出できなかった。

出土遺物は掘形、柱穴から土師器、須恵器などが少量出土している。

柱穴列 3 (図 11) 建物 2 の東に位置する南北柱穴列である。建物 2 とは東側南北列柱筋から約 3m 離れて位置する。検出長は 2 間分 6.8m、柱間は北から 3.6m、2.9m と不揃いであるが、建物 2 の東西列柱筋とはほぼ揃う。掘形平面形

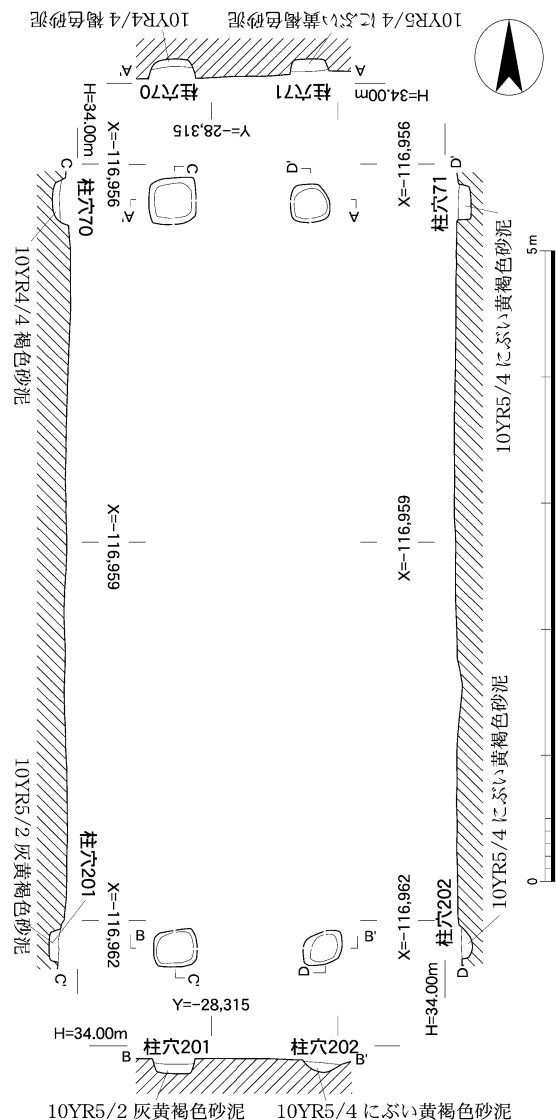


図 12 柱穴列5A実測図 (1 : 60)

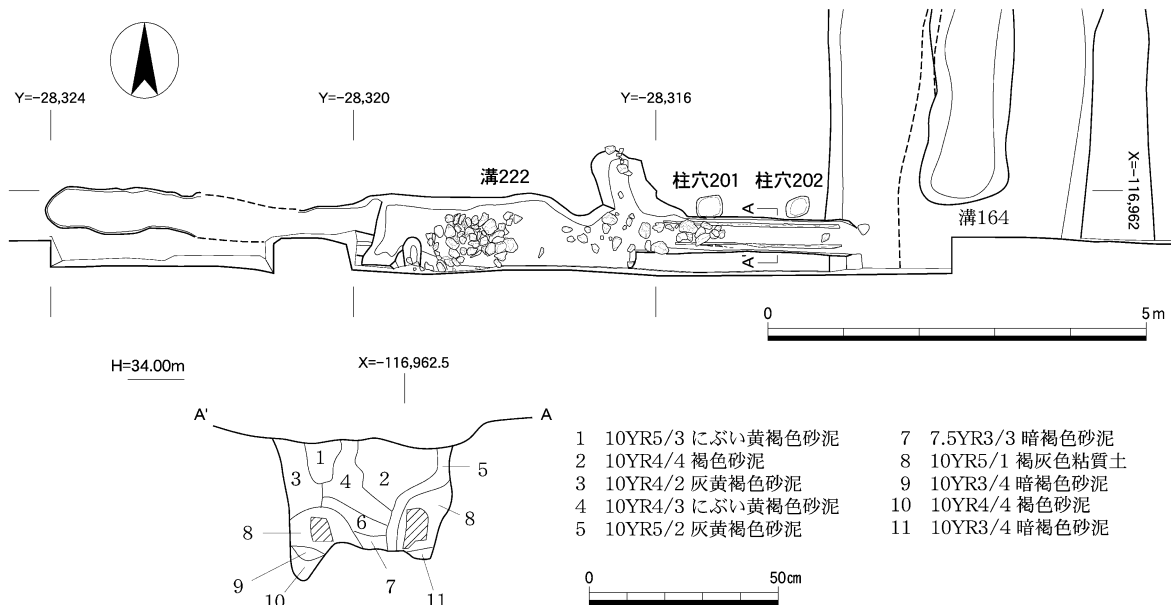


図 13 溝 222 実測図 (平面図 1 : 100、断面図 1 : 20)

は 0.4 ~ 0.5 m の楕円形状を呈し、深さは 0.4 ~ 0.5 m。柱穴 252・264 では柱当りを検出したが、柱根は残存していなかった。

出土遺物は土師器、須恵器などが出土している。

柱穴列 5A (図 12、図版 9- 1) 調査区の中央部、西三坊坊間東小路の西側築地推定ラインに位置する 2 条の柱穴列である。柱穴列 3 ラインから 3.6 m はなれて平行に並ぶ。柱間は南北がそれぞれ 5.9 m、東西柱間 1.1 ~ 1.2 m。掘形平面形は 0.3 ~ 0.35 m の円形・方形状を呈し、深さは 0.15 m 前後と浅い。築地に伴う版築などの痕跡は検出しておらず、これが築地そのものの芯柱列か、あるいは築垣状のものの柱列なのか断定できない。南に接して暗渠である溝 222 があることから南へ延びると考えられる。これらは 2005 年度・2006 年度調査において一条大路南側溝の南に東西方向に柱間約 6 m で検出した柱穴列と同様な遺構と考えられる。

出土遺物は少量の土師器が出土している。

溝 222 (図 13、図版 9- 1・ 2) 八町の東部南端に位置する東西方向の暗渠を伴う溝である。検出長は約 6.4 m。溝の西部は不整形で幅 1 m 前後の素掘りであり、東部 2.4 m 分は幅が 0.5 m と狭まり暗渠となって、柱穴列 5A の下をくぐり、東小路西溝 164A に取り付く。深さは西部で 0.05 m と浅く、暗渠部は 0.4 m と深くなる。暗渠部は底部の両側に側板が幅 0.2 m に据えられ、木樋状となり、八町内から側溝へ排水がなされたと考えられる。埋土には炭化物を多く含み、拳大の礫や土器の出土も多量に含んでいる。これらは八町内の建物関連の施設などを廃棄する際に捨てられたものと推定される。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦が多量に出土しており、この時期の一括遺物である。

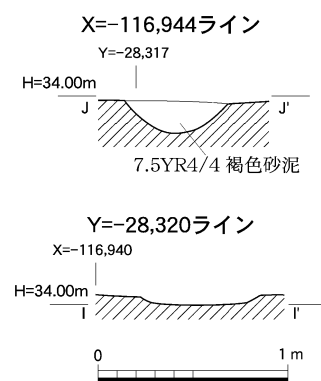


図 14 溝 172 断面図 (1 :

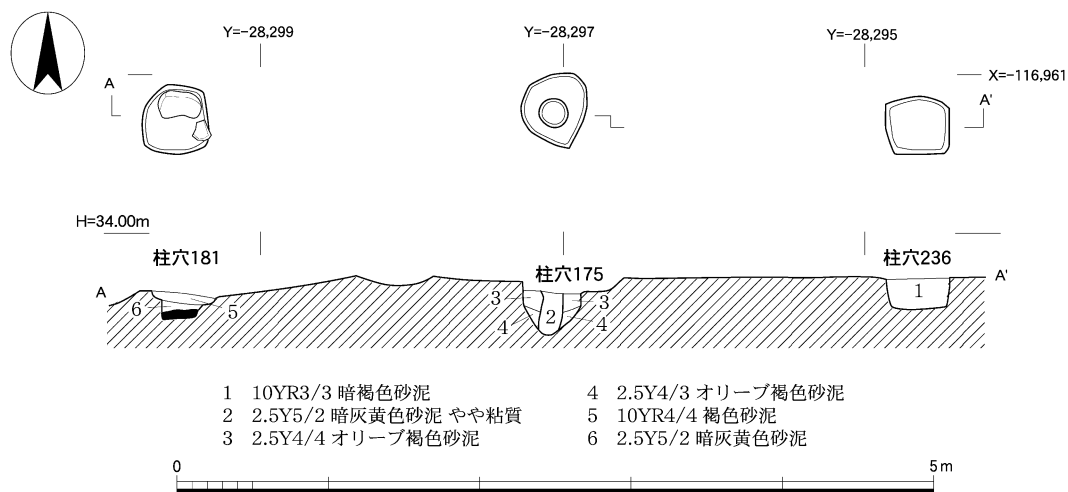


図 15 柱穴列 4 実測図 (1 : 50)

溝 172 (図 14) 調査区の北西部、八町の北辺および東辺に位置する L 字状の小溝である。2006 年度調査の溝 1008 の東延長部に当たり、八町の内溝に相当する。検出長は東西が途切れながらも約 17.6 m、南に屈曲し南北は 5.8 m まで確認した。幅 0.2 ~ 0.5 m、深さは 0.05 ~ 0.2 m。西側溝 164A との溝芯々間約 5 m、同 B とは約 3.9 m となる。

出土遺物は土師器、須恵器などが少量出土している。

柱穴列 4 (図 15) 調査区の中央部南端、一町の西部に位置する東西柱穴列である。東西二間分 5.25 m、柱間は 2.4 m 前後で等間隔である。掘形平面形は 0.4 ~ 0.45 m の円形・方形状を呈し、深さは 0.2 ~ 0.3 m。柱穴 175 では柱当りを検出した。柱穴 181 は深さが 0.3 m、底部に幅 0.15 m、長さ 0.2 m、厚さ 0.5 m の平坦な石が据えられる。

出土遺物は土師器が少量出土している。

柱穴列 5 B (図 16) 調査区の中央南端部、西三坊坊間東小路東側溝 162 の東、一町の内溝 188 の西、築地相当部分に位置する。柱間は東西 1.2 m、掘形平面形は 0.32 ~ 0.35 m の方形状を呈し、深さは 0.1 m 前後と浅い。八町側の柱穴列 5 A と対応する位置にあり、南北に延長する築地に関連する柱穴列の可能性がある。東西柱筋は柱穴列 5 A の南側ラインとは北に 0.4 m ずれ、推定築地芯々間では 12.3 m を測る。

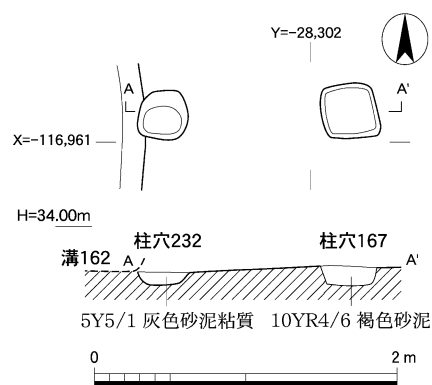


図 16 柱穴列 5 B 実測図 (1 : 50)

出土遺物は少量の土師器が出土している。

溝 16 (図 17) 調査区の東部北に位置する東西方向の溝である。一町の北辺に位置することから内溝に相当するものと考えられた。後述する溝 188 より新しい段階の遺構である。検出長は約 18 m で調査区外東に延びる。断面形態は緩やかに下がる浅いレンズ状を

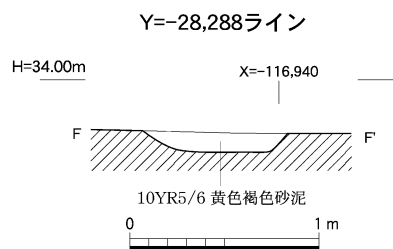


図 17 溝 16 断面図 (1 : 40)

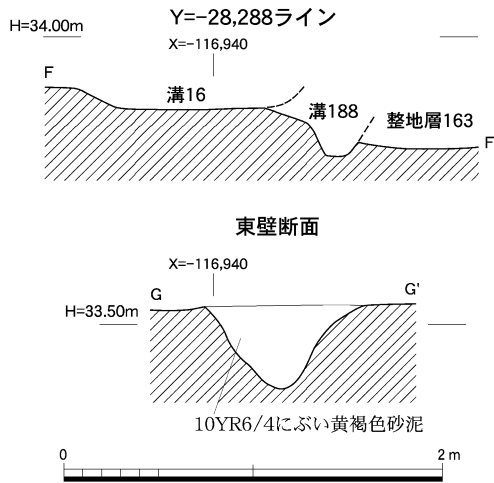


図 18 溝 188 断面図 (1 : 40)

呈し、幅 0.9 ~ 0.1 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m と浅い。底面は 0.18 m の高低差で緩やかに東へ下がっている。

出土遺物は土師器が少量出土している。

溝 188 (図 18) 調査区の東部に位置する L 字状の溝である。一町内北西隅に相当し、調査区の東部全域で検出した。東・南方向共に調査区外に延びる。検出長は東西部分が 20.2 m、南北部分が 25.8 m あり、幅は 0.4 ~ 0.6 m、南北部分の南端で 1.0 ~ 1.8 m と不整形に広がる。底面の標高は北西隅では 33.57 m、南部もほぼ同レベルである。東端部で 33.2 m と約 0.4 m の高低差があり、東へ下がる。八町の内溝と考えられる。溝 162 との溝芯々間は約 4 m、一条大路南側溝 13 とは約 3.9 m となる。

出土遺物は土師器、須恵器などが出土している。

一条大路 (図版 7 - 2) 調査区の北部、南側溝 13 の北に位置する。条坊推定位置から一条大路であると判断した。検出長は 27.8 m で東西は調査区外に延び、北部は調査区外となり未検出である。標高は Y=-28,300 で 33.77 m、Y=-28,290 で 33.74 m、Y=-28,276 で 33.56 m と東へ下がる傾斜をもつ。路面として機能していた痕跡や、両側溝に伴う護岸施設などは検出しなかった。

出土遺物は少量であるが土師器、須恵器、瓦が出土している。

溝 13A・B (図 19) (溝 13A- 新期) 調査区の西部北端部から東部北寄りに位置する東西方向の溝である。2003 年度から 2006 年度まで検出確認した一条大路南側溝に相当する。西部から中央部にかけては調査区設定の都合で南肩の検出に限られるが、約 58 m を検出した。断面形態は緩やかに下がる浅いレンズ状を呈する。幅 1.6 ~ 1.8 m 前後、深さは 0.18 m、底面の標高は

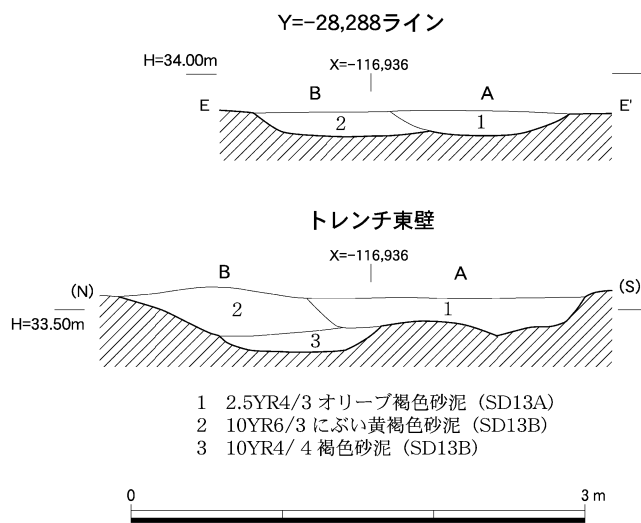


図 19 溝 13A・B 断面図 (1 : 50)

Y=-28,302 ラインで 33.70 m、東端部の Y=-28,274.50 で 33.30 m と約 0.30 m の高低差で東に傾斜、調査区外に延びる。護岸などの施設は検出できなかった。

(溝 13B- 古期) 溝 13 は Y=-28,304 ライン付近から北に振れる先行する溝の北肩を検出した。当初は東で北に振れていた溝 (B) をのちに南へ振れを変えて掘り直したと考えられる (A)。不整形な北肩は調査区東端部まで約 19 m 続き、底面標高は Y=-28,274.50

で33.22 mとやや東への傾斜が大きかったと考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器などが出土している。

西三坊坊間東小路 調査区の中央で溝 164・162 の部分である。長岡京条坊推定位置から考え、西三坊坊間東小路であると判断した。検出長は南北が約 23.8 m、幅が 3.4～3.8 m。標高は X=-116,940 で 33.91 m、X=-116,952 で 33.92 m、X=-116,960 で 33.76 mと南へ下がる傾斜をもつ。後世の削平を受け、路面として機能していた痕跡などは検出しなかった。

出土遺物は少量であるが土師器、須恵器が出土している。

溝 164A・B (図 20) (溝 164A- 新期) 調査区の中央部西に位置する南北方向の溝である。八町の東に隣接することから西三坊坊間東小路西側溝に相当するものと考えた。検出長は約 23.8 m で南北ともに調査区外に延びる。断面形態は緩やかに下がる浅いレンズ状を呈す。幅は北端部で約 3.2 m、中央部は約 4.2 m、南端部は約 3.4 mである。底面標高は X=-116,940 で 33.80 m、X=-116,956 で 33.80 m、X=-116,962 で 33.72 mと、南北で高低差はない。底面中央部には幅 1.1～1.3 m、深さ 0.15 m前後の浅い窪みが南北に続き、これが新期の西側溝底部と考えられる。護岸などの施設は検出しなかった。

(溝 164B- 古期) 164A の西肩に接して南北方向の落ちとして検出した。幅は 1.2～1.6 m、深さは 0.2 m前後で 13A 同様に南北に続く。底面の標高は 164A とほぼ同じである。断面の土層観察から造営当初は幅の狭い溝 (164B) として造られたが、ある時期埋まって掘り直され、廃都後には溝の肩が崩れ、幅が広がってしまった (164A) ののではないかと考えている。

出土遺物は土師器、須恵器、土製品などが出土している。

溝 162 (図 21) 調査区の中央部東に位置する南北方向の溝である。一町の西端に位置することから西三坊坊間東小路東側溝に相当するものと考えた。西側溝 164A との溝芯々距離は約 7 m、同 164B とは 8.4 mである。検出長は約 23.8 m で南北ともに調査区外に延びる。断面形態は緩や

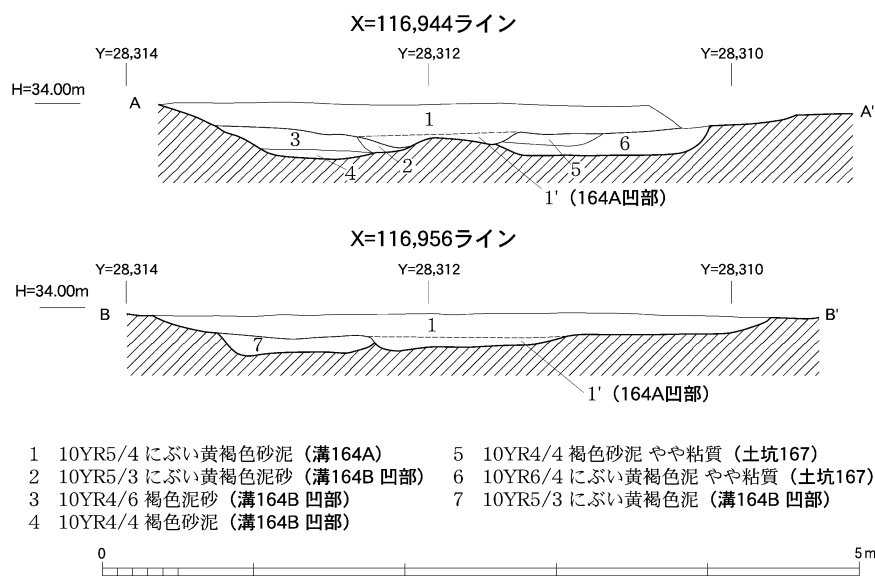


図 20 溝 164A・B 断面図 (1 : 50)

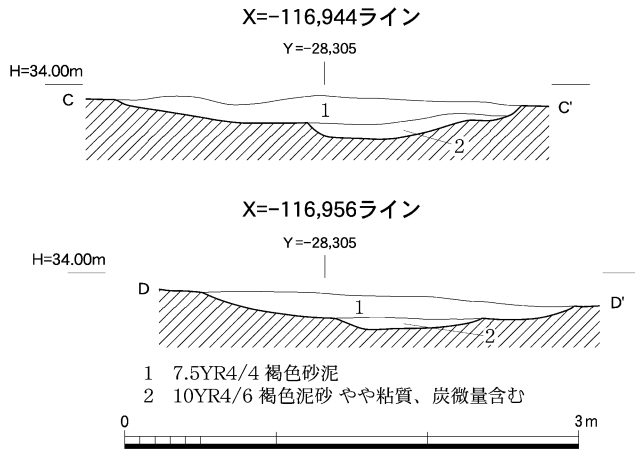


図 21 溝 162 断面図 (1 : 50)

かに下がる浅いレンズ状を呈し、一段深い落ちが東寄りで南北に続く。幅は北端部で約 2.3 m、中央部は約 2.6 m、南端部は約 2.8 m である。底面標高は X=-116,940 で 33.63 m、X=-116,956 は 33.60 m、X=-116,962 は 33.60 m となり南北で大きな高低差はない。護岸などの施設は検出しなかった。この溝は西側溝 164 のように明瞭ではないが、古い段階の狭い溝が埋まった後に

掘直され、廃都後に肩が崩れ、幅広の溝となるという同じ様相を示している。

出土遺物は土師器、須恵器、土製品などが出土している。

(3) 長岡京造営期以前の遺構 (図版 2・9・10)

第 1 - 2 面は第 1 面とした遺構群に先行すると考えた遺構群である。時期としては長岡京造営時とそれ以前の遺構である。長岡京造営時の遺構には、一町内では整地層、溝、土坑などがあり、八町内においては土坑などがある。八町内で検出した長岡京期の遺構と振れが異なる溝は長岡京期以前の遺構とした。

整地層 163 (図版 10- 1) 調査区の東部で検出した、一町内に L 字状に堆積する整地層である。東西は第 1 面で検出した溝 188 に沿って約 25.5 m、幅が約 3.5 m。南北が溝 188 に沿って約 22 m、幅が 7.5 ~ 10.0 m。深さは 0.1 ~ 0.2 m である。南部は広がりをもち不整形、北部は一定した肩口が東西に走る。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦、木製品が出土している。

小溝 180・189 ~ 194 (図 22、図版 10- 1) 調査区の東部、一町の整地層 163 の下面で検出した小溝群である。検出長は 1.9 ~ 7.6 m、幅 0.3 m、深さは 0.5 ~ 0.8 m である。全ての溝は溝 188 に向かって緩やかに傾斜して交差する。南北の小溝は北に向かってわずかに東に振れ、東西の

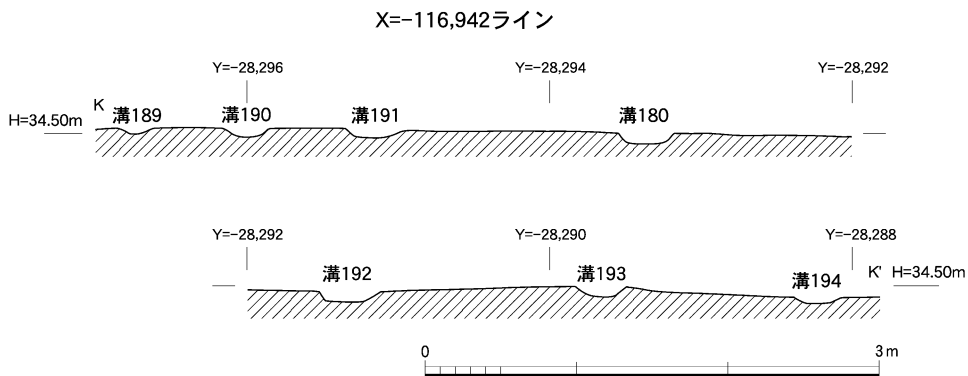


図 22 小溝 180・189 ~ 194 断面図 (1 : 50)

小溝は北に向かって西がわずか南に振れる。

出土遺物は少量であるが土師器、須恵器が出土している。

土坑 223 (図 23、図版 10- 2) 調査区の北西部、八町の内溝 172 の北東隅部分の下層に南北に位置する。不定形な楕円形の土坑である。南北が 4.8 m、東西は 3.0 m。深さは北部で深さ約 0.3 m、南部で約 0.5 m。埋土は炭を含む褐色砂泥、下層に炭・土器を含むにぶい黄褐色砂泥、最下層に灰黄褐色砂泥・灰色粘土が堆積する。最下層に粘土層が堆積することから滞水による堆積と考えられる。北部では底面に径 0.1 ~ 0.2 m の礫が散布し、南部では灰色粘土層上に土器や礫が散布する。この土坑が埋まってから内溝 172 が造られており、不要となった土器や礫を廃棄した土坑であると考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器が多量に出土しており、この時期の一括遺物である。

土坑 67A・B (図 24、図版 10- 2) 土坑 223 と一連の遺構と考えられ、真南に続く溝状土坑である。内溝 172

の南北ラインに沿い、不定形に南部まで連続する。北部は (67A) は幅 3.3 m、中央部で一旦狭まり、南部 (67B) は幅 3 m となる。67A では深さ 0.1 ~ 0.3 m、南部に土坑状に凹む箇所があり、一括投棄された土器群を検出した (図版 9- 3)。土師器などの椀・杯・皿類の良品が重なるように出土している。67B で内溝の推定ライン沿いである東肩部に拳大の礫が密に散布し、方形状に落ち込む。南北 4.3 m、東西 2.8 m。深さ 0.5 ~ 0.8 m。埋土は上層が炭化物を多量に含んだ黄褐色砂泥、下層に微細粒を含んだ褐灰色粘土層となる。下層の粘土層は滞水したことを窺わせる。

出土遺物は A・B 共に土師器、須恵器、黒色土器、土製品、革製品などが多量に出土しており、この時期の一括遺物である。

土坑 280A・B (図 25) 調査区の中央部、第 1 面の溝 164 の下面で検出した溝状遺構である。X=-116,950 付近から不定形に南まで連続し、南部で深く落ち込み、調査区外南に延びている。北部の 280A は幅が 1.4 ~ 2.6 m 前後、深さは 0.1 ~ 0.15 m。南部の 280B は北部で深さ 0.35 m、南端部では一段下がって 0.63 m を測り、調査区外へと延びる。埋土はにぶい黄褐色砂泥が全体に堆積するが、B では下層にオリーブ褐色砂泥粘土・暗灰黄褐色粘土が堆積し、土坑 67 同様に滞水があったと考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器、木製品などが 280B を主体に多量に出土しており、この時期の一括遺物である。

土坑 230 (図 26) 調査区の東部、南西寄りに位置する。長軸を北西 - 南東方向にもつ長円形土坑。長軸が約 1.7 m、最大幅 0.9 m。深さ約 0.15 m。埋土はにぶい黄褐色砂泥。南肩と底面において

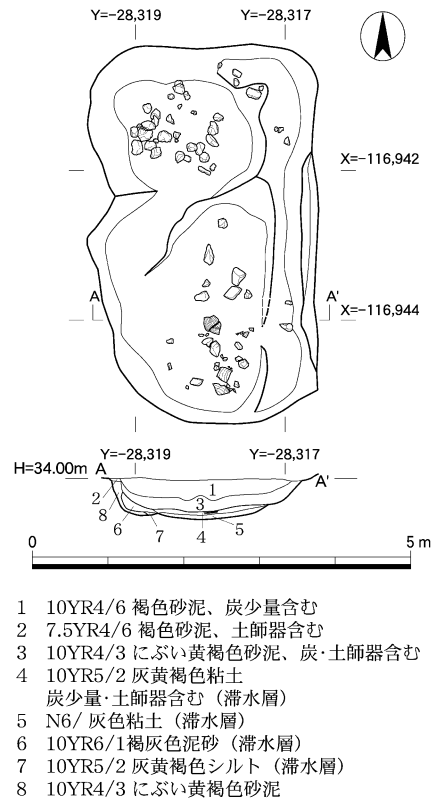


図 23 土坑 223 実測図 (1 : 100)

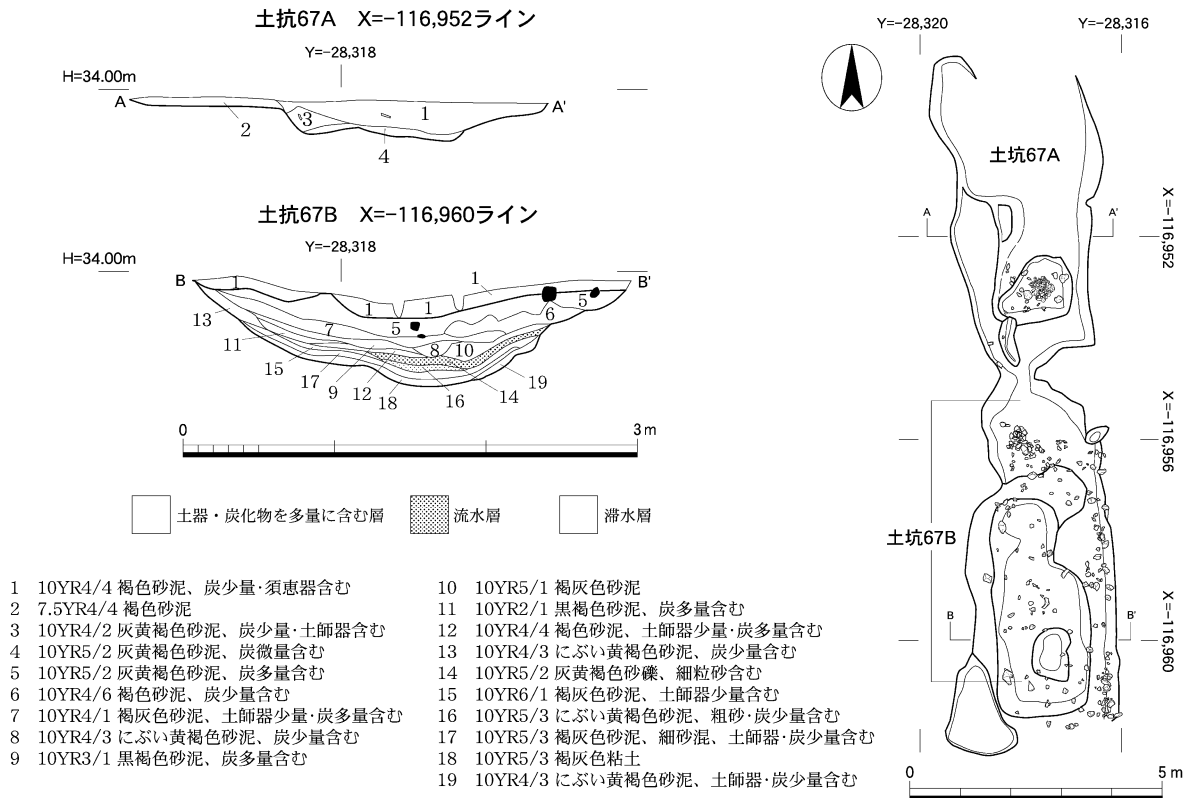


図24 土坑67A・B実測図(平面図1:150、断面図1:50)

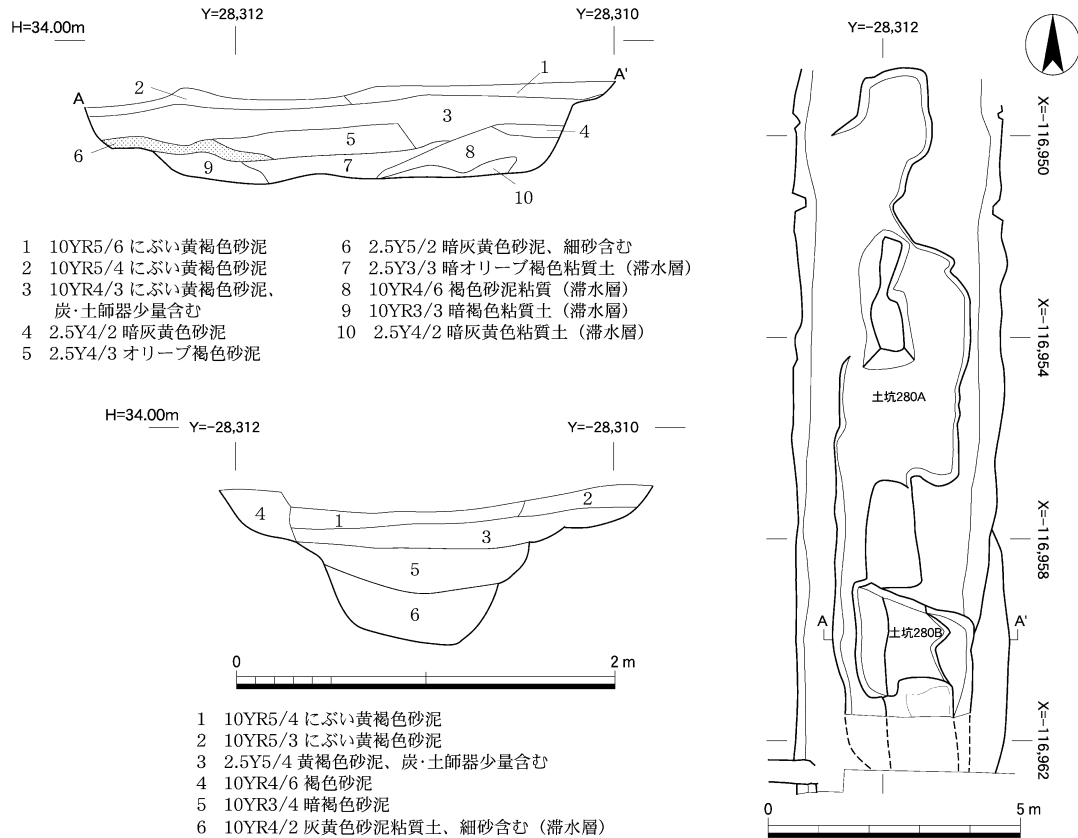


図25 土坑280A・B実測図(平面図1:150、断面図1:40)

土師器皿・高杯が張り付いた状態で検出した。

出土遺物は上述した土師器のみが出土している。

長岡京造営以前の遺構（図版2）調査区西部八町の下層で検出した溝群がある。北東－南西方向のものと、北西－南東方向のものがある。

北東－南西方向のものは、溝 141・142・204・233～235 があり、いずれも北東から南西へゆるやかに下がっている。

溝 141 は途中で土坑 223 に切られて途切れるが、検出長が 16.5 m、幅が 0.3～0.6 m、深さ約 0.1 m。溝 142 は検出長が約 4 m、幅が 0.5～0.6 m、深さ約 0.1 m。溝 204 は 2006 年度調査で検出された溝の延長部

である。検出長が約 3.8 m、幅は約 0.4 m、深さ約 0.05 m。溝 233 は検出長が約 6 m、幅は約 1.3 m、深さ約 0.15 m。溝 234 は検出長が約 7.5 m、幅は約 0.4 m、深さ 0.1 m。溝 235 は検出長が約 6.5 m、幅は約 0.6～1.0 m と不定形、深さ約 0.1 m。北西－南東方向のものには溝 160・315 がある。いずれも北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。160 は途切れながらも、検出長は約 11.4 m、幅が 0.3～0.6 m、深さ約 0.1 m。溝 315 は 2006 年度調査で検出された溝の延長部である。検出長が約 4.1 m、幅は 0.3～0.4 m、深さ 0.05 m。

このほかに、北西から南西方向に南北に密集して並ぶ溝状土坑 104 がある。検出長が 0.9～2.9 m、幅は 0.6 m、深さ 0.1 m。上述した溝 141 などの北東から南西方向の溝群とほぼ直交する方位である。遺構の性格として畑の畝などとも考えられるが即断できない。

これらの溝群は方位的にも長岡京期の遺構群とは様相を異にすることから、長岡京期造営以前の溝群と考えられる。出土遺物は土師器、須恵器が少量出土している。須恵器は 7 世紀前半のもの確認できた。

（4）弥生時代前期の遺構（図版 3・4・11・12）

弥生時代前期の遺構は、第 2 面・第 3 面で検出した。層序の項で述べたように、弥生時代前期の生活面（遺構成立面）は第 2 面に近いと考えられるが、土壌化により遺構の把握が困難であったため、土壌化した第②層を遺物包含層として除去し、主としてその下面・第 3 面で遺構を検出した。両面で検出した遺構に大きな時期差はないものと考えている。畿内第 I 様式の中段階から新段階に相当する時期の遺構群である。

主な遺構は、竪穴住居 1 棟、土器棺墓 2 基、土坑、ピット、溝、炉（焼土痕）などがある。

竪穴住居 687（図 27、図版 12- 2）第 3 面で検出した比較的大型の竪穴住居である。東 1 / 3 程度と北西部の一部は長岡京期の遺構によって削られていたが、長軸は 8 m、短軸は 7 m 前後の楕円形の平面形と考えられる。ほぼ床面まで削り込まれた状態で検出した。床面は壁より 1～3

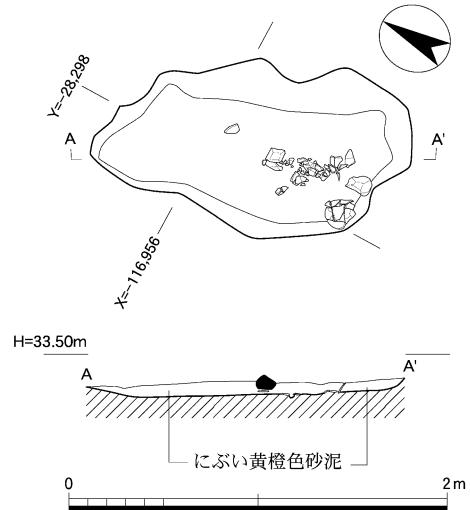


図 26 土坑 230 実測図（1：40）

mの幅で周囲が浅く掘り込まれ、中央部がやや高くなっている。そのほぼ中央に土坑 509 がある。土坑 509 は長軸 1.7 m、短軸 1.0 m の楕円形、深さは 0.95 m であった。壁面には火を受けて赤変する箇所があり、埋土には土器などとともに炭化物が多く含まれていた。これとは別に床面の北西寄りによく焼けた焼土痕があり、炉と考えられる。このほかに南寄りにも何箇所か焼け跡を検出している（図 27 平面図の網掛け）。柱穴は直径 0.2 m 前後の円形のを 8 箇所検出した。柱間の距離は 1.2 ～ 3.2 m とばらつきがあるが、壁からはほぼ 0.8 m 離れた位置に設けられている。壁溝は検出できず、設置されなかったとみられる。

土器棺墓 89（図 28、図版 11- 2）第 2 面で検出した。広口壺 2 個体を合わせ口として、横位に据えた土器棺墓である。上部 1 / 4 程度は後世に削平され失われている。棺身には頸部に削出突帯を施す太頸のもの、棺蓋には強く張る胴部に貼付突帯を巡らすものの胴部下半を利用している。棺身のもは、胴部に 2 箇所の穿孔がされ、それが真下になるように据えられており、内側から棺蓋の二つの破片をそれぞれ当てて塞いでいる。掘形は長軸 0.8 m、短軸 0.57 m の楕円形、深さは 0.33 m である。

土器棺墓 275（図 28、図版 11- 3）第 2 面で検出した。頸部と胴部に突帯を 3 条ずつ貼り付けた広口壺を横位に据えて棺身とし、頸部と胴部に削出突帯を巡らせる広口壺の体部、おもに下半を覆い被せ蓋とした土器棺墓である。棺身としたものの上部、つまり体部の半分近くが失われていることから、埋葬時から上面となる体部の一部を欠損させて入口としていたようである。蓋の検出状況（平面 1）と蓋を除去した棺の検出状況（平面 2）の 2 段階の平面図を図示した。

土坑 253（図 28）第 2 面で検出した。長軸 0.92 m、短軸 0.75 m の楕円形、西側が浅く 0.05 m、東側は 0.15 m と深くなる。西側の底面に近い位置で壺の頸部破片が出土した。

土坑 311（図 28）第 2 面で検出した。長軸 1.33 m、短軸 0.63 m、長軸方向が東西に近い長楕円形の土坑である。深さは 0.2 m である。埋土には土器片や礫のほかに、炭化物を多く含む。

土坑 411（図 29）第 3 面で検出した。長軸 2.25 m、短軸 1.18 m、長軸が北東—南西方向に向く長楕円形の土坑である。埋土には多くの礫が含まれていた。

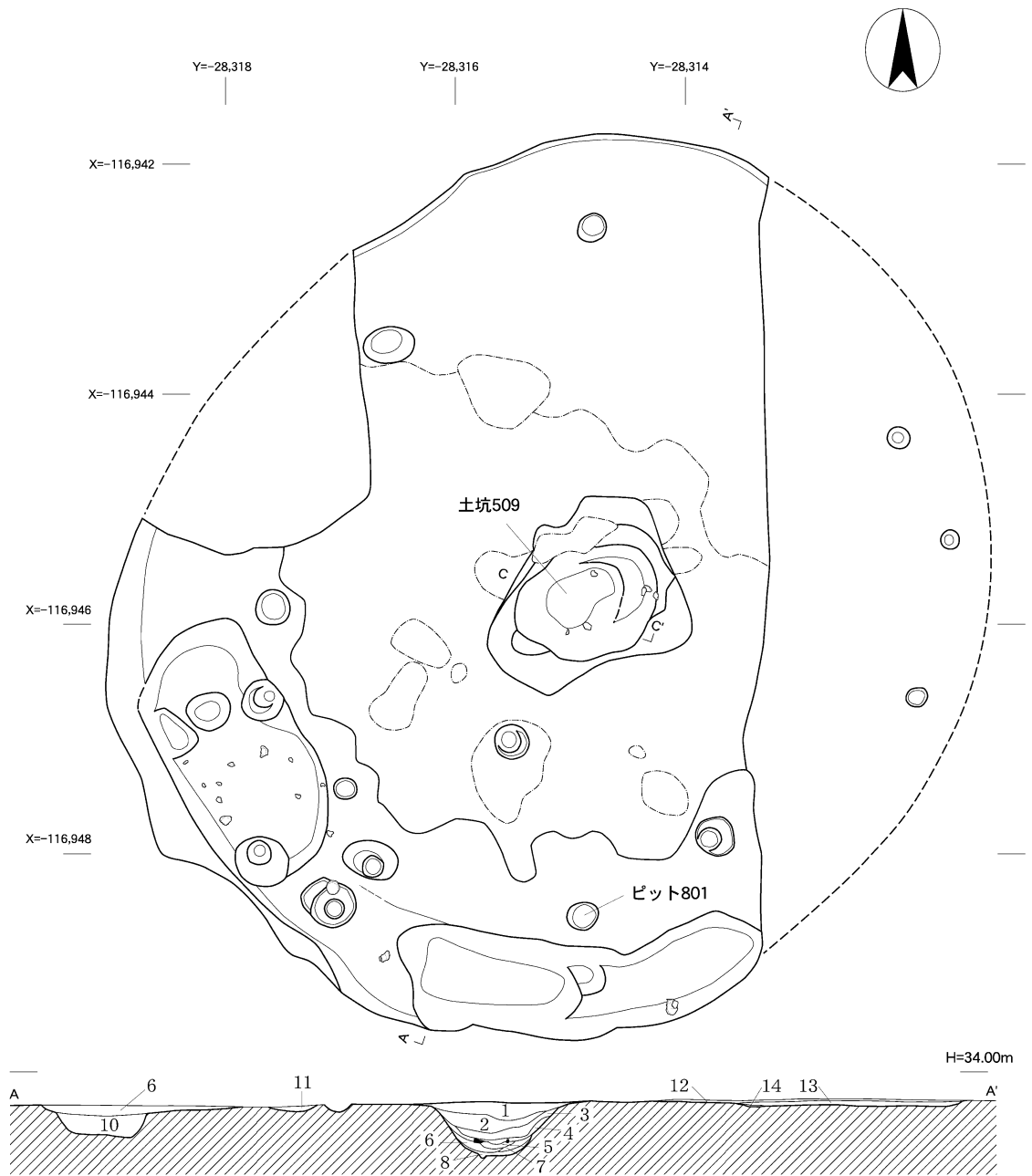
土坑 429（図 30）第 3 面で検出した。小型の甕を横位に埋納した土坑である。東西 0.25 m、南北 0.2 m 以上、円形に近い平面形である。上部は削平を受け、埋納された土器の上部は欠損している。深さは 0.08 m である。

土坑 490（図 30）第 3 面で検出した。土器の破片を重ね合わせて埋納した径 0.25 ～ 0.3 m の円形の土坑である。出土した土器片は一個体の甕を破碎したものであった。

土坑 499（図 30）第 3 面で検出した。長軸 1.55 m、短軸 1.3 m の歪な楕円形で、深さは最深部で 0.18 m の緩やかな凹み状の土坑である。

土坑 539（図 30）第 3 面で検出した。長軸 0.95 m、短軸 0.72 m の楕円形、深さ 0.25 m の土坑である。

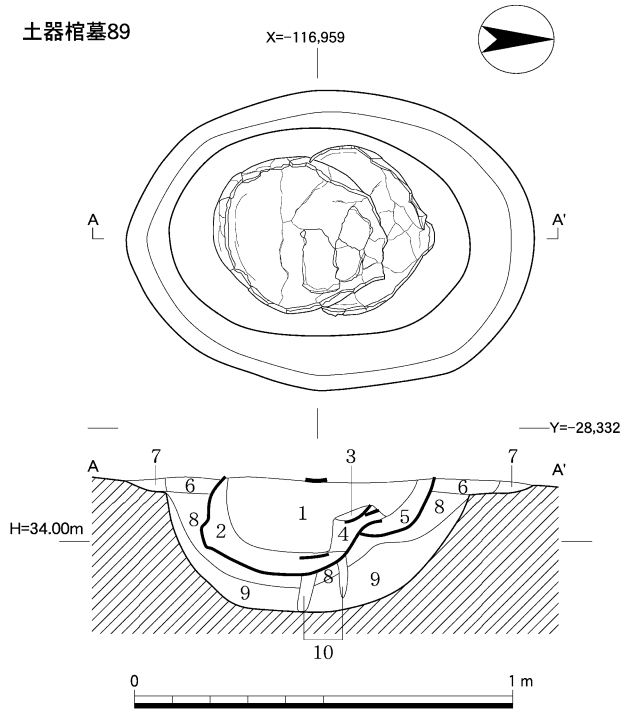
土坑 541（図 29）第 3 面で検出した。長軸 2.08 m、短軸 0.72 m、深さ 0.2 m である。一旦 0.05



- | | | | |
|---|----------------------------|----|---------------------|
| 1 | 7.5YR4/3 褐色砂泥、炭少量・土器片少量含む | 8 | 10YR2/1 黒褐色砂泥、炭多量含む |
| 2 | 10YR4/4 褐色砂泥、炭少量微量含む | 9 | 10YR4/4 褐色砂泥、炭微量含む |
| 3 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭少量含む | 10 | 2.5Y4/2 褐色砂泥、炭微量含む |
| 4 | 10YR2/3 黒褐色砂泥粘質、炭多量・土器少量含む | 11 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、焼土含む |
| 5 | 10YR3/1 黒褐色砂泥粘質、炭多量・土器少量含む | 12 | 10YR5/6 黄褐色砂泥、炭微量含む |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭多量含む | 13 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 7 | 10YR5/1 褐灰色泥砂 | 14 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 |

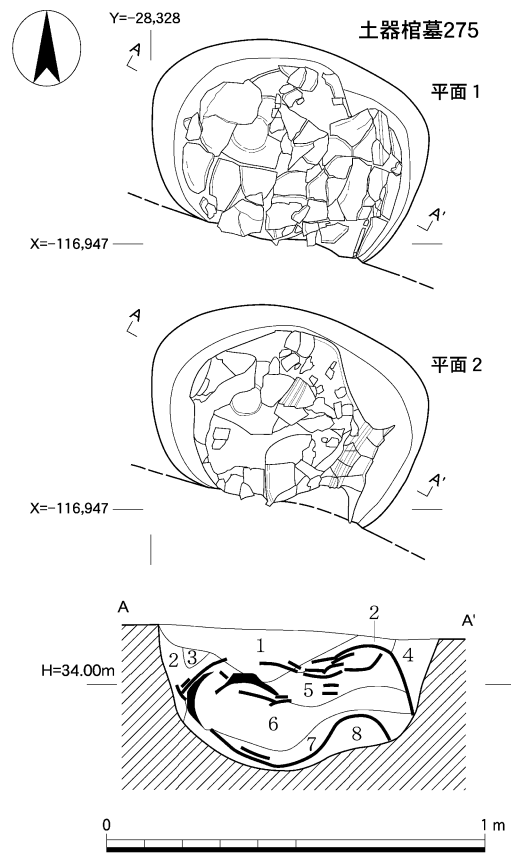
図 27 竪穴住居 687 実測図 (1 : 60)

土器棺墓89



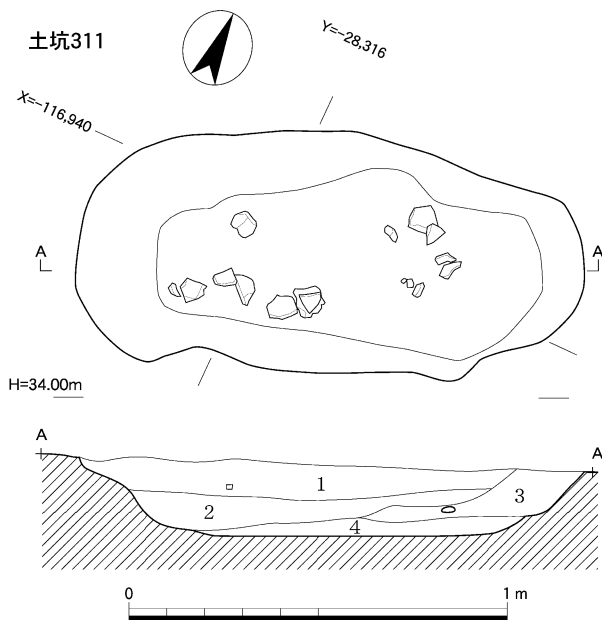
- 1 10YR4/6 褐色砂泥+2.5Y黄灰色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 5 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 6 10YR4/4 褐色砂泥
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 8 10YR4/6 褐色砂泥
- 9 10YR4/4 褐色砂泥
- 10 10YR5/1 褐灰色砂泥

土器棺墓275



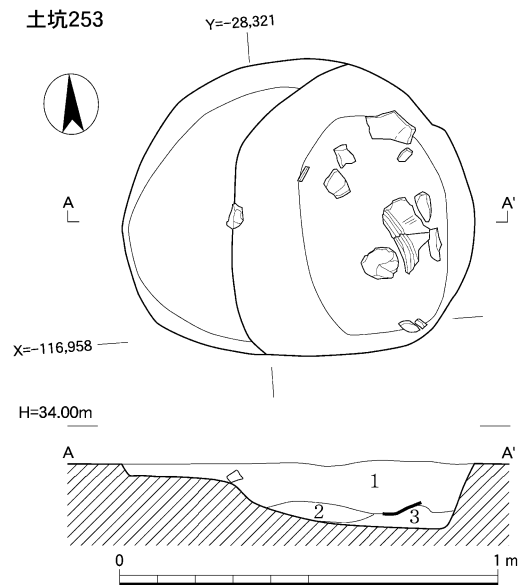
- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭少量含む
- 2 10YR4/4 褐色砂泥
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 4 10YR4/4 褐色砂泥
- 5 10YR4/4 褐色砂泥
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭少量含む
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭少量含む
- 8 10YR4/6 褐色砂泥

土坑311



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭含む
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥、土器片 炭含む
- 4 10YR4/4 褐色砂泥、炭少量含む

土坑253



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 3 10YR4/4 褐色砂泥

図 28 土器棺墓 89・275、土坑 311・253 実測図 (1:20)

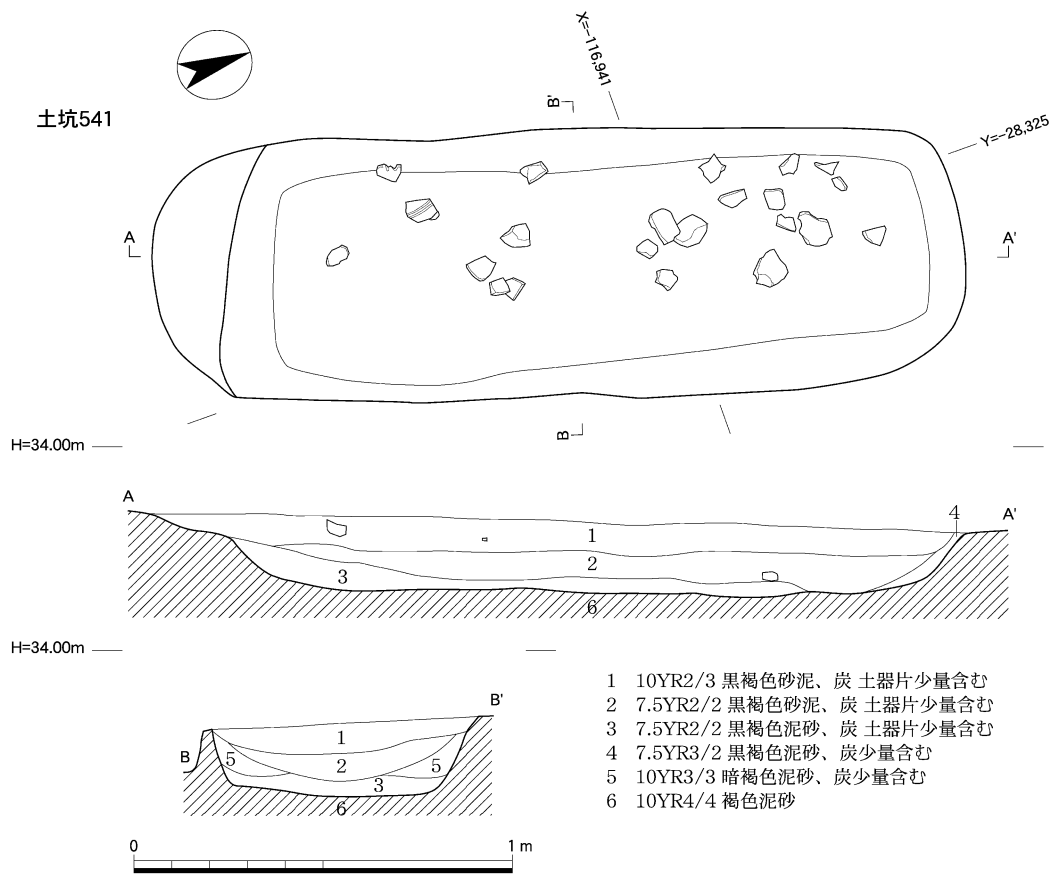
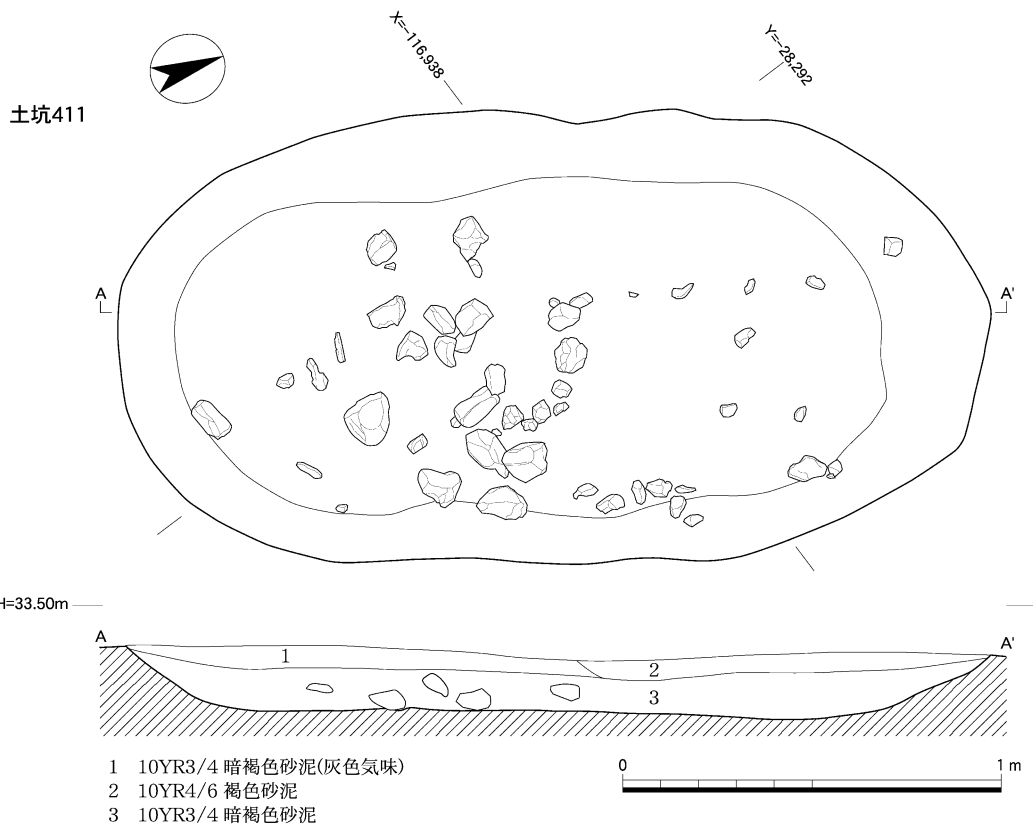


图 29 土坑 411・541 实测图 (1 : 20)

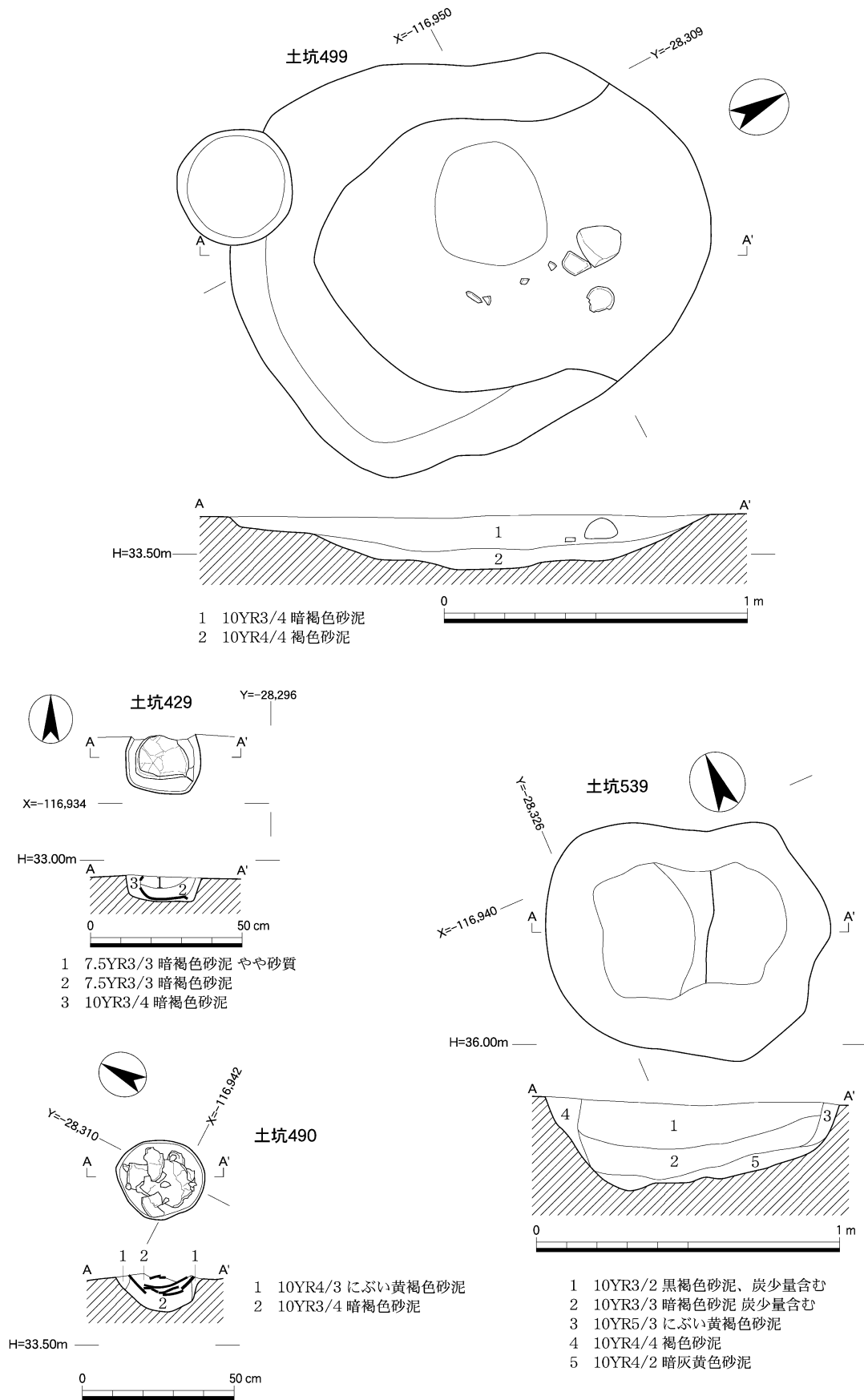


図30 土坑429・490・499・539実測図(1:20)

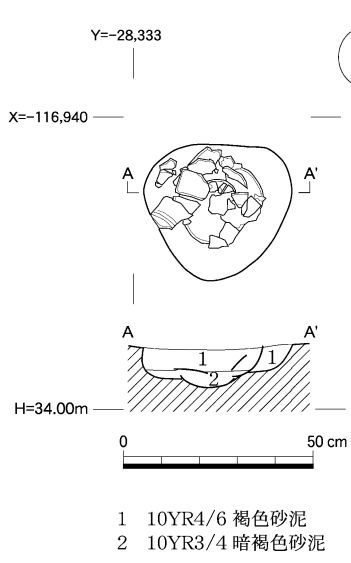


図 31 土坑 597 実測図 (1 : 20)

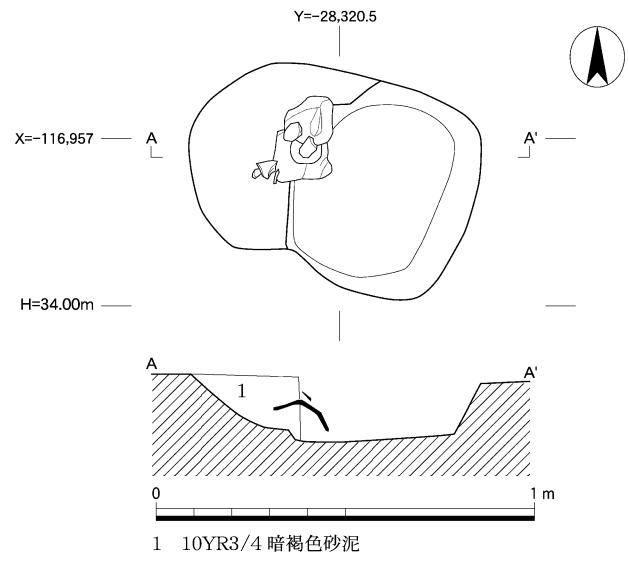


図 32 土坑 779 実測図 (1 : 20)

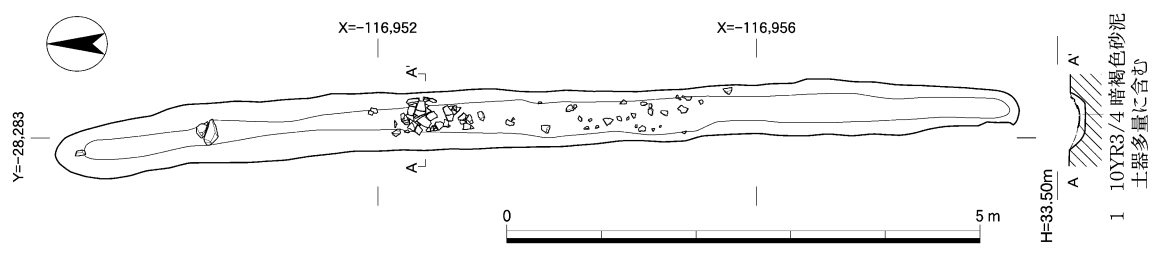


図 33 溝 358 実測図 (1 : 80)

m程炭化物を含む泥砂で埋まった後、礫が多く混じる砂泥で埋没している。平面形などから木棺墓のような遺構を想定したが、痕跡は検出できなかった。

土坑 597 (図 31) 第 3 面で検出した。甕を横位に据えて埋納した遺構である。甕は土圧により押し潰された状態で検出した。土坑は径 0.4 m の円形、深さは 0.15 m である。

土坑 779 (図 32) 第 3 面で検出した。長軸 0.77 m、短軸 0.54 m、深さ 0.16 m の楕円形の土坑である。壺の底部などが出土した。

溝 358 (図 33) 第 3 面で検出した。調査区の東部で検出した南北方向の直線的な溝である。幅約 0.6 m、長さは約 10 m であった。断面形は逆台形状で、ある程度埋まった段階で土器や礫石が廃棄されて埋没した状況がみられる。

(5) 縄文時代晩期の遺構 (図版 5・6・13～16)

縄文時代晩期の遺構は、一部第 3 面と認識した弥生時代前期面の南部で既に混在した状態で検出されたものもあるが、主に第 4 面・第 5 面で検出した。弥生時代と同様に生活面は第 4 面に近いと考えられるが、やはり土壌化の影響で遺構の認識が難しく、多くの遺構が土壌化した第④層を除去した第 5 面で検出した。出土する遺物より、これらの遺構には大きな時期差を認められず、いずれも縄文時代晩期中葉に位置付けられる「滋賀里Ⅲ a～Ⅲ b 式」に相当する。

主な遺構には竪穴住居 1 棟、炉 2 基、土器棺墓 18 基、土壙墓 1 基、集石遺構、土坑、溝のほか、ピットや焼土痕などがある。

a) 竪穴住居

今回の調査では、竪穴住居は南西端で竪穴住居 1294 のみを検出した。2006 年度調査で検出した竪穴住居群と一体のものと考えられる。

竪穴住居 1294 (図 34、図版 14- 1) 平面形は歪な楕円形で、長軸 4.4 m、短軸 3.8 m である。第 5 面西部で検出し、床面までの深さは 0.1 m で、中央やや東寄りによく焼けた炉跡を検出した。焼土の範囲は東西 0.75 m、南北 0.6 m で、中央部が緩やかに凹み、高熱により黄から橙色に変色し硬化する。柱跡は明瞭ではなかったが、5 箇所検出した。径が 0.15 m 前後の円形の柱穴で、柱間は 1 ~ 2 m であった。床面で深鉢や浅鉢、石器類のほか、礫・石類を検出している。

b) 炉

炉本体が削平され失われたものと考えられる焼土痕は調査区の各所で検出されたが、明らかに炉とわかるものは、調査区西部で検出した炉 1280・炉 1326 であった。いずれも単体で検出され

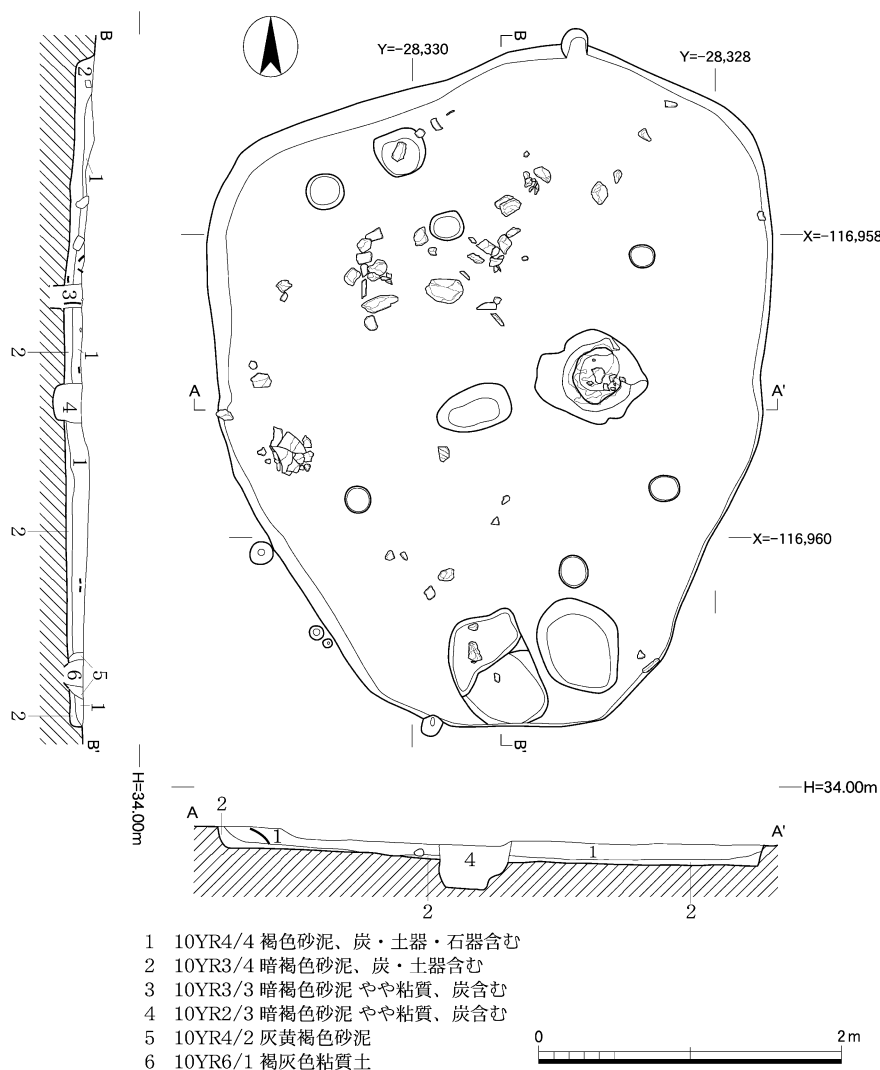


図 34 竪穴住居 1294 実測図 (1 : 50)

たが、本来は竪穴住居に伴うものと考えられる。

炉 1280 (図 35) 第 5 面西端で検出した炉である。北と南を別の遺構に切り込まれており、西は断割りによって失われている。炉の中央から北東部が残存していると思われる。残存する東西は 0.35 m、南北 0.45 m あり、北東端には長径 0.15 m 程度の礫が配されていて、一種の石囲炉であろう。中央の焼面の残存状況は良くなかった。

炉 1326 (図 36、図版 14- 2) 第 5 面西部で検出した。東西 0.8 m、南北 0.65 m の楕円形の浅い凹みの周縁部北側を「U」字状に長径 0.1 ~ 0.15 m の礫を囲うように配する。底面は赤色から黄橙色に変色し、硬化する。その上面で深鉢土器片を検出した。これも石囲炉の一種と考えられる。

C) 土器棺墓

土器棺墓と認識したものは 17 基ある。分布域は大きく東部と西部に分けられる。東部のものは 340・349・354・845・978・1010・1078 の 7 基、西部のものは 967・968・1064・1271・1288・1291・1452・1640 の 8 基、中間に 436 と 855 がある。2 個体の土器を用いるものは 845 のみで、ほかのものは 1 個体の土器を棺として使用している。1 個体の土器を使用するもののなかにも、土器を直立させるものと斜位に据えるものがあり、またそれぞれ底部のあるものと底部を欠損させて用いているものがある。

土器棺墓 340 (図 37) 第 4 面東部で検出した。掘形は直径 0.38 m、深さ 0.28 m の円形土坑である。底部を欠いたくの字口縁の深鉢を直立させて据える。

土器棺墓 349 (図 37) 第 4 面東部で検出した。掘形は直径 0.35 m、深さ 0.28 m の円形土坑で

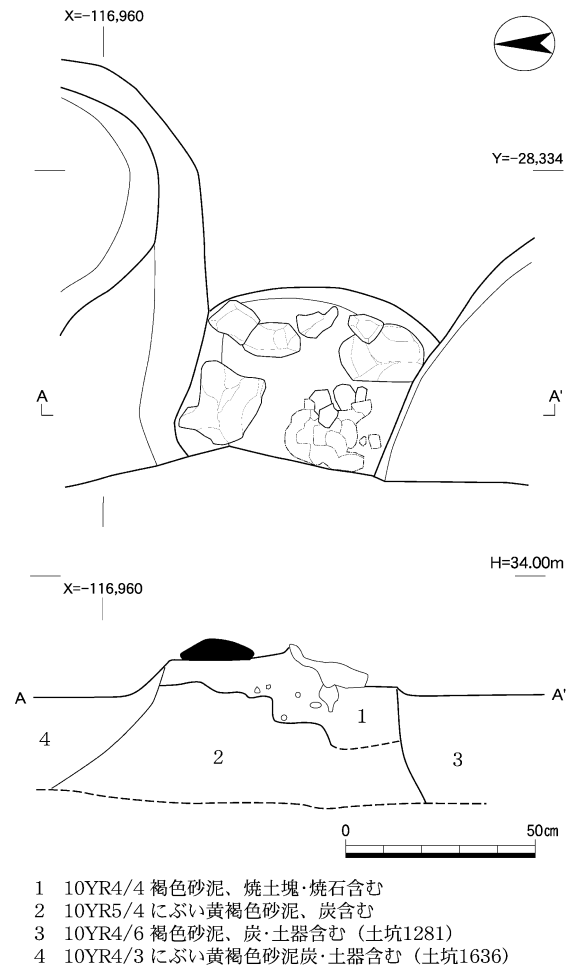


図 35 炉 1280 実測図 (1 : 20)

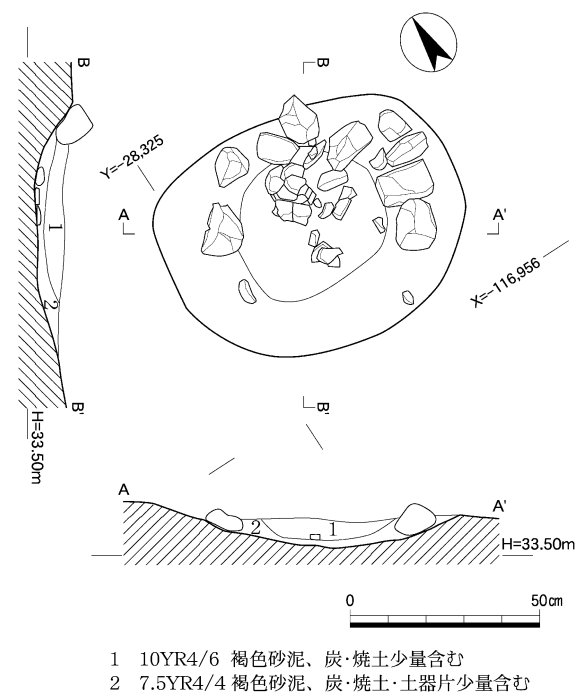


図 36 炉 1326 実測図 (1 : 20)

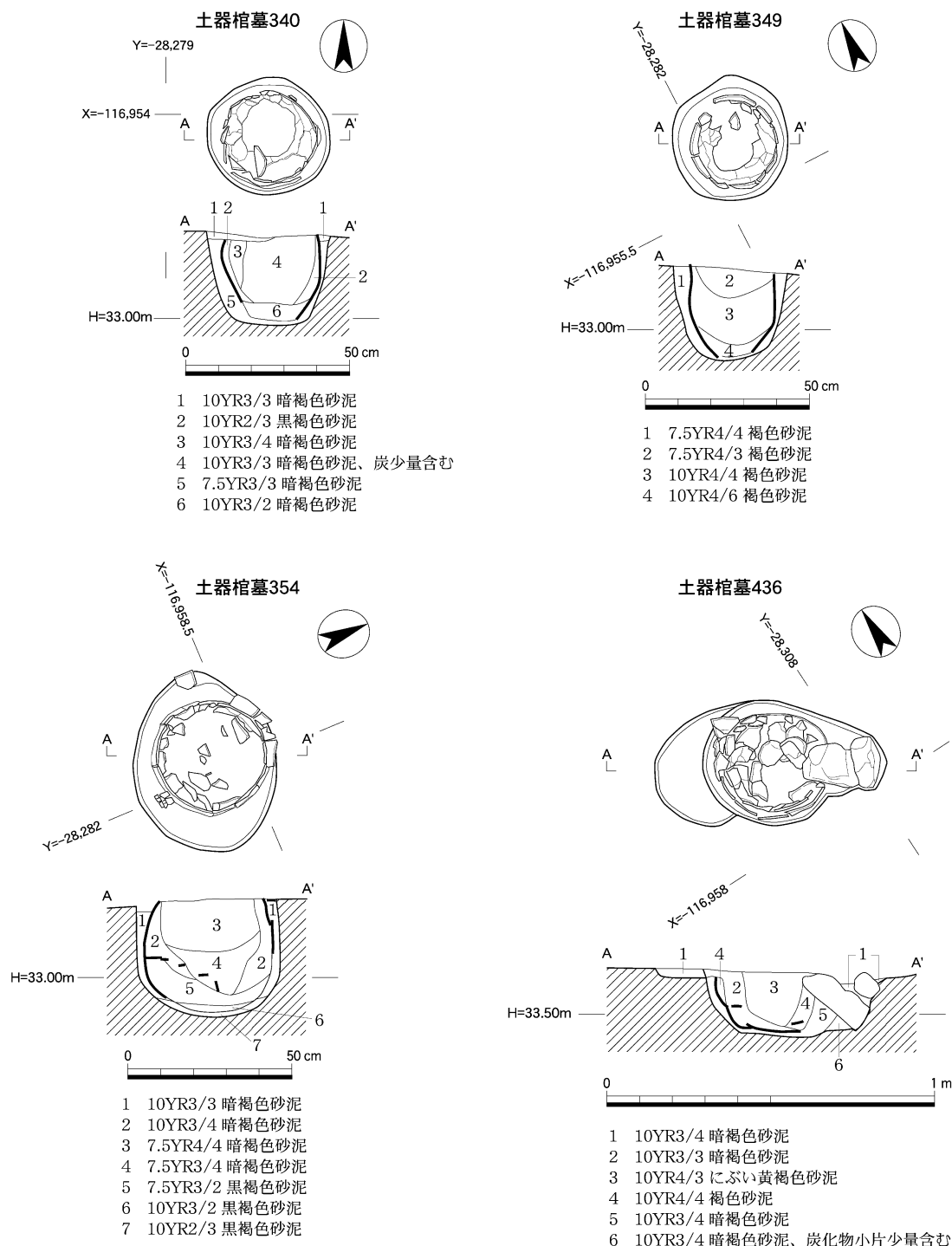


図 37 土器棺墓 340・349・354・436 実測図 (1:20)

ある。底部を欠いた深鉢を直立させて据える。

土器棺墓 354 (図 37) 第 4 面東部で検出した。掘形は直径 0.45 m、深さ 0.35 m の円形土坑である。くの字口縁の深鉢の上半部を直立させて据えて棺としている。

土器棺墓 436 (図 37、図版 15- 1) 第 4 面中央で検出した。掘形は長径 0.5 m、短径 0.37 m の楕円形、深さは 0.18 m である。出土状況より判然としないが、口縁部も底部も出土しており、外傾して開く口縁の深鉢を据えたようである。磨石と思われる長径が 0.2 m と 0.15 m の 2 個の礫

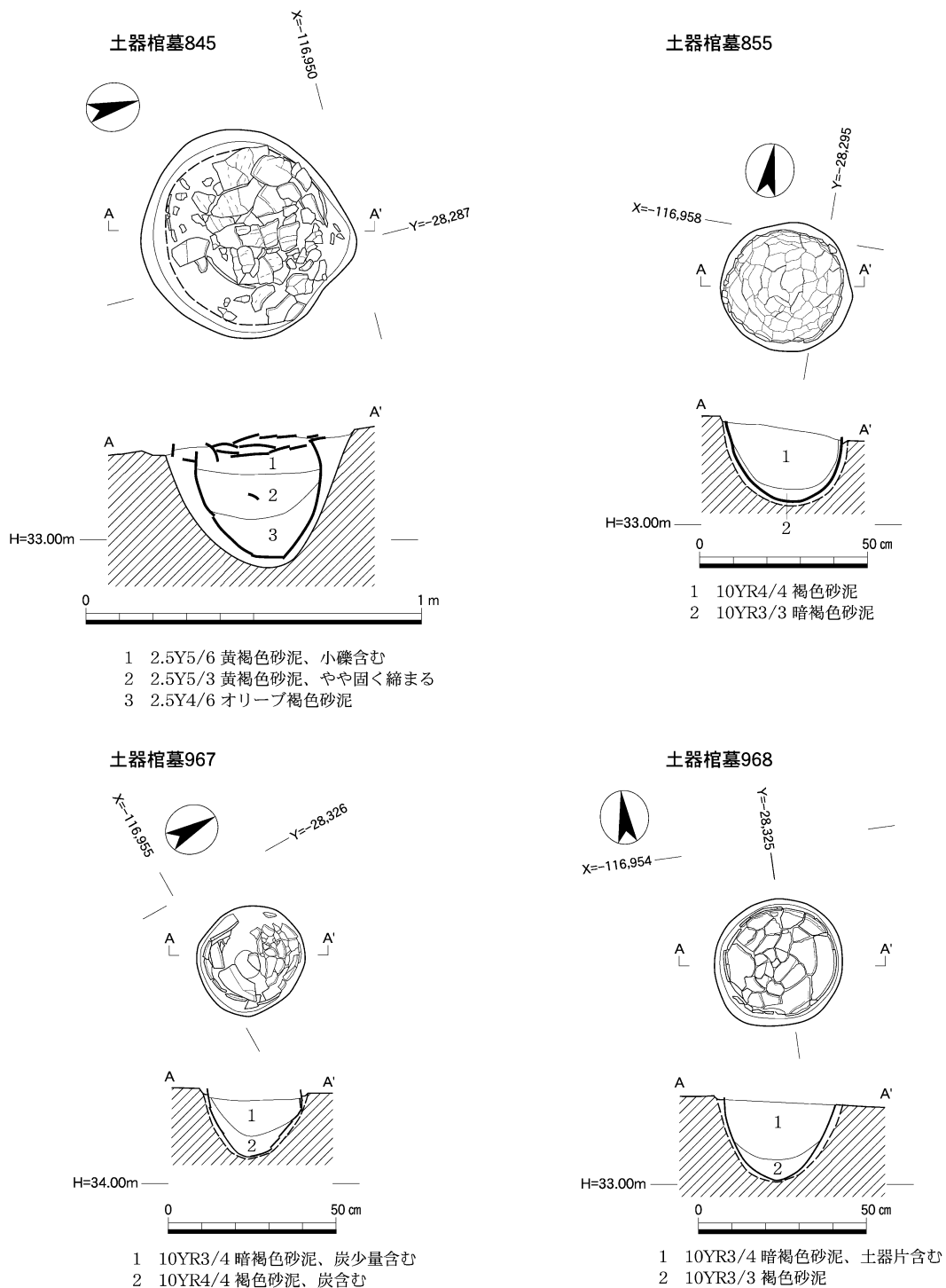
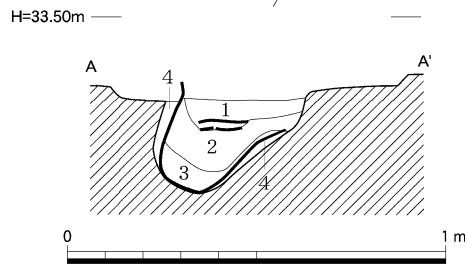
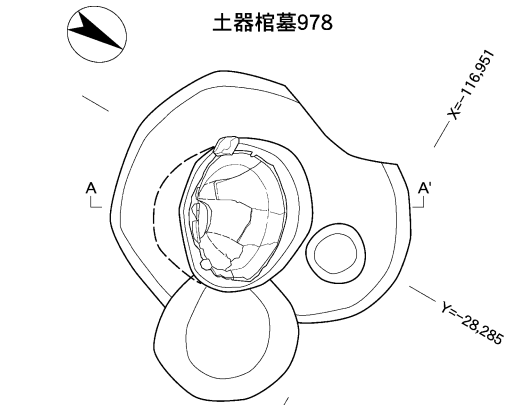


図 38 土器棺墓 845・855・967・968 実測図 (1 : 20)

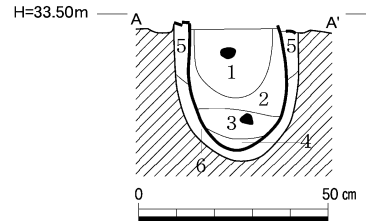
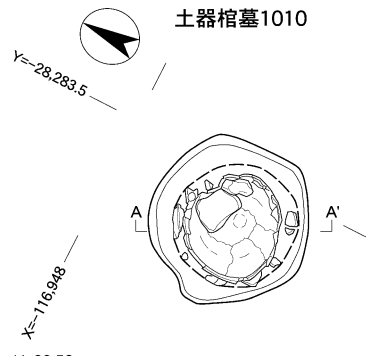
を組み合わせ、東辺を押さえ込むように据えていた。

土器棺墓 845 (図 38、図版 15- 3) 第 5 面東部で検出した。掘形は直径 0.6 m、深さ 0.35 m の逆円錐形土坑である。外傾して開く口縁の深鉢を直立させて据え棺とし、別個体のくの字口縁の深鉢の破片を重ね合わせて蓋とする。本調査では 2 個体の土器を組み合わせる唯一の例である。

土器棺墓 855 (図 38) 第 4 面中央で検出した。掘形は径 0.4 m、深さ 0.25 m の逆円錐形の土坑である。底部が平底の深鉢を直立させ据えているが、上部は削平され失われている。

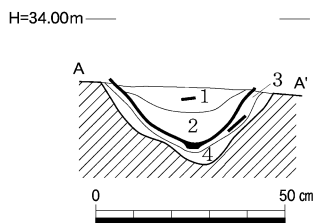
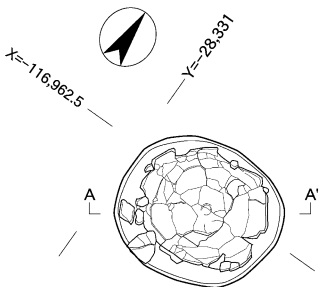


- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 やや締まる 炭含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭含む
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭含む
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 炭含む



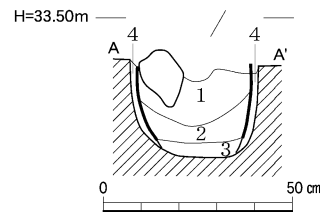
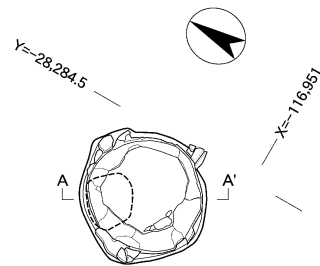
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ4cm程までの礫を含む
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭を少量含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ3cm程までの礫を含む
- 4 10YR4/1 褐色砂泥
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 6 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥

土器棺墓1064



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 10YR4/4 褐色砂泥
黄灰色粘質土 炭少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質 黄灰色粘質土含む
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 2.5Y4/3 オリーブ 褐色泥砂含む
- 4 7.5YR3/2 黒褐色(粘質)砂泥 2.5Y5/1 黄灰色粘質土含む

土器棺墓1078



- 1 10YR4/4 褐色砂泥 φ3cm程の礫少量・
土器片含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

図 39 土器棺墓 978・1010・1064・1078 実測図 (1:20)

土器棺墓 967 (図 38) 第 4 面西部で検出した。968 と南北に 0.2 m の間隔で並んで検出された。径 0.32 m、深さ 0.2 m の逆円錐形の掘形に、底を欠いた深鉢を据える。上部は削平され失われている。

土器棺墓 968 (図 38) 第 4 面西部で検出した。径 0.4 m、深さ 0.25 m の逆円錐形の掘形に、

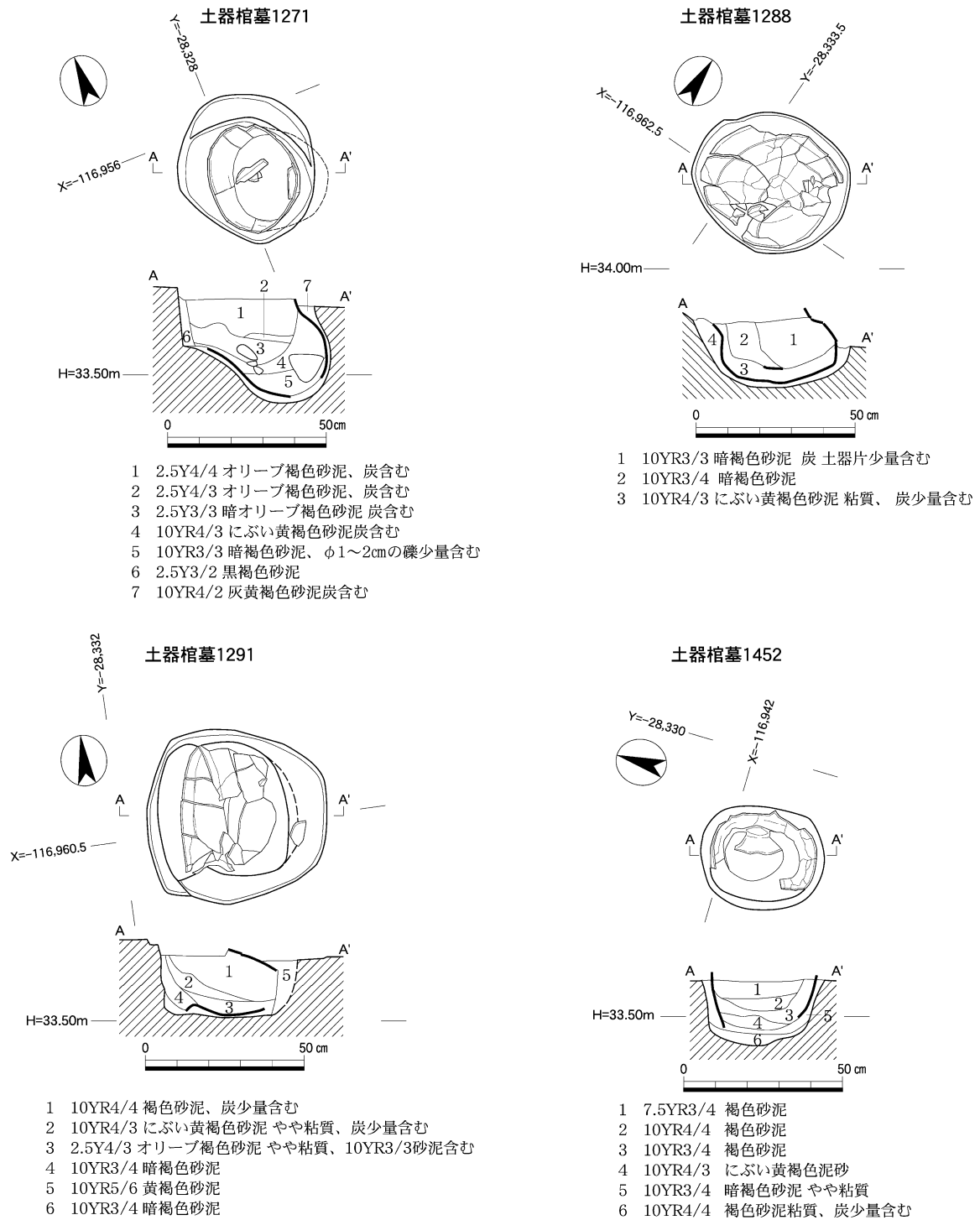


図 40 土器棺墓 1271・1288・1291・1452 実測図 (1 : 20)

上げ底の底部の深鉢を据える。深鉢の胎土はいわゆる生駒山西麓産のものである。上部は削平され失われている。

土器棺墓 978 (図 39、図版 15- 2) 第 5 面東部で検出した。掘形は、径 0.38 m、深さ 0.3 m の円形土坑の底部北側に黄褐色砂泥を入れて、深鉢を斜位に据える。深鉢は大きく開く波状の口縁部で、上げ底の底部である。

土器棺墓 1010 (図 39) 第 5 面東部で検出した。径 0.35 m、深さ 0.38 m の逆円錐形の掘形に、

くの字口縁の深鉢を据える。深鉢の底部は平底である。

土器棺墓 1064 (図 39) 第 4 面西部で検出した。長径 0.43 m、短径 0.37 m、深さ 0.2 m の逆楕円錐形の掘形に、小振りの平底の底部の深鉢を据える。上部は削平され失われる。

土器棺墓 1078 (図 39、図版 15- 2) 第 5 面東部で検出した。径 0.35 m、深さ 0.25 m の円形の掘形に、底部を欠いた深鉢を据える。土器内上部の北西部に長径 0.15 m の礫が入る。

土器棺墓 1271 (図 40、図版 15- 4) 第 5 面西部で検出した。掘形は上面で径 0.4 m の円形の土坑を西方向から斜めに掘削し、おおよそ 45 度傾けて底部を欠いた深鉢を据える。深鉢は外反する口頸部が体部から立ち上がるもので、口縁端部には刻目が巡らされる。欠損する底部を塞ぐように長径 0.15 m の礫が入れられている。土器内から土器片などとともに、磨製の小型石斧 (図版 23- 2 - 157) が出土している。

土器棺墓 1288 (図 40) 第 4 面西部で検出した。径 0.45 ~ 0.5 m の円形、深さ 0.2 m の掘形に、口縁部を西に向け約 60 度傾けた状態に深鉢を据える。深鉢は大きく外反する波状口縁、頸部に強いナデを巡らし、倒卵形の体部に小振りの平底がつく。

土器棺墓 1291 (図 40) 第 5 面西部で検出した。長径 0.55 m、短径 0.4 m の楕円形の掘形に、下半部を欠いた深鉢をほぼ横位に据える。口縁部が外反する深鉢である。

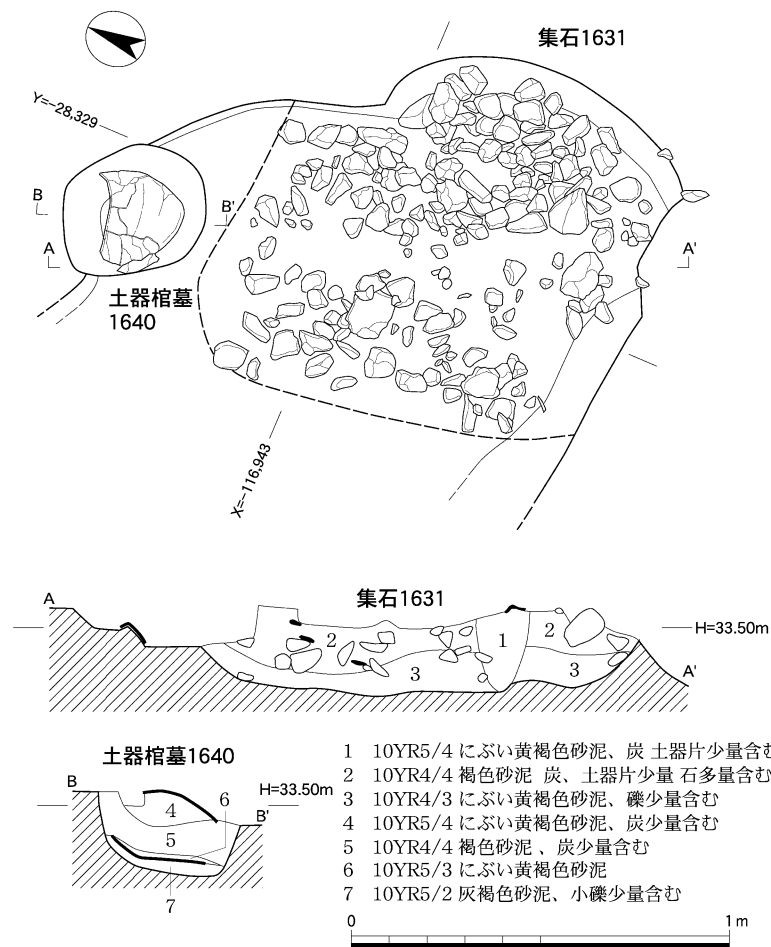


図 41 土器棺墓 1640・集石 1631 実測図 (1 : 20)

土器棺墓 1452 (図 40) 第 5 面西部で検出した。径 0.32 ~ 0.38 m の楕円形の掘形に下半部を欠いた深鉢の半身を直立させて据える。上部は削平されて失われている。同一個体の底部が掘形の底中央に横位に置いた状態で検出された。

土器棺墓 1640 (図 41、図版 14- 3) 第 5 面西部で検出した。長径 0.4 m、短径 0.32 m の楕円形、深さ 0.2 m の掘形に、底部を欠いた無頸の倒卵形体部の深鉢をほぼ横位に据えたものである。

d) 土墳墓

土墳墓と考えられるのは 1611 のみであった。

土壙墓 1611 (図 42) 第 5 面西部で検出した。東西 1.05 m、南北 0.45 m の長方形の土坑で、深さは 0.45 m あり、側壁は外側にえぐれて、上面より 0.05 ~ 0.1 m 程度オーバーハングする。埋土には細かな骨片がまばらに含まれており、土壙墓と判断した。

e) 集石遺構

集石遺構は東で 1 箇所、西で 4 箇所検出した。1631 を除いたほかのものは、いずれも小規模で数石から十数石よりなるものである (図 45 土坑 1532 参照)。いずれも熱を受けておらず、また特別な石とも考えにくいもので、用途は不明である。

集石 1631 (図 41、図版 14-3) 第 5 面西部で検出した。長径 1.15 m、短径 1.0 m の楕円形、深さ 0.15 m の土坑に長径 0.05 ~ 0.2 m の礫を多量に投棄している。

f) 土坑

土坑は調査区全域、第 4・5 面で多数検出している。

土坑 344 (図 43) 第 4 面東部で検出した。南北 1.5 m、東西 1.3 m の不整形の土坑である。南側は 2 段落ちになっており、検出面より底面まで 0.3 m である。埋土内には礫石と土器小片が入り、土坑底面には台石として使用されたと考えられる一辺 0.3 m、厚さ 0.08 m 程の破損した扁平な大型の礫が廃棄されていた。

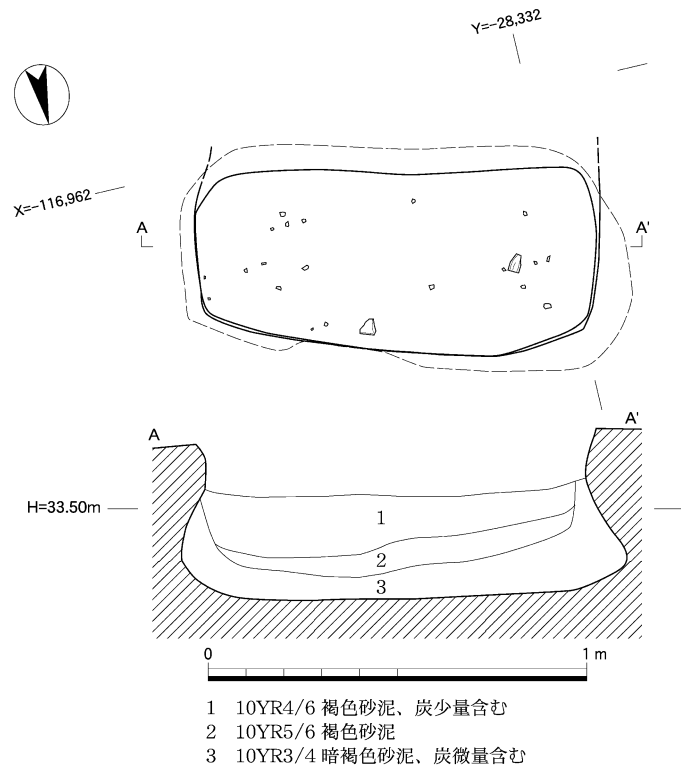


図 42 土壙墓 1611 実測図 (1 : 20)

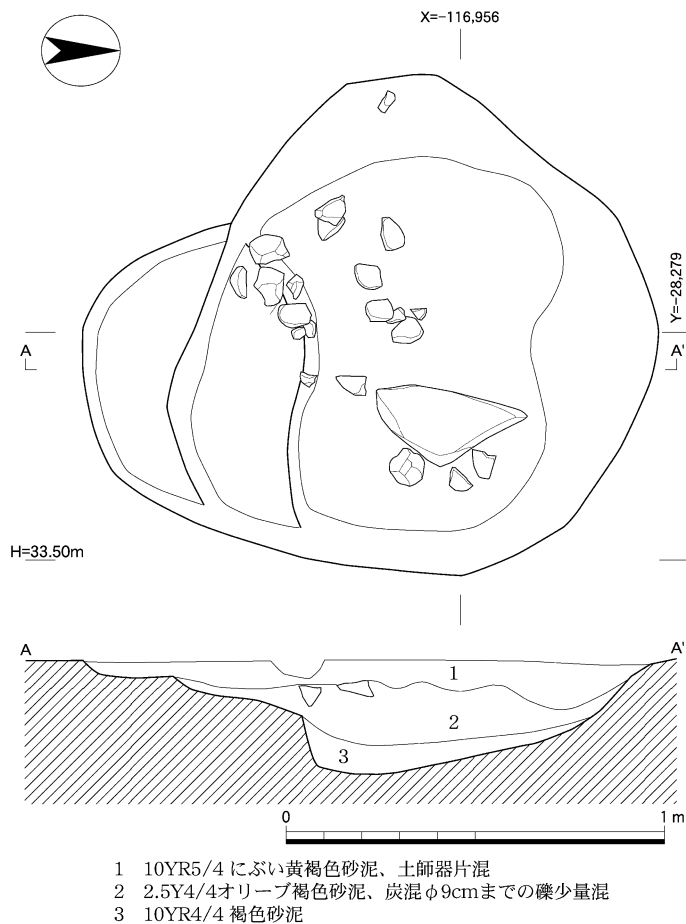


図 43 土坑 344 実測図 (1 : 20)

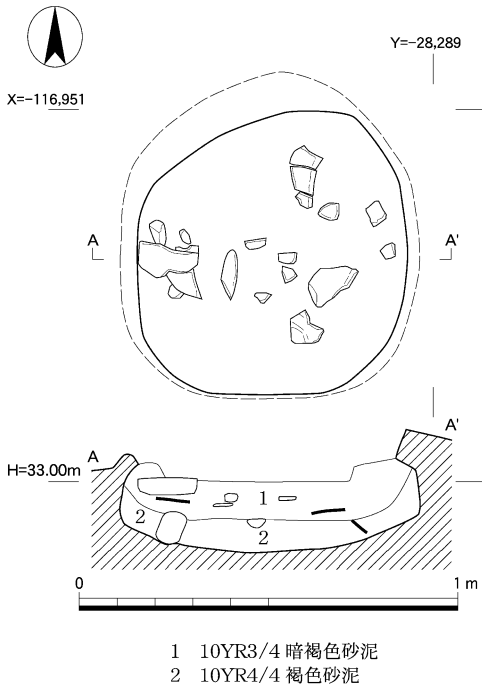


図44 土坑847実測図(1:20)

土坑847(図44)第4面東部で検出した。径0.7mの不整形な円形の土坑である。深さは0.23mあり、側壁は外側にえぐれて、上面より0.05~0.1m程度オーバーハングした状況であった。埋土中から土器片・石器などが出土している。

土坑1532(図45)第5面西部で検出した。長軸1.2m、短軸0.8mの楕円形、深さ0.25mの土坑である。埋土の下半部に土器片や礫石を多く含む。深鉢底部や注口土器片などがある。また、土坑外の北西部に小規模な集石が検出された。南北0.35m、東西0.25mの範囲に9個の石が集められている。

土坑1637・1638 第5面西部で検出した。1637は長径0.37m、短径0.24m、1638は長径0.28m、短径0.2mの楕円形、深さは0.1~0.15mの小型土坑である。両遺構は近接した場所にあり、埋土は

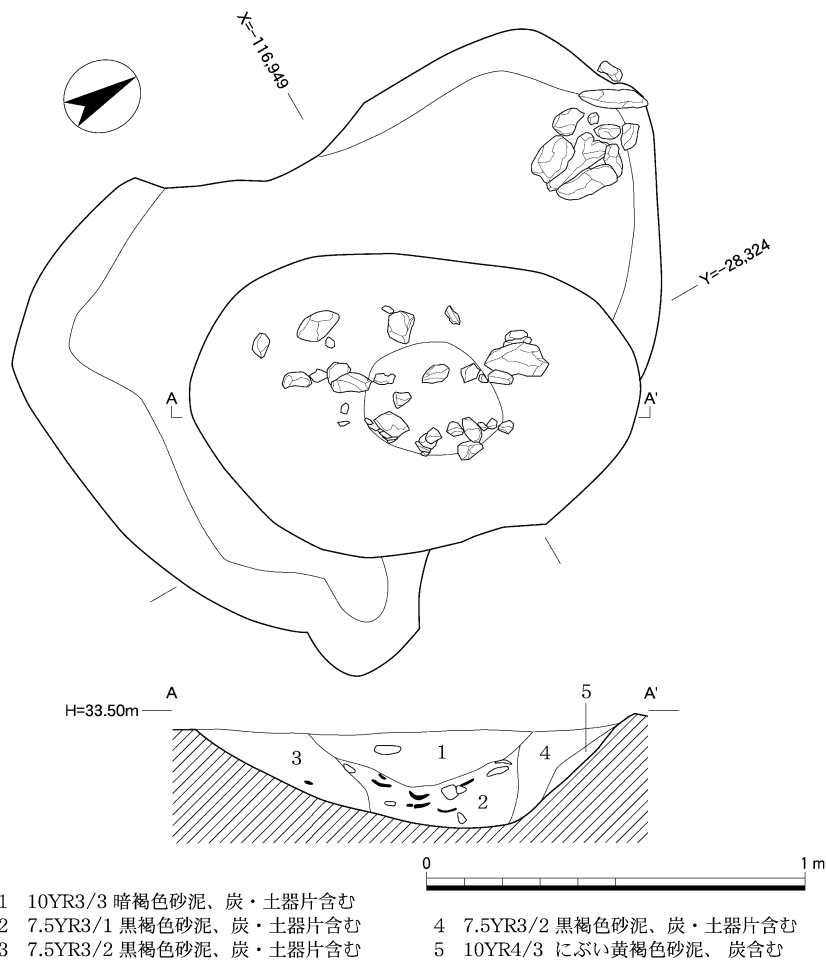


図45 土坑1532実測図(1:20)

暗褐色砂泥で径 0.01 m の炭化物がまばらに混じる。これら炭化物はドングリであることがわかっている。

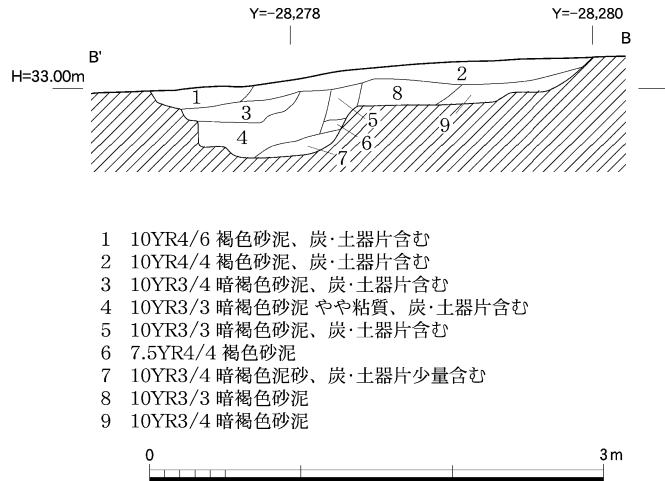
g) 溝

調査区の東部で溝 1067、西部で溝 1215、大規模な溝を検出した。東部の溝 1067 は人工的に掘削された溝と考えられるが、西部の溝 1215 については自然の窪みに多少手を入れて利用したものと考えられる。いずれにしても集落における生活に欠かせない役割を担っていたであろう。

溝 1067 (図 46、図版 16- 1) 調査区東端にある古い砂礫層の高まりの北辺から東辺を回り込むように掘り込まれた溝である。東端でさらに東の調査区外へ延びている。北辺の東西方向の部分では幅約 4 m で、深さは 0.35 m で底面はやや平らになっており、土器や礫石が多く投棄された状態で検出した。東部で砂礫層の高まりを回り込む辺りから、溝の幅が約 2 m、深さは 0.5 m と狭く深くなり東へ続く。埋土全体に多量の土器・石器片、炭化物などを含み、西・南より比較的短期間に埋められたと考えられる。人工的に排水をするために掘られた溝と考える。

溝 1215 (図 47・48、図版 16- 2) 調査区西部の北から南東—東へ湾曲する溝である。もともとは自然に形成された溝状の窪み地形であったと思われるが、多少手を入れて利用したものと思われる。西部の竪穴住居による集落の東端を限る溝として意識されたものであろう。溝は北端部で幅 11 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m と浅くなっている。調査区北壁から 3 m 程南の辺りから溝が北西—南東方向へ向かう間が、幅 7 m、深さ 1.4 m と急激に深くなる。溝の東部は幅 8 m 前後、深さ 0.6 m と浅くなっている。溝の断面は北・東の肩部が緩やかな傾斜であるのに対し、集落側の南・西の肩部は急傾斜となっている。この集落側の南・西肩部から底には、多くの土器や石器の破片のほか、多量の炭化物が投棄された状態で検出された。集落が営まれていた期間に、ごみ捨て場として利用されていたと考えられる。また、土層の観察により、深くなる北西—南東方向の間は底部に水が溜まった時期があったようで、集落に多少の水を供給する水溜まりとして利用されたと考えられる。

これまでに記述したように、この溝の埋土中位から下位には多くの土器・石器とともに多量の炭化物が検出された。各所に土層観察用の畦を残し、土層を確認しながら土壌サンプルを採取した。この採取したサンプルは水洗選別を順次実施しており、分析途中であるが、マメなど穀類やドングリ・クルミなどの種実が検出されている。また一部自然環境の復元のための花粉分析や年代測定などの自然科学的な分析も実施した (付章参照)。



- 1 10YR4/6 褐色砂泥、炭・土器片含む
- 2 10YR4/4 褐色砂泥、炭・土器片含む
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭・土器片含む
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質、炭・土器片含む
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・土器片含む
- 6 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 7 10YR3/4 暗褐色泥砂、炭・土器片少量含む
- 8 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 9 10YR3/4 暗褐色砂泥

図 46 溝 1067 東西断面図 (1 : 50)

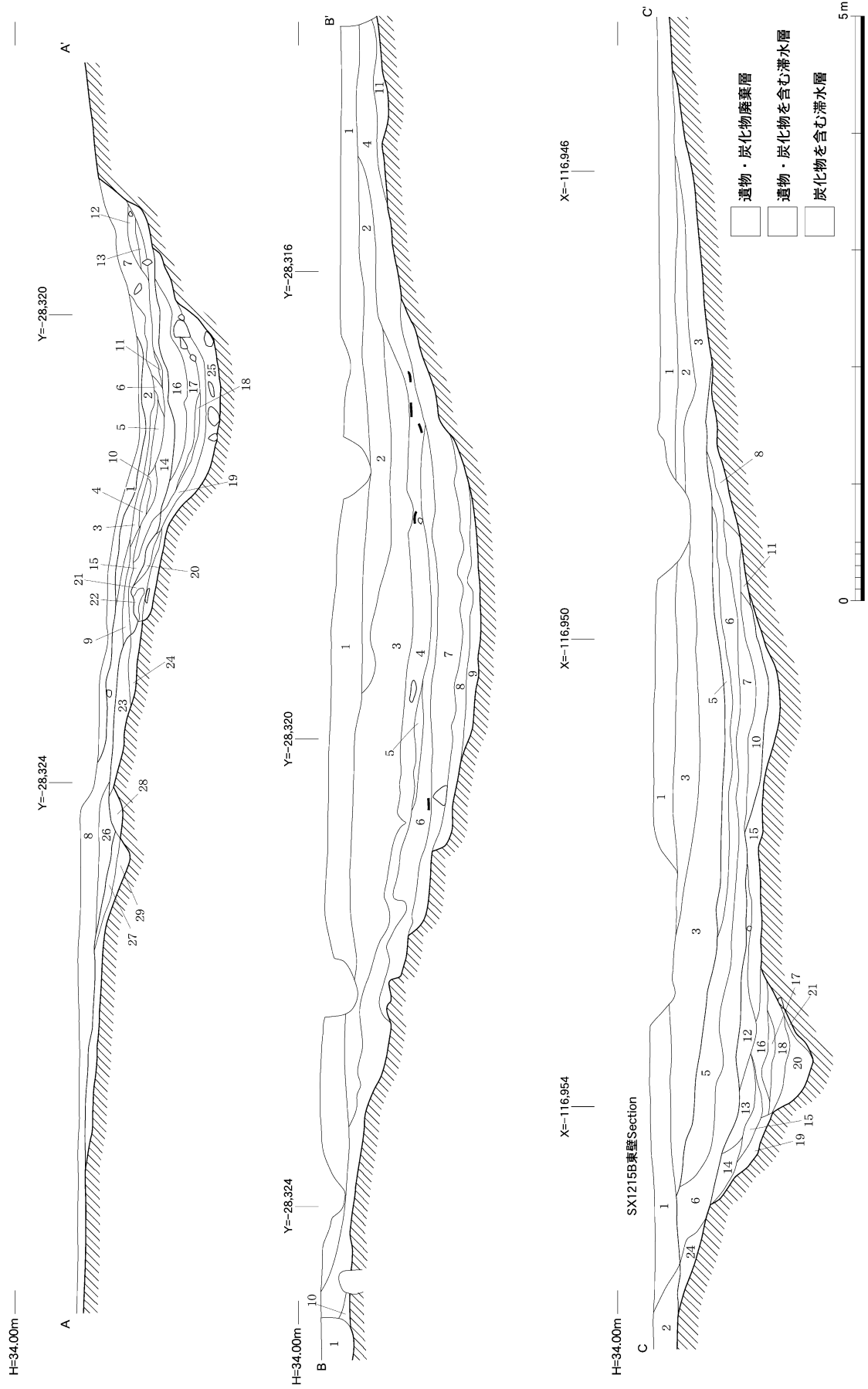


図 47 溝 1215 断面図 1 (1 : 50)

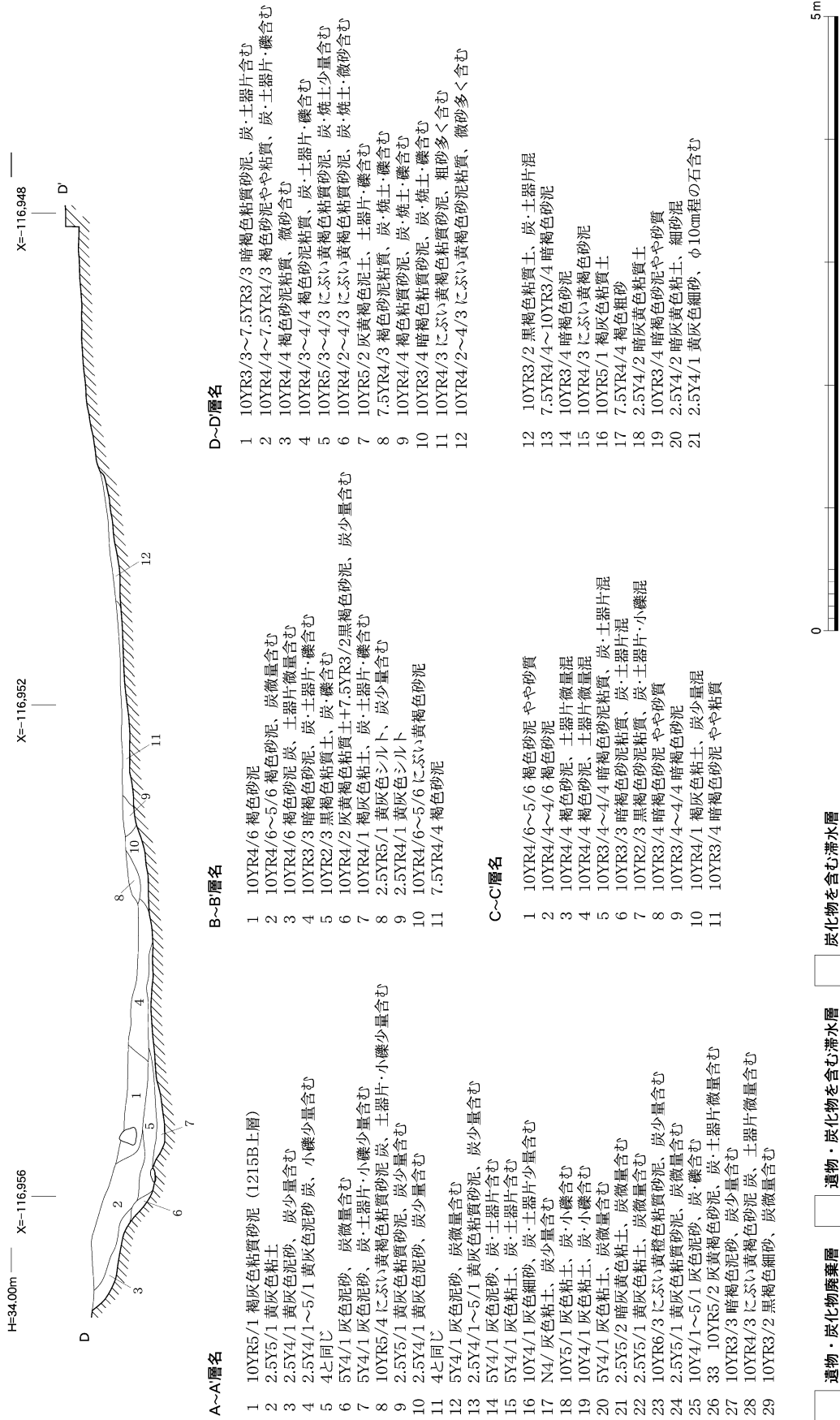


図 48 跡 1215 断面図 2 (1 : 50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に 340 箱出土した。土器類・石器類のほか、木製品・玉類・皮革製品などがあり、主に長岡京期、弥生時代、縄文時代のものである。

長岡京期の遺物は第 1 面、第 1 - 2 面で出土した。大半は土器類であり、少量の瓦類・木製品・土製品・皮革製品などがある。

弥生時代の遺物は、主として第 2 面・第 3 面の各遺構・層などから出土している。弥生時代前期、畿内第 I 様式の中段階から新段階のもので、土器類・石器類がある。土器では壺・甕など、石器では石斧などが出土した。

縄文時代の遺物は、主として第 4 面・第 5 面の各遺構・層などから土器類と石器類が出土した。縄文時代晩期中葉（滋賀里Ⅲ a～Ⅲ b 式）の遺物群で、土器には浅鉢・深鉢があり、石器類は石鏃や石刀のほか石皿・敲石など器種が豊富であり、剥片や未成品と考えられる破片も多く出土している。

このほか少量であるが、長岡京期以前の奈良時代と考えられるものが第 1 - 2 面の遺構から、また縄文時代後期の遺物が下層・第⑤層から出土している

(2) 長岡京期の遺物

土坑 67 出土遺物（1～52）（図 49・50、図版 17・18）

土坑 67 の土器類の破片総数は 6,771 片あり、その内容は土師器 88.1%、黒色土器 0.2%、須恵器 10.9%、その他・不明 0.8%と土師器の比率が他を圧倒し、緑釉陶器、灰釉陶器の出土はなく、黒色土器は 14 片と非常に少ない。

土師器には椀 A I・杯 A・杯 B・皿 A I・皿 A II・蓋・高杯・甕などがある。椀 A I（1～5）は口径 12.0～14.7 cm、器高 3.4～4.0 cm。いずれも底部から口縁部までヘラケズリ調整が施さ

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
長岡京期	土師器、須恵器、瓦、土製品、皮製品		土師器39点、須恵器42点、土製品3点		
奈良時代以前	須恵器				
弥生時代	弥生土器、石器		弥生土器19点		
縄文時代	縄文土器、石器、玉類		縄文土器26点、石製品45点、玉類2点		
合計		340箱	176点 (30箱)	300箱	10箱

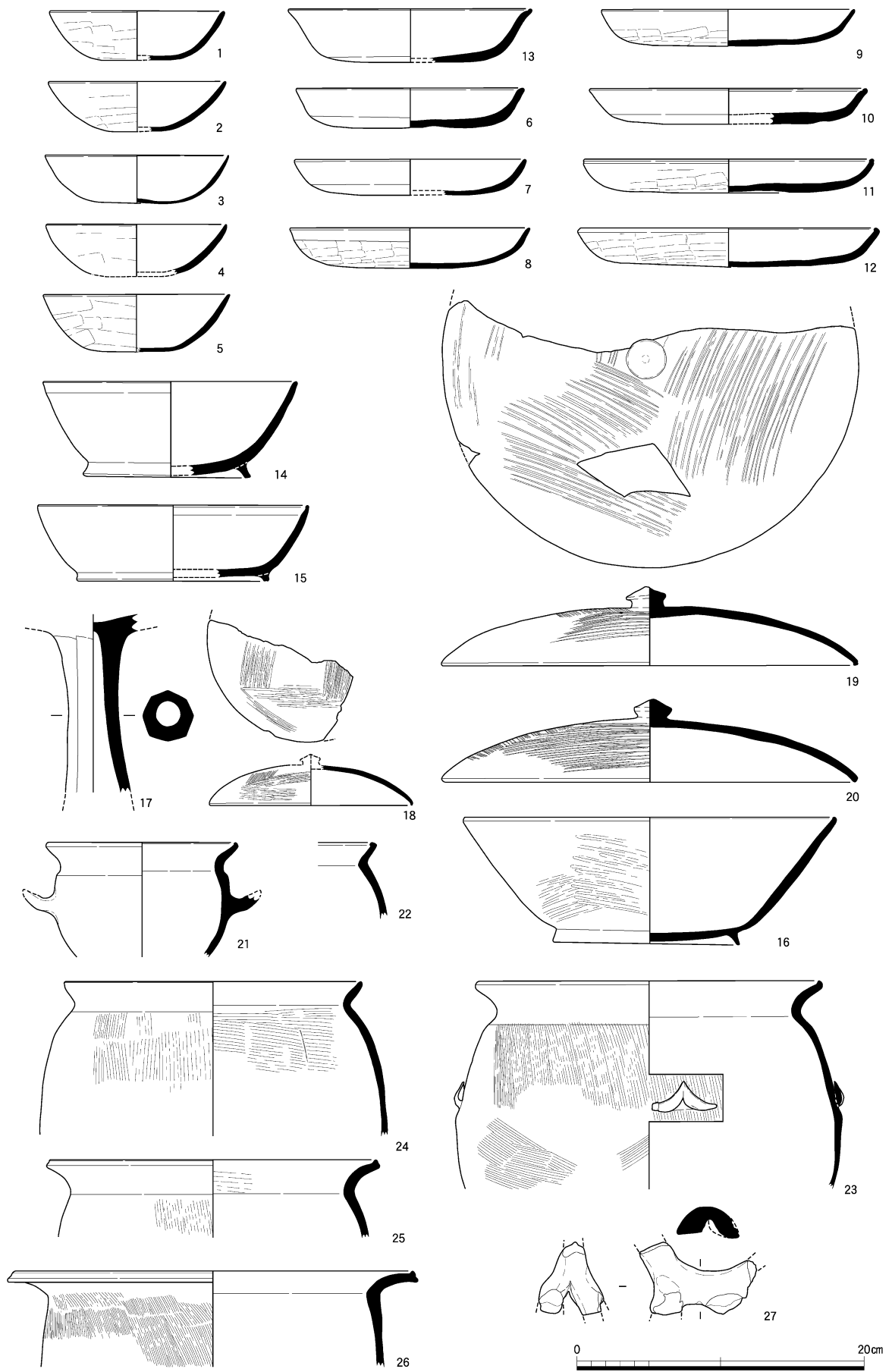


图 49 土坑 67 出土遗物实测图 1 (1 : 4)

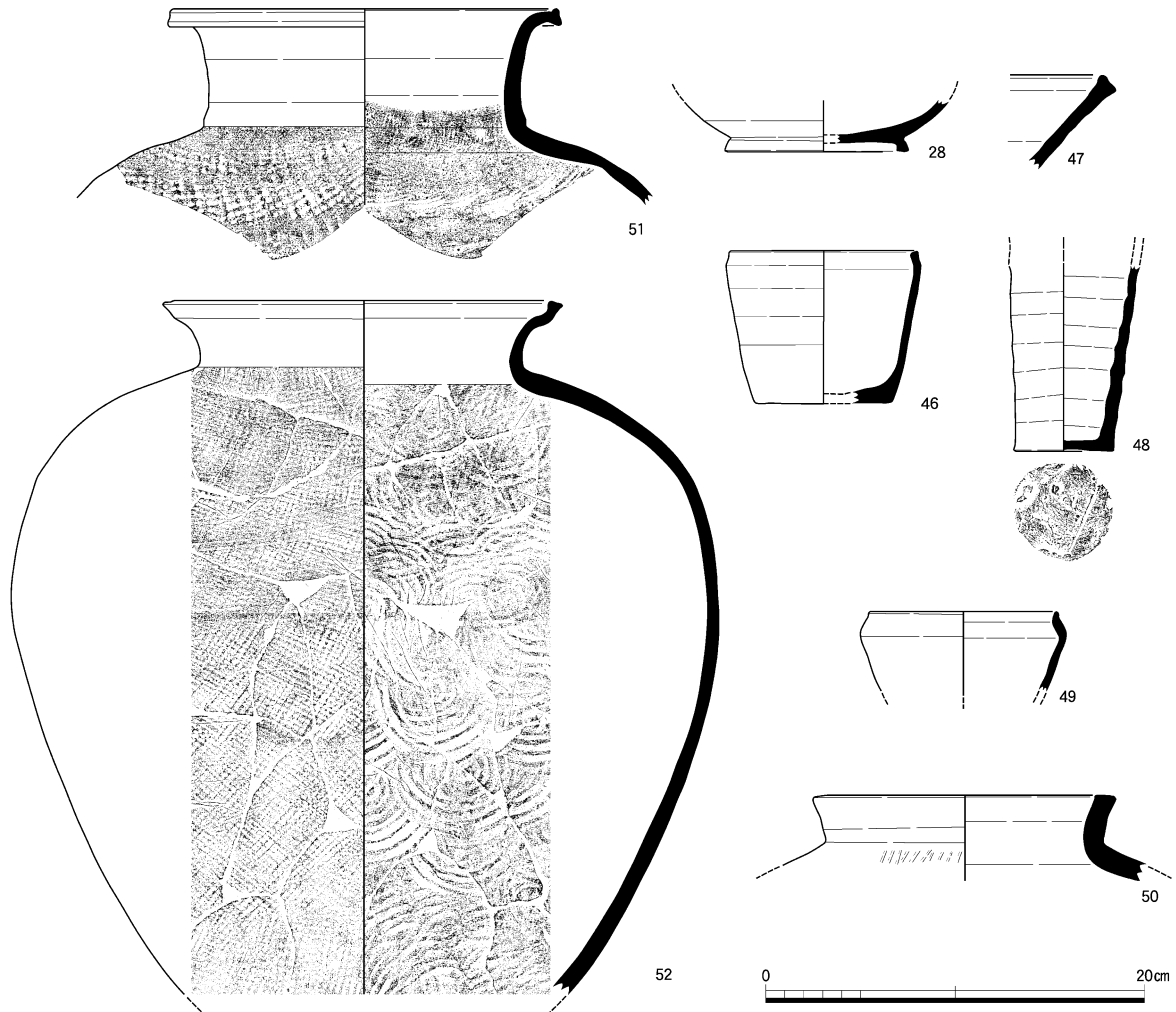
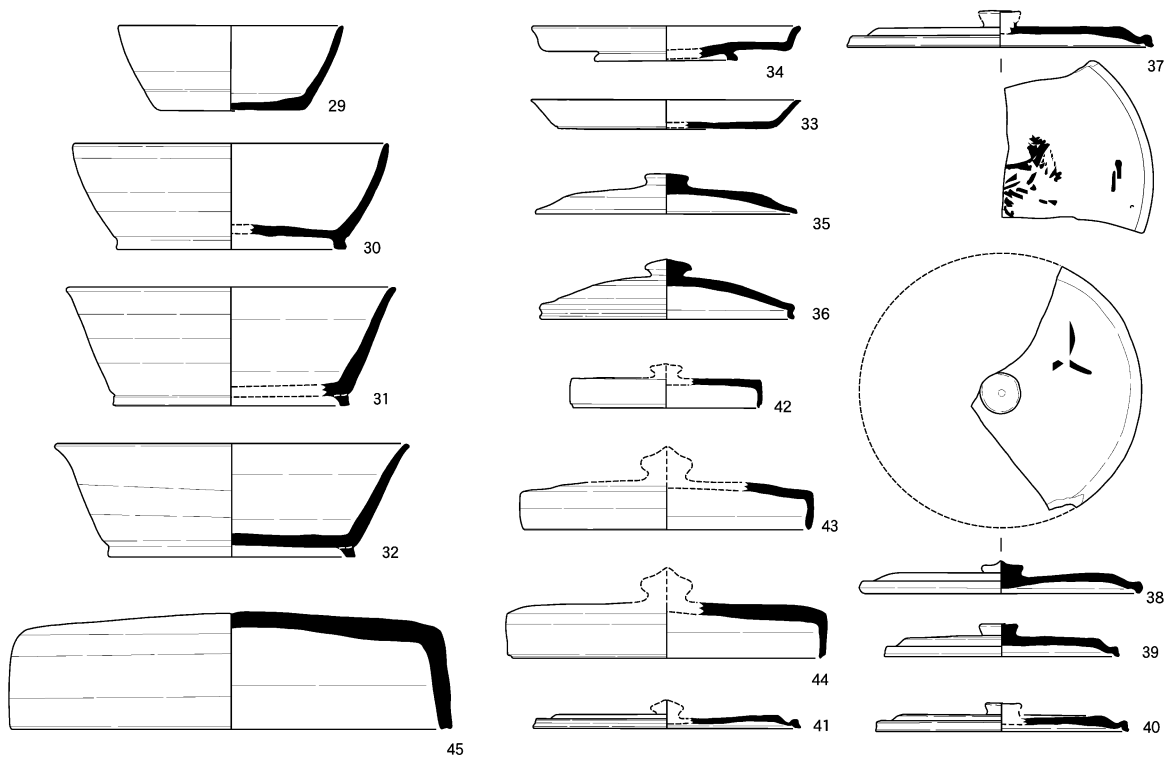


图 50 土坑 67 出土遺物実測图 2 (1 : 4)

れるが、磨滅の激しいものもある。粗雑な胎土で赤褐色を呈する3などのように器壁が薄く造られたものや、胎土が緻密で色調が橙色を呈し、調整も丁寧な1・5がある。皿AⅡ(6～9)は口径15.7～17.5cm、器高2.5～2.9cm。12は口縁端部が外反し、器壁が厚い。ナデ調整が施される在地系の土器である。8は体部中位までヘラケズリ、口縁部はナデ調整。9は磨滅気味であるが、口縁部付近までヘラケズリ調整。皿AⅠ(10～12)は口径19.2～20.7cm、器高2.4～2.8cm。9は器表が灰白色、断面が橙色を呈し、口縁部が外反し、調整にナデ調整が施されるものである。11・12は口縁部までヘラケズリ調整である。後者は口縁部までのヘラケズリ調整痕が顕著に残る。杯A(13)は口径17.1cm、器高3.1cm。口縁部は外反し、端部は丸く収められるもので、ナデ調整が施される。杯B(14～16)のうち、14・15は灰白色の軟質な胎土のもので、ミガキは施されずナデ調整される在地系のものである。口径17.8・18.8cm、器高5.3・6.7cm。16は径の大きいものでヘラミガキ調整が体部外面に顕著に残る。口径25.7cm、器高8.9cm。高杯(17)は脚部片で磨滅が激しい。脚部は8面体でヘラケズリ調整の痕跡が認められるが、ヘラミガキ調整の有無は不明。蓋(18～20)には大型の杯蓋19・20と、小型の杯蓋18がある。ツマミは欠損するが薄手作りのもの。大型のものは約28.6～28.7cm、器高5.5～5.8cm。いずれも胎土は良質で器表の色調が橙色。天井部には密なミガキ調整が施され丁寧に仕上げられる。甕(21～26)には上半部破片のものが多く、口径の計測できないものは断面のみで図示した。21～23は口縁端部が内へ丸く収められる。24はそのまま丸く収められる。25・26は口縁部が強く外反し、外端には沈線が巡る。21には把手が貼りつけられ、22は装飾として三角形の退化した把手が2方向に貼りつけられる。外面には刷毛目調整が、内面にも刷毛目痕が顕著に残るものがある。

須恵器には椀・杯A・杯B・蓋・皿C・壺G・鉢・甕などがある。椀(28)は丸みをもって立ち上がる底部。焼成時の降灰が付着する。杯A(29)は口径11.8cm、器高4.5cm。底部裏面にヘラオコシ痕が残る。杯B(30～32)は口径16.5～18.4cm、器高5.5～6.3cm。体部が内湾して立ち上がる30、体部が直線的に立ち上がる31、直線的で口縁部外反の強い32がある。皿には皿C(33)、高台の付く皿(34)がある。33は全体に直線的でシャープな皿。口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は平坦面となる。34は外反する短い口縁部が直立する蓋の可能性もある。杯蓋(35～41)は天井部に丸みをもって器高の高いもの、平らで器高の低いものがあり、欠損しているものも含めツマミが付く。37には天井部内面に粗描きな墨書が見られ、38には天井部外面に「*l*」状の墨書が見られる。40は天井部内面が円滑でわずかに墨痕が残り、転用硯として使用されたものである。壺蓋(42～44)はいずれも短頸壺の蓋である。小型の42は全体に直線的で焼成時の降灰が天井部外面に付着する。欠損するが宝珠形のツマミが付く。中型の43・44は天井部がわずかに丸みをもつ。大型の(45)は口径23.2cm、器高6.2cmと大型の壺蓋で摘みは付かない。焼成が甘く軟質。鉢には(46・47)がある。46はコップ形を呈し、口縁部はわずかに内傾する。47は大きく開く大型の口縁部である。壺には壺G(48)・壺E(49)がある。48は体部下半が残存し、外面にはロクロ目の痕跡が顕著に残る。器表色は青灰色を呈するが、断面は赤褐色を呈する。胎土に粒の粗い粒子を含み調整も粗い。49は内へ屈曲し立ち上がる口縁部を有する。甕50は屈

曲した口縁部上端が平坦面を呈する口縁部片。51は頸部外面のタタキ目がナデ消しされる。52は肩部から底部まで格子目叩きが施される。内面には頸部以下に青海波の当目痕が顕著に残る。

土製品には土馬(27)がある。頸部から体部の破片である。残存長8.1cm、残存高5.0cm。

土坑223出土土器(53~63)(図51、図版17・18)

土坑223の土器類の破片総数は445片あり、その内容は土師器93.4%、黒色土器0.0%、須恵器5.9%、その他・不明0.8%と、土師器の比率が他を圧倒し、須恵器も土坑67に比べ少ない。同様に緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器は出土しなかった。

土師器には椀A I・杯A・皿A I・II・盤Bなどがある。椀A I(53)は全体に丸みをもち、外面の底部から口縁部までヘラケズリ調整が施される。皿A I(55)・皿A II(54)は共に外面の底部から口縁部までヘラケズリ調整が密に施される。杯Aには(56・57)がある。56は体部外面にヨコ方向のナデを施し、口縁部が強いナデにより外反する。内外面には漆が付着する。57の外面には底部から口縁部までヘラケズリ調整が密に施される。盤B(58)粗い赤褐色の胎土を有する。外方に大きく開く体部上半には、不明瞭ではあるがヘラミガキが施される。口縁部は方形状を呈し、わずかに上方へつまみあげる。在地系の土器である。

須恵器には杯B、皿C、蓋などがある。杯B(59)の口縁部は直線的に延び丸く収められる。皿C(60)の口縁部は短く、端部に面をもつ。蓋には杯蓋(61)、壺蓋(62)、大型壺蓋(63)がある。63は土坑67出土の(45)と同形態で法量もほぼ同じである。

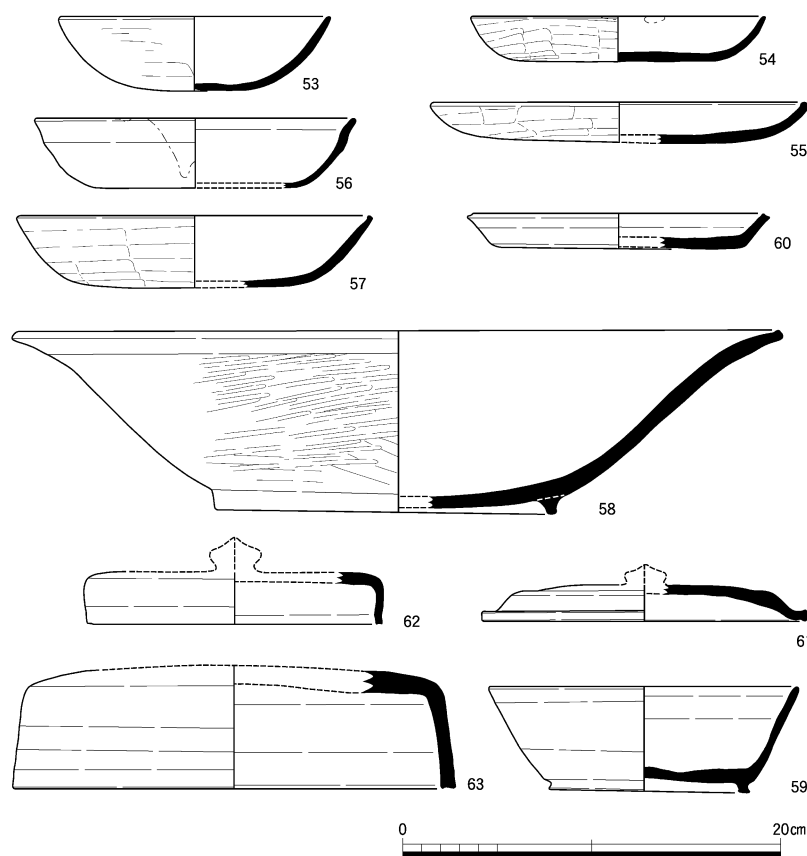


図51 土坑223出土土器実測図(1:4)

溝222出土遺物(64~69)(図52)

溝222の土器類の破片総数は1,357片あり、その内容は土師器90.8%、黒色土器0.1%、須恵器8.4%、その他・不明0.7%と破片数は土師器が多い数値を示す。破片数の割に接合遺物が少ない。

土師器には椀A I・杯A・皿A I・土師器壺E・土製品などがある。

椀A I(64)全体に磨滅気味であるが、ヘラケズリ調整が残る。口径13.4cm、器高3.9cm。皿A I(65)全体に磨滅気

味であるが、外面にはナデ調整が施される。杯 A (66・67) 全体に磨滅気味であるが、わずかにヘラケズリ調整が残る。壺 E (68) は肩部から内へ屈曲し、短い口縁部が直立する壺である。体部にヘラミガキ調整が残る。

土製品には土馬 (69) がある。土馬は頭部・胴半部を残し他の部位は欠損する。残存長 9.3 cm、残存高 7.3 cm。

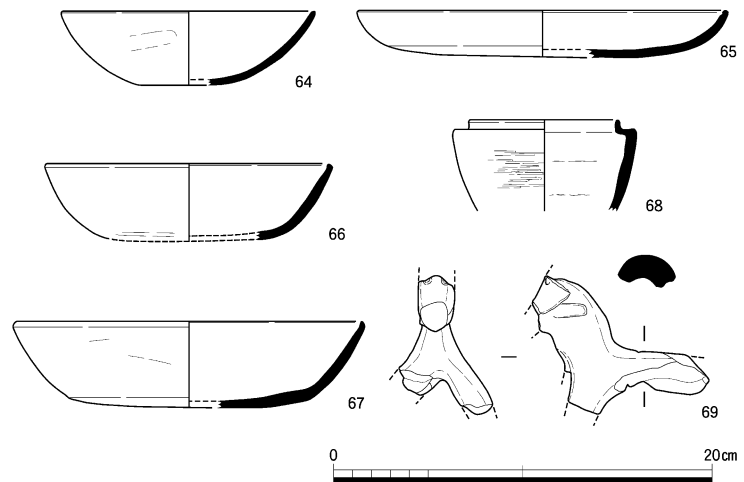


図 52 溝 222 出土遺物実測図 (1 : 4)

その他の遺構出土遺物 (70 ~ 83) (図 53、図版 17・18)

溝 13 の出土遺物には土師器、須恵器があり、図示できたものには土師器杯 A (70)、須恵器杯 A (73) がある。73 は体部に丸みをもち、底部にヘラ切り痕が認められる。

建物 2 (柱穴 115・118・170) の出土遺物には土師器・須恵器があり、図示できたものには須恵器杯 B (75・76) がある。75・76 は貼り付け高台、東海系で丁寧に成形・調整される。蓋に転用された可能性もある。

溝 164B (西三坊坊間小路) の出土遺物には土師器、須恵器があり、図示できたものには須恵器壺 L (81) がある。頸部以下は欠損する。

溝 188・177 の出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・瓦があり、図示できたものには土師器杯 B (71)、須恵器杯 A (72)・須恵器杯 B (74) 底部片がある。71 は全体に器壁が薄手に整形される。磨滅激しいがケズリ調整

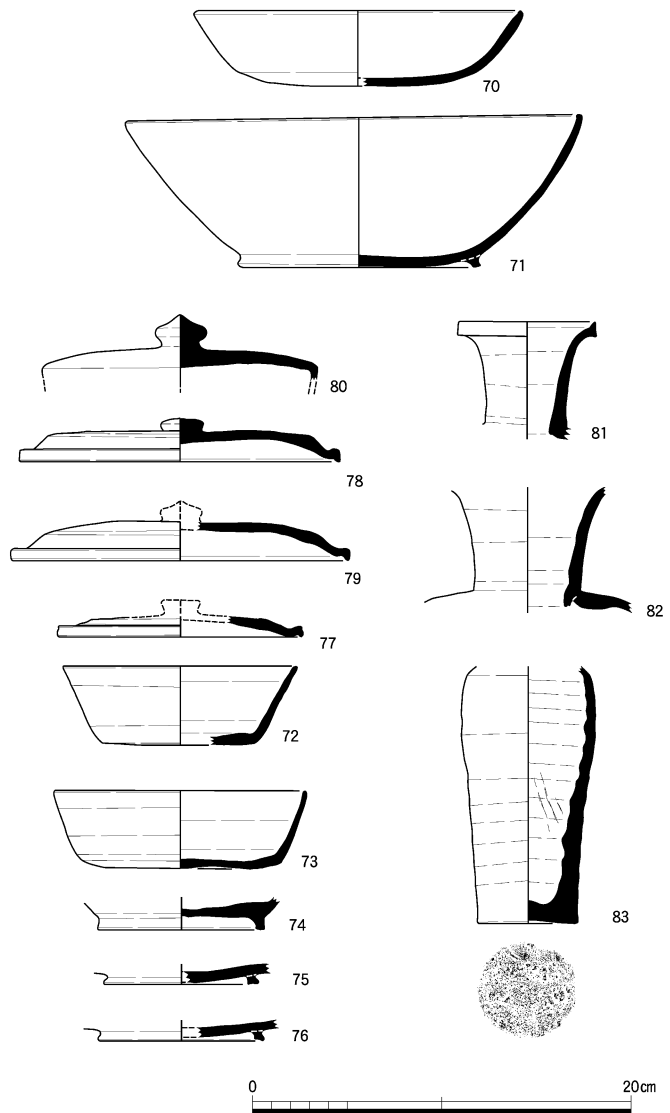


図 53 その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)

が体部に認められる。72は体部が直線的に開くもので、底部にヘラ切り痕が認められる。

整地層 163 の出土遺物には土師器・須恵器があり、図示できたものには杯蓋 (77・79)、壺蓋 (80) がある。80 は灰釉の短頸壺蓋でツマミの天井中央が突出する。

土坑 280 の出土遺物には土師器・須恵器があり、図示できたものには壺 L (82)、壺 G (83) がある。

(3) 弥生時代の遺物

竪穴住居 687 出土土器 (84～94) (図 54、図版 19- 1・19- 2)

床面で出土したもののほかに、中央土坑と考える土坑 509 と住居の柱穴の一つと思われるピット 801 でそれぞれ土器がまとまって出土している。

床面で検出した土器は小片が多く、図化できたのは壺 (84) のみであった。84 は頸部から外反して開く短い口縁部のつく小型の広口壺で、頸部にはヘラによる沈線が巡る。胎土はやや粗めで砂粒を多く含んでいる。口径は 14.0 cm。

土坑 509 から出土したものは壺 (85・88)、甕 (86・87)、鉢 (89) などがある。壺 85 は口縁部が大きく外反して開く広口壺で、口縁部端面に刻目を施す。頸部に篋描による沈線が 10 条巡る。胎土は精良でにぶい黄褐色を呈す。口径は 23.6 cm、頸部以下は欠損する。88 は平底で大型の壺の底部である。胎土は精良だが砂粒を多く含み、にぶい橙色である。底部径は 10.2 cm。甕 86・87 は直線的に外傾する体部から口縁部が短く開くもので、口縁端部には刻目が施される。頸部に篋描の沈線が巡らされ、86 は 8 条、87 は 2 条ある。86 は胎土がやや粗く、大きめの砂粒を多く含み灰白色、89 はやや精良な胎土でにぶい黄橙色で器壁が厚めである。87 は破片が小さく径が復元できないが、88 は口縁部径が 20.2 cm ある。鉢 89 は丸味をもって開く体部から短く口縁部が外反する厚手の大型品である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。口径は 42.5 cm ある。

ピット 801 からは壺 (90・91)、鉢 (92)、甕底部 (93・94) などが出土した。壺 90 は大きく外反して開く広口壺で、頸部に篋描による沈線が巡らされる。沈線は 8 条まで確認できる。胎土は精良で砂粒を多く含む。黄灰色を呈する。91 は大型の広口壺の底部である。径 10.2 cm の平底から体部が大きく開く。胎土は砂粒少なく精良で、灰白色を呈する。鉢 92 は短く外反する口縁をもつ大型のもので、頸部のすぐ下に小突起状の小さな把手が 2 箇所つく。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。口縁部径は 30.4 cm である。甕底部 93・94 は平底で、それぞれ径が 7.5 cm、7.0 cm ある。93 は胎土やや粗く砂粒多く含み灰白色、94 は胎土精良で灰白色を呈する。

土器棺墓 89 出土土器 (95・96) (図 55、図版 19- 2)

土器棺墓 89 の棺 (96) および蓋 (95) として用いられた土器であり、両者とも広口壺である。土器棺として据えられた状態で上部が削平されて失われている。95 は口縁部が大きく開く大型品と考えられるものの下半部である。上半部を欠いて蓋として用いている。大きく張る胴部の最大径辺りに凸帯を 1 条貼り付け、指頭圧痕による刻目を施す。底部は平底である。胎土は精良であるが砂粒を多く含み、灰白色を呈する。胴部最大径は 43.4 cm、底部径は 12.8 cm。96 は胴部が

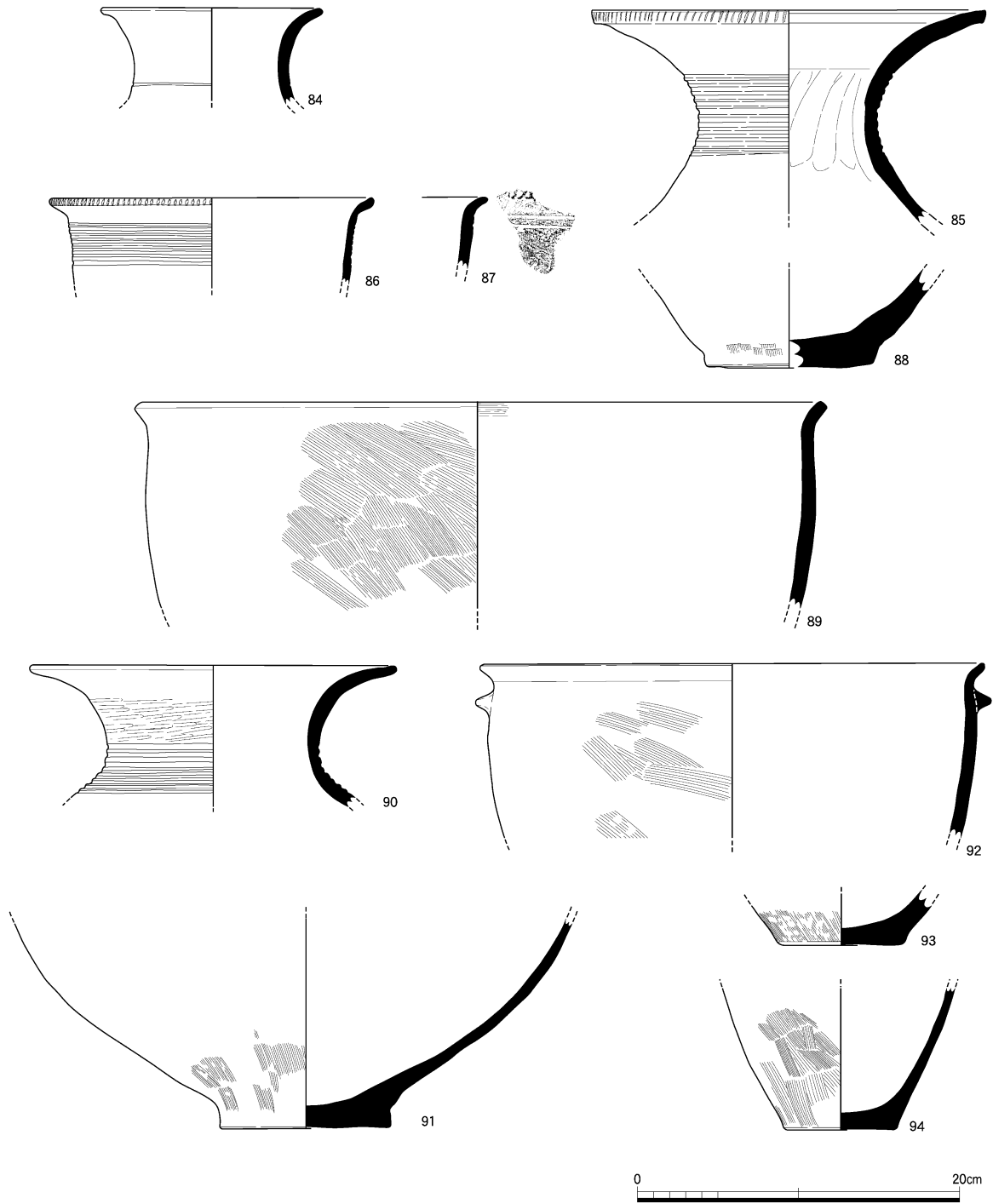
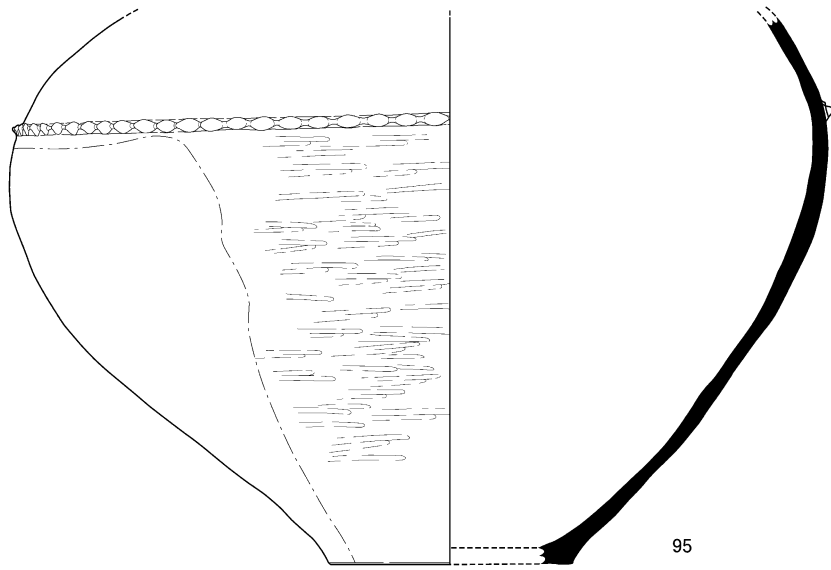


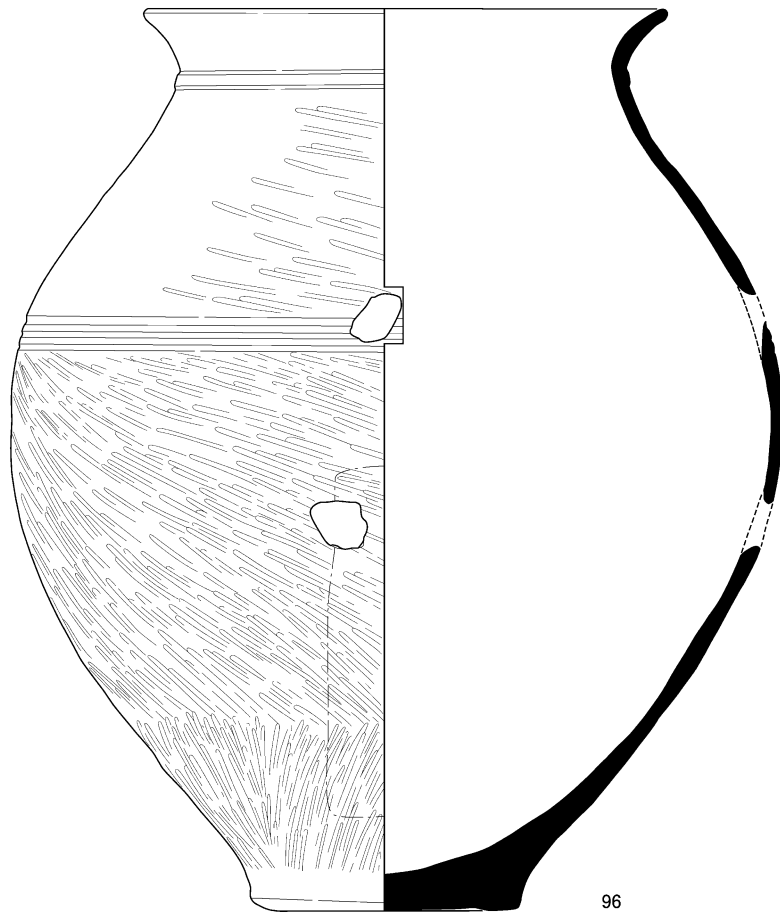
図54 竪穴住居687出土土器実測図(1:4)

あまり張らない体部から短く外反する口縁の広口壺である。頸部と胴部に削出突帯を1条巡らせ、胴部の突帯上に1条の篋描沈線を巡らせる。底部は平底である。体部に縦に並ぶように、2箇所
の穿孔を外側から施す。胎土は砂粒を多く含むが精良で、にぶい黄橙色を呈する。口縁部径27.3cm、
器高47.7cm、底部径14.0cm。なお、棺としたときに、先の穿孔が下面になるようにほぼ横位に
安置されていた。

土器棺墓275出土土器(97・98)(図56、図版20)



95



96



图 55 土器棺墓 89 出土土器实测图 (1 : 4)

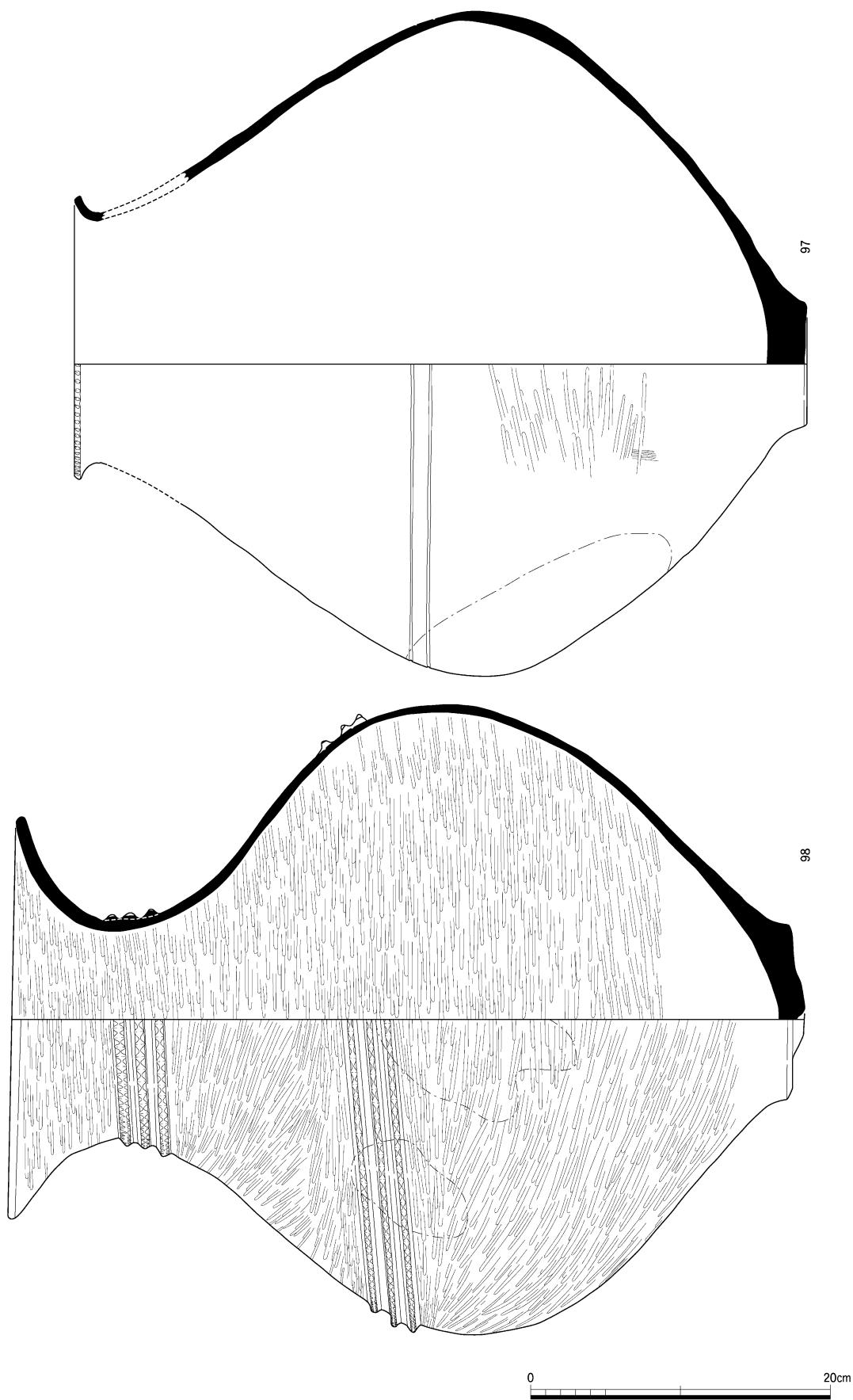


图 56 土器棺墓 275 出土土器实测图 (1 : 4)

土器棺墓 275 の棺 (98) および蓋 (97) として用いられた土器である。97 は強く張る体部から頸部が細くすぼまり、外反する短い口縁部がつく広口壺である。頸部に削出突帯が巡り、体部には沈線が 2 条巡る。頸部下半を欠き口縁部とは接合しないが、口縁部端面に刻目を施すものである。底部は平底である。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、灰白色を呈する。口縁部径 20 cm、復元高 50 cm、底部径 8.0 cm。98 は強く張る体部から頸部が細くすぼまり、大きく外反して開く口縁部がつく広口壺である。頸部と胴部に刻目貼付突帯が 3 条ずつ巡る。底部は焼成時に焼歪んでいるが、平底である。胎土は砂粒少なく精良で、にぶい黄褐色を呈する。口縁部径 26.7 cm、器高 53 cm、底部径 11.6 cm。

その他の遺構出土土器 (99 ~ 103) (図 57、図版 20)

土坑 253 出土の広口壺 (102) は、頸部に刻目貼付突帯を巡らせるもので、突帯は 3 条ある。突帯の下から体部へ 3 ~ 4 条からなる縦方向の篋描垂下直線文が施される。6 箇所に復元される。胎土は砂粒多くやや粗く、灰白色から浅黄橙色を呈する。

土坑 429 からは小型の甕 (99) が、土坑底部に横位に置かれた状態で出土した。平底の底部から緩やかに開く体部に短く外反する口縁部がつく。胎土は精良で灰白色を呈する。口縁部径 18.6 cm、器高 14.0 cm、底部径 7.6 cm。

土坑 490 からは甕 (101) が出土した。体部から短く外反する口縁部がつく。口縁端面に刻目を施す。頸部に篋描による沈線が 4 条巡る。胎土は砂粒多く含むが精良、にぶい黄橙色を呈す。

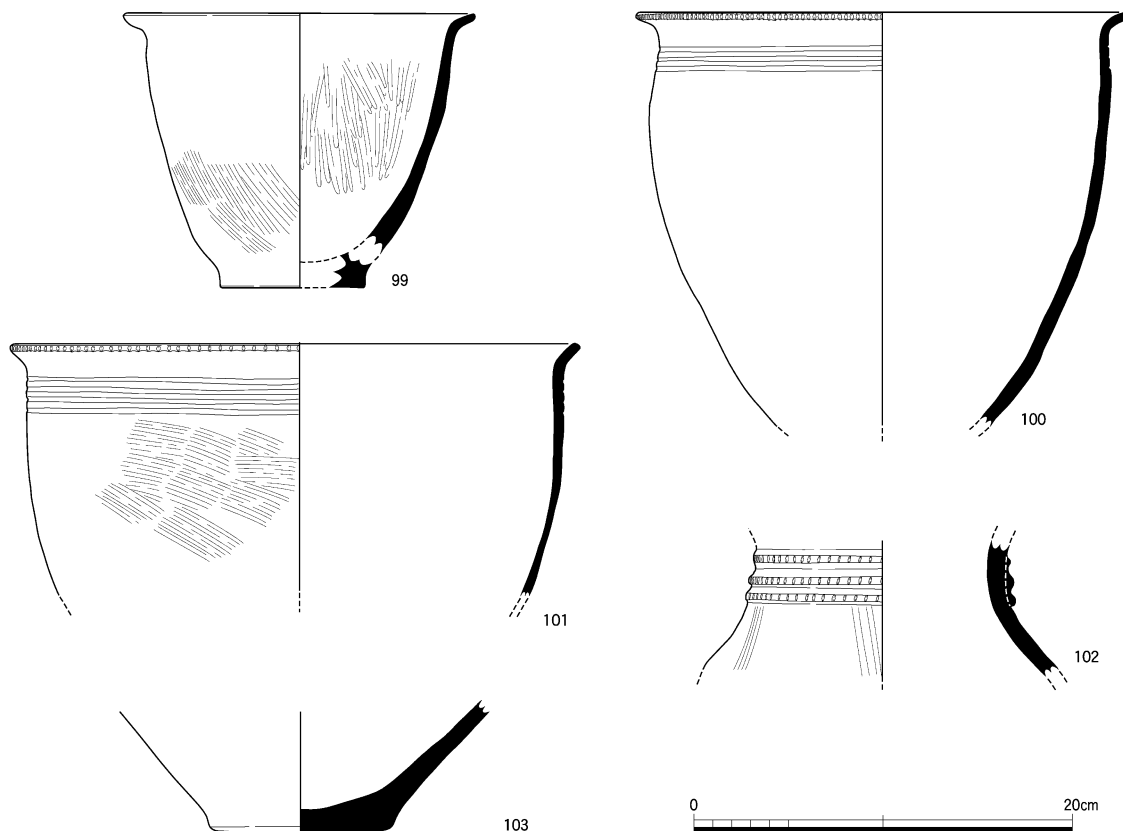


図 57 その他の遺構出土土器実測図 (1 : 4)

口縁部径 15.0 cm。

土坑 597 から甕 (100) が出土した。胴部上半がやや張りをもつ体部から短く外反する口縁部がつく。口縁端面に刻目を密に施す。頸部には篋描による沈線が 3 条巡る。胎土は砂粒多く含むが精良、灰黄褐色を呈する。口縁部径 25.6 cm。

土坑 779 からは壺の平底の底部(103)が出土した。胎土は精良、灰白色を呈する。底部径 9.8 cm。

(4) 縄文時代の遺物

a) 土器類

竪穴住居 1294 出土土器 (104 ~ 115) (図版 21- 1)

竪穴住居 1294 からは深鉢・浅鉢などの縄文土器と台石や石片を含む石器類が出土した。土器は小片が多いが、床面で検出した一群を掲載した。浅鉢 (104 ~ 107・110)、深鉢 (108・109・111 ~ 115) などがある。浅鉢は胴部上半で強く屈曲し口縁部が大きく開き端部がちあがるもので、外面に沈線が施されるもの (104・105) と沈線のないもの (106) がある。107 は口縁部が大きくひらくものと思われる。110 は体部の屈曲部である。深鉢は 108 が波状口縁であるほかは、いずれも体部から口縁部が外傾して開くものである。口縁部外面に条痕が明瞭に残るもの (109) と屈曲部に強いナデを施すもの (112・113・115) がある。111 は深鉢の底部と考えられる小片であるが、外面に赤色顔料が塗布されている。114 は中央が凹む底部で、いわゆる生駒山西麓産胎土のものである。

土器棺墓 340 出土土器 (116) (図 58)

土器棺墓 340 の棺として使われたものである。張りの弱い体部に、外傾して開く口縁部がつく深鉢である。頸部の大半が欠損しているが屈曲部にナデを巡らせる。底部は棺として転用する際に欠損させている。胎土は砂粒多く含みやや粗く、にぶい黄褐色を呈する。口縁部径 24.5 cm。

土器棺墓 349 出土土器 (117) (図 58、図版 22)

土器棺墓 349 の棺である。張りの弱い体部から弱い屈曲をもって波状の口縁部を立ち上がらせる深鉢である。頸部から口縁部には条痕が明瞭に残る。波状の突出は 4 箇所ある。底部は転用時に欠いている。砂粒多く含むが精良で、いわゆる生駒山西麓産胎土である。口縁部径 27.0 m。

土器棺墓 354 出土土器 (120) (図 59)

土器棺墓 354 の棺である。張りの弱い体部に外傾して開く口縁部がつく深鉢である。頸部に強いナデが巡る。転用時に体部の下半を欠く。胎土は砂粒多くやや粗く、灰黄色を呈する。口縁部径 37.6 cm。

土器棺墓 845 出土土器 (121) (図版 22)

土器棺墓 845 は本調査の縄文時代晩期の土器棺墓では唯一、2 個体の土器を組み合わせで蓋と身としたものである。121 は棺身として転用されたもので、張りの弱い体部に外傾して開く口縁部がつく深鉢である。平底の底部がある。胎土はやや荒く砂粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。口縁部径 35.0 cm、器高 38.0 cm である。蓋として用いられたものもくの字口縁の深鉢で、口縁部外

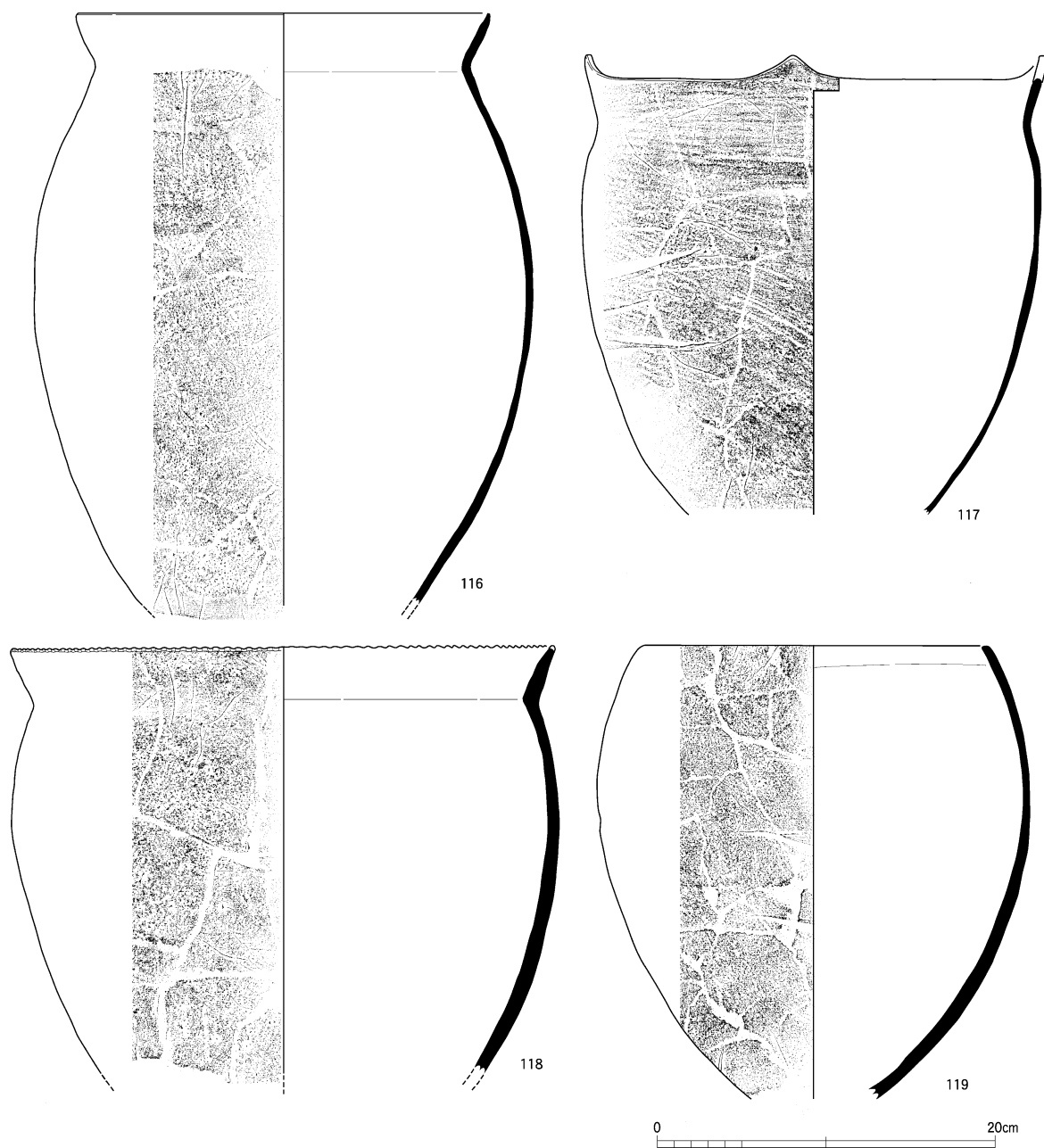


図 58 土器棺墓 340・349・1291・1640 出土土器実測図（1：4）

面に条痕が明瞭に残り、頸部屈曲部に強いナデを施すものである。

土器棺墓 1271 出土土器（122）（図版 22）

土器棺墓 1271 の棺として転用された、倒卵形の体部から大きく口縁部が開く深鉢である。底部は転用時に欠かれている。口縁部端面には刻目が巡る。胎土は砂粒が比較的少なく精良で、浅黄橙色を呈する。口縁部径 33.0 cm。後述するが、棺内から磨製石斧（図版 23- 2-157）が 1 点出土している。

土器棺墓 1288 出土土器（123）（図版 22）

土器棺墓 1288 の棺として転用された深鉢である。倒卵形の体部に強く明瞭なナデによって屈曲する頸部から外反する波状口縁がつく。口縁部端面には刻目が施される。底部は径が 3 cm と小

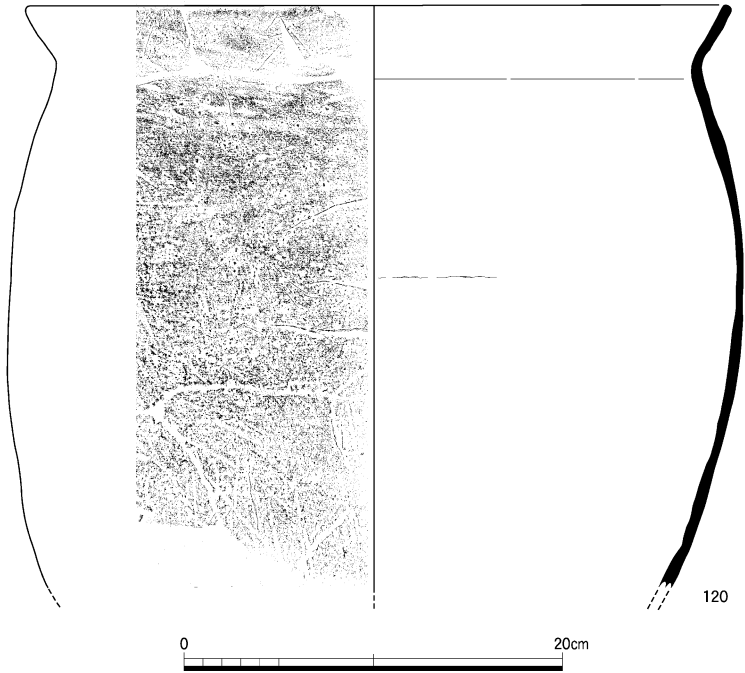


図 59 陶器棺墓 354 出土土器実測図 (1 : 4)

振りな平底である。胎土は砂粒多く含みやや粗く、にぶい褐色を呈する。口縁部径 33 cm。

陶器棺墓 1291 出土土器 (118) (図 58、図版 22)

陶器棺墓 1291 の棺として転用された外傾して開く口縁の深鉢である。張りの弱い体部から強いナデにより屈曲する頸部、短く立ち上がる口縁部がつく。口縁部端面に刻目が巡る。器壁はやや厚い。体部下半を欠損する。胎土は砂粒多く含みやや粗く、にぶい黄橙色を呈す。口縁部径 31.8 cm。

陶器棺墓 1640 出土土器 (119) (図 58、図版 22)

陶器棺墓 1640 の棺として転用された無頸の深鉢である。倒卵形の体部で、口縁端部は上面にやや面をもって納める。転用時に底部を欠く。胎土は砂粒少量で精良、褐灰色を呈する。口縁部径 20.4 cm。

溝 1067 出土土器 (124 ~ 129) (図版 21-2)

溝 1067 からは土器・石器類が多量に出土している。ここではごく一部であるが、文様の明らかな浅鉢を取り上げる。丸底の体部から屈曲して口縁部が大きく延びるもの (124・128・129) は口縁部外面に緻密な文様を施す。これらは生駒山西麓産胎土である。球形体部に短い口縁部が外反するもの (125・126) や体部が屈曲するもの (127) には体部の肩部に帯状の文様帯を付す。

b) 玉類 (130・131) (図 60、図版 20)

玉類は 2 個出土している。

130 は滑石製勾玉である。第 5 面調査区中央北の土坑 1487 の埋土より出土した。勾玉通有の横方向の穴のほかに、縦方向に穴が貫通する、いわゆる緒締形のものである。縦横の穴は内部でつながっている。厚み 1.1 cm、最大長 4.0 cm。

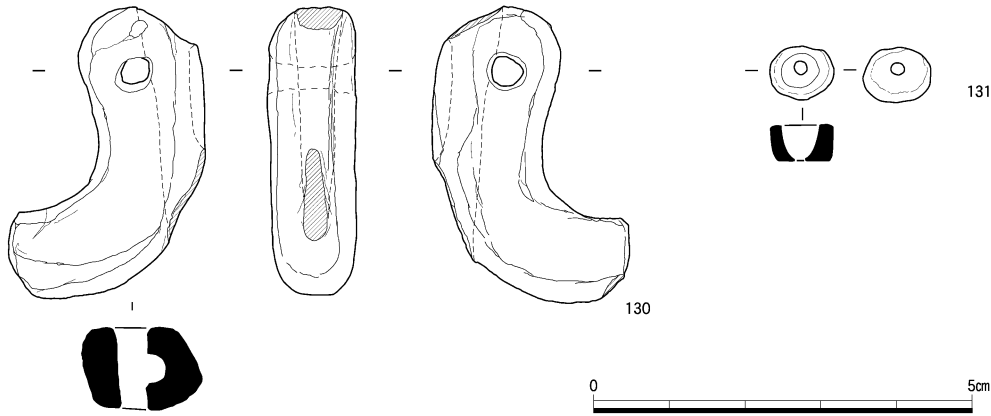


図60 滑石製勾玉・翡翠製丸玉実測図（1：1）

131は翡翠製丸玉である。第4面調査区中央北よりで出土した。やや歪であるが、長径0.9cm、短径0.7cmの楕円形、厚さは0.5cmである。ほぼ中央に穿孔をなすが、一方向より貫通したままとなっている。穿孔側の径は0.5cmであるが、反対側の径は0.15cmである。比重は3.32である。

c) 石器類

石器には石鏃、石錐、石斧、磨石、凹み石、石皿、砥石、台石、敲石、石錐、石棒（石刀）など多種多様なものが各遺構・包含層などから出土している。ここでは主なものについて述べる。

石鏃（132～151）（図版23-1）

石鏃はとくに多く出土している。いずれもサヌカイト製のものである。形状は様々であるが、おおよそ大きさから1.8cm未満の小型のもの（132～135）、2cm前後のもの（136～141・143・144）、2.5cmを越す大型のもの（142・145～150）があり、151は3.4cmの超大型品である。

石錐（152～154）（図版23-1）

石錐も各所から出土している。石鏃と同様にサヌカイト製である。152・153は先端部のみである。154は上部が欠損しているようであるが、刃部は3cm、径が0.7cmである。

磨製石斧（155～157）（図版23-2）

小型の磨製石斧である。いずれも破損している。丁寧に磨かれている。特に、157は残存するミガキ面が火を受け変色している。土器棺墓1271の棺内埋土から出土しており、副葬品として入れられた可能性が考えられる。

石棒（158～163・165・166）（図版23-2）

本調査で検出したものはいずれも断面形が三角形に近いもので、いわゆる鏑のある「石刀」といわれるものである。破損した状態で比較的多く出土している。多くのものは粘板岩系の素材のもので、砂岩質のもの（163）は少ない。158・159は把部である。沈線を巡らせて文様帯を区切り、格子文や羽状文を線刻する。160・161は刃部、162・163は先端部である。このほか敲打痕のみられる未成品と思われるもの（165・166）なども多く出土している。

石錘（164）（図版23-2）

扁平な石の側面にそれぞれ2箇所対応するように浅い抉りのあるものである。網代などを編む

ときの錘として用いられたものと思われる。

石斧 (167～169) (図版 24)

幅 5～6 cm、長さ 10～11 cm の砂岩系のものである。ここでは石斧としたが、いずれも刃部が欠損しており、その部分で敲打したような痕跡も認められるので、敲石としても良いかもしれない。

磨石・凹み石 (170～174) (図版 24)

円形に近く凹みの顕著でない 170 は磨石、楕円形に近い形状で凹みが 2 面あるいは 4 面に認められる 171～173 は凹み石とした。また、やや棒状に長い 174 は上端と下端に磨痕が、側面には顕著ではないものの凹みが認められ、両方の用途で使用されたと思われる。

台石 (175・176) (図版 24)

大型の扁平なもので各面に磨り痕が認められるもので、175 も 176 も破損して廃棄されたものと考えられる。同様のものは各所から多く出土している。

5. ま と め

本調査は、京都市都市計画道路、伏見向日町線道路新築工事に伴う発掘調査の一環として実施した。2001 年度に試掘調査、2003 年度・2005 年度・2006 年度に発掘調査を行い、発掘調査としては 4 年度目にあたる。

本調査では 2006 年度調査と合わせ、長岡京期の右京二条三坊八町・一町の状況を明らかにし、一条大路の南側溝および西三坊坊間東小路の東西両側溝を推定通り検出した。また、上里遺跡に関しては、弥生時代前期、縄文時代晩期の遺構・遺物を多く検出した。特に、これまで近畿地方以西では部分的にしか知られていなかった縄文時代晩期の集落をまとめた状態で良好に検出でき、当該期集落の様子を明らかにできたことは大きな成果である。

以下では、時代別の概観を述べて、本年度の調査のまとめとする。

長岡京期 (図 61) 2006 年度の調査では長岡京右京二条三坊八町のおおよそ西 2 / 3 を調査し、今回の調査は同町の残り東 1 / 3 と西三坊坊間東小路、さらに東の三坊一町の西 1 / 3 程度を調査した。東西に貫く一条大路の南側溝を含む、それぞれの町の北 1 / 4 の位置にあたる。

条坊関係の遺構としては、一条大路および南側溝、西三坊坊間東小路および東西両側溝を想定通りの位置に検出した。

八町ではほぼ中央に 2 間×5 間の掘立柱建物 5 棟が整然と南に開く「コ」字状に配され、その東にはやや離れた位置に 3 間×3 間の総柱掘立柱建物と 2 間×2 間の掘立柱建物を検出した。この町の西部では建物が検出されておらず、空地となっていたと考えられる。今回の調査においても一町の西 1 / 3 で建物が検出されなかったことは、この八町と同様の状況であったと推測される。

本調査で留意される遺構として、一町・八町ともに大路・小路に沿った内溝相当場所で検出した掘込みがあげられる。一町で整地層 163・小溝 180・189～194、八町で土坑 67・223 など

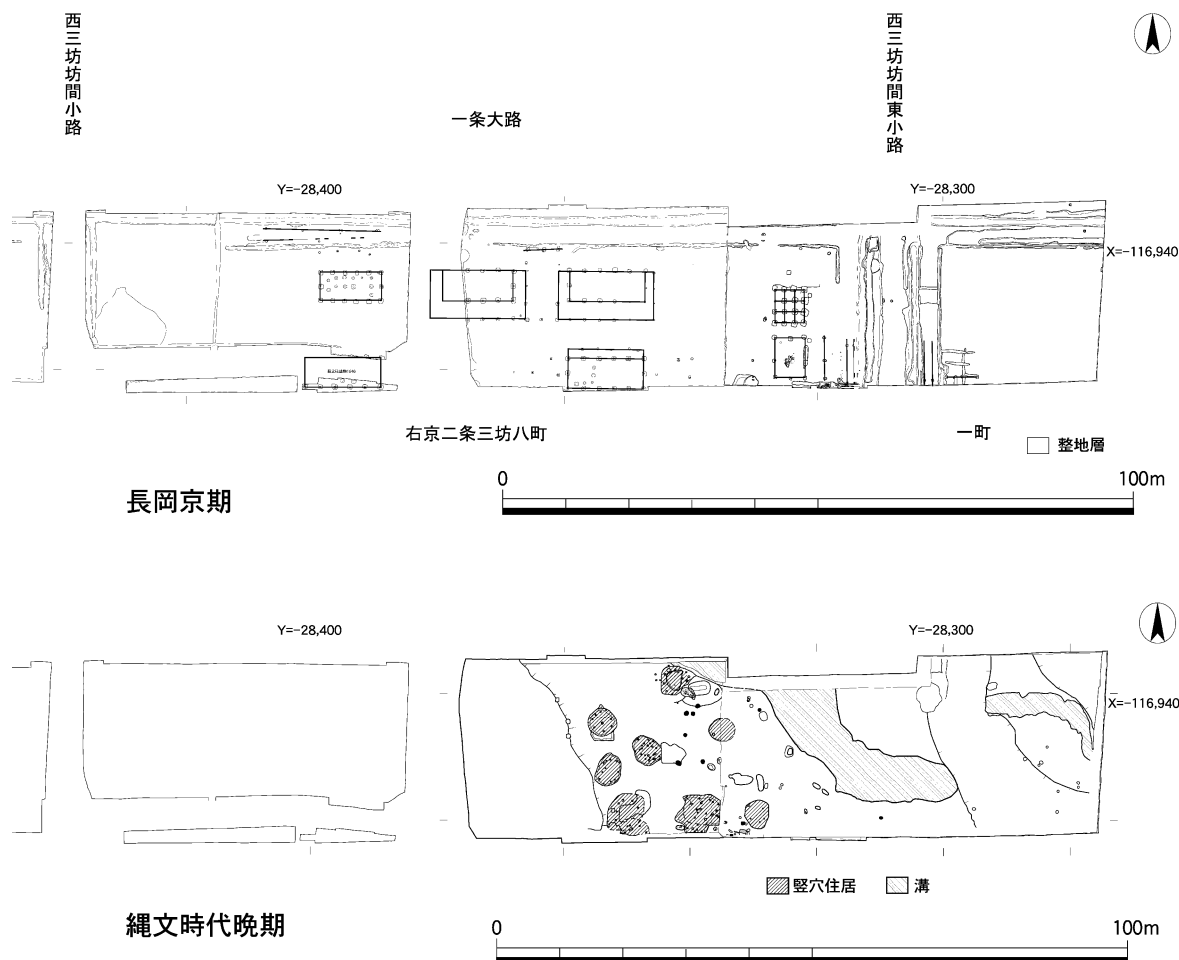


図 61 長岡京期・縄文時代晩期遺構略図（1：1,200）

第 1 - 2 面の遺構として取り上げたものである。一町のもは一条大路・西三坊坊間東小路沿いに道路側が深くなる浅い掘込み（整地層 163）があり、一条大路沿いでは東へなだらかに傾斜している。その下面で小溝を検出している。一方、八町のもは西三坊坊間東小路沿いに掘られた南北方向の一連の遺構であろうと考える。部分的に深くなっている箇所が土坑 67 であり、土坑 223 である。これら深くなっている箇所ではいずれも下部に滞水していたことを示す土層を確認している。これらの状況から、両町での状況は異なるが、いずれも排水に関連する遺構であり、その時期は長岡京造営時であろうと考えられる。

弥生時代前期 2006 年度調査では土器棺墓やピットなどを検出した。時期は畿内第 I 様式中段階から新段階に位置付けられる。今回の調査でも同時期の土器棺墓・ピットのほか、竪穴住居とその残欠の可能性のある焼土痕（炉）などを検出した。竪穴住居 687 は大型の円形住居であった。

縄文時代晩期（図 61）2006 年度調査では竪穴住居 7 棟、土器棺墓 6 基、土壙墓 3 基をまとめた範囲で検出し、当該期集落の様子わかる例として注目された。今回の調査では同一の集落に属する竪穴住居 1 棟、土器棺墓 8 基、土壙墓 1 基、土坑・ピットなどと、この集落の東を画する溝 1215 を確認した。やや南へ展開する可能性も残されている。これら竪穴住居 8 棟が溝 1215 を東の限りとして円弧をなして配列し、その中央の空閑地から南部にかけて土器棺墓 14 基、土壙

墓4基などが配される集落内の遺構の構成状況がほぼ明らかになったといえよう。これまで近畿地方では単発的な遺構の検出にとどまっていた当該期の成果に照らせば、大きな成果である。

また、溝1215は自然の凹みを利用したものと考えられ、検出・堆積状況より住居域から多くの不用物を投棄した状況がみられる。廃棄物内に当時の自然環境を示す資料や食物残滓などが見つかる可能性があるため、溝内堆積物については部分的に土壌サンプルを採取しており、現在分析中である。すでにこれまでに動物の骨、堅果粒・穀類などの炭化物が見つかり今後も分析を続ける予定である。

一方、調査区の東にも土器棺墓7基や焼土痕、土坑などが検出されていること、また北寄りに溝1067があって多くの土器・炭化物などが廃棄されていることなどから、この地域にも居住域が展開していた可能性が考えられる。

次年度、一連の道路建設に伴う調査の最終年度として、本調査区の東隣の調査が計画されている。次年度調査予定範囲のさらに東は小畑川の氾濫原であることがわかっており、長岡京関連遺構や上里遺跡の東への展開の状況を解明する一連の調査の最後の機会として期待される。

6. 付章 縄文時代晩期の溝遺構の年代と植物化石

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の報告では、上里遺跡における縄文時代晩期の古環境に関する情報を得ることを目的として、集落跡が確認された R878 調査区東側の R903 調査区で検出された縄文時代晩期の溝 1215 埋土を対象とした自然科学分析調査成果の概要について報告する。

1 調査地点

調査地点は縄文時代晩期の溝 1215 である。本溝は、調査区内の堆積層の累重状況や遺物の出土状況から、縄文時代後期から縄文時代晩期にかけて機能していた流路が、蛇行切断による河道の短絡や転流による河道のつけかえなど、何らかの変化によって生じた放棄流路の凹地を利用して構築されている。分析土壌の採取地点は北セクション中央部である（図 47 A - A'）。本溝を埋積する堆積物は、層相変化から 6 層準に区分される（図 62）。便宜的に上位より層準 A～F と呼称する。なお、図 47 A - A' との層の対応関係はおおよそ以下の通りである。層準 A = 1・2、B = 3～5、C = 14～16、D = 16～18、E = 19、F = 25。

溝底には大きさ 15～25 cm 程度の大礫が密に分布する。この礫間を充填する層準 F は細粒砂～泥の互層からなり、不明瞭ながら葉理構造をなし、縄文時代晩期の土器が出土する。その上位の層準 E は、炭化材等の炭化物や土器を多く含む泥からなり、著しく擾乱されているため不明瞭となっているが葉理構造が確認される。以上の層相から、層準 E・F は水底下で形成された堆積物と判断されるが、擾乱状況を踏まえると、常時水位が高かったのではなく、水位の低い時期を挟んでいたことが推定される。また、これらの堆積層が溝の機能期に形成された堆積物である可能性が高い。

層準 D は集合体なし偽礫（ブロック土）がまじる泥、層準 C は細粒砂の薄層を挟在する、砂質泥～泥質砂の偽礫ないし集合体が混じる砂質泥からなる。いずれの層準も擾乱されている。混入

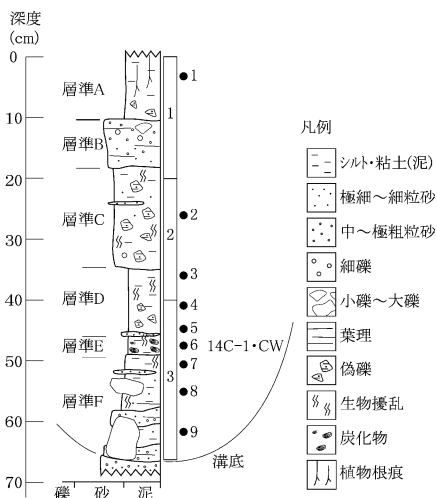


図 62 溝 1215 埋土の累重状況

する偽礫ないし集合体の形状は垂角状をなすものが多く、大きさや、その配置が不揃いである。以上の層相から、層準 D・C は氾濫堆積物や溝周囲からの堆積物が流入する時期を挟在する土壌の形成が行われるような状況下で形成された堆積物と判断される。放置期ないし埋め戻しの影響を受けた堆積物と考えられる。

層準 B は、氾濫洪水堆積物の示相堆積構造（増田・伊勢屋, 1985）である逆級化成層をなす細粒砂～中粒砂からなり、溝内に流入した洪水性堆積物と判断される。この氾濫堆積物の流入後、形成された層準 A は著しく擾乱されている泥からなり、土壌発達する環境下で形成され

た堆積物と判断される。

2. 層準Fの炭化物の放射性炭素年代

放射性炭素年代測定結果とその暦年較正結果を表4・図63に示す。

溝1215埋土下部の層準Fから抽出した草本植物由来の炭化物の放射性炭素年代測定値は、 $2,960 \pm 30$ 年前を示した。谷口(2001)による集成では、縄文時代晩期の 14C 年代値が $3,000 \sim 2,400\text{ yrs BP}$ を示すとされる。このことから、今回の年代値が縄文時代晩期初頭の年代に相当し、出土土器の時代と同調的な結果といえる。

3. 植物化石の産状

植物化石の検討は、溝機能期の可能性が高い層準Eを中心に大型植物化石分析・炭化材同定・花粉分析調査を実施したが、花粉化石および大型植物化石の保存状態が悪く、産出化石数が少なかった。花粉化石では風化に対する抵抗性が強いとされるモミ属花粉やシダ類胞子がわずかに産出ただけである。大型植物化石では炭化材や炭化物片が確認されたが、種類を特定できる種実などは確認されなかった。一般に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967; 三宅・中越,1998など)。この点と、上記した溝内の堆積環境を踏まえると、植物化石は堆積時・後の風化作用の影響により分解・消失しているものと考えられ、そのため炭化物のみが残存したものと思われる。

炭化物は、針葉樹1種類(モミ属)、広葉樹3種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ近似種・エノキ属)、小片で保存状態が悪いため種類が特定できない草本類(横断面で放射組織が認められないことから草本類の茎等と考えられる)、組織が全く観察できない種類不明の炭化物が確認された(表5)。このうち、落葉広葉樹の分類群は、いずれも河畔林や二次林の構成種を含む。また、

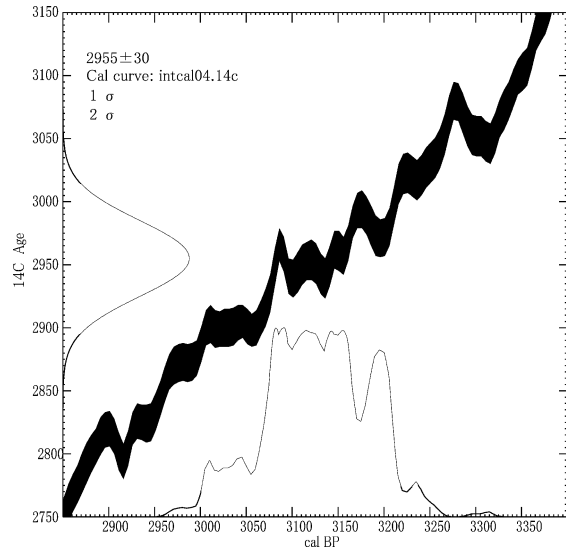


図63 暦年較正結果

表4 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

層位	試料の質	測定年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正結果				相対比	Code No.
					σ	calBC	cal BP	相対比		
最下層	草本由来の炭化物	$3,010 \pm 30$	-28.30 ± 0.70	$2,960 \pm 30$ (2955 ± 30)	σ	1,256 - 1,236	cal BP 3,205 - 3,185	0.166	IAAA-71969	
						1,215 - 1,126	cal BP 3,164 - 3,075	0.834		
					2σ	1,289 - 1,282	cal BP 3,238 - 3,231	0.007		
						1,269 - 1,053	cal BP 3,218 - 3,002	0.993		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 測定年代・補正年代に付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
- 5) 暦年較正の計算には補正年代の括弧内に示した丸める前の値を使用している。
- 6) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように1桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表5 炭化物同定結果

遺構	層位	分類群	
		樹種	学名
溝1215	層準E	エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
		草本類	-
		草本類	-
		草本類	-
		モミ属	<i>Abies</i>
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>
		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris</i>
		クリ近似種	<i>cf. Castanea crenata Sieb. et Zucc</i>
		エノキ属	<i>Celtis</i>
不明	-		

モミ属も立地から考えて、暖地でモミ・ツガ林を構成する温帯性針葉樹のモミに由来すると思われる。これらの炭化木材を周辺から得ていたとすれば、縄文時代晩期の遺跡周辺では、氾濫原にクヌギ節、クリ近似種、エノキ属が河畔林を構成し、周辺の山地・丘陵地の裾部等にモミ属が生育していたと推定される。

ところで、今回の調査区が位置

するような河川の周辺植生は、その土壌条件や、繰り返される氾濫という攪乱のために、河川からの距離によって植生の遷移系列がみられたり、独特の様々な群落が維持されたりする(坂本,1987)。また、植生は気候的条件が同様であっても多様であり、その多様性は土砂くずれや山火事、河川の氾濫などの「攪乱」の種類が大きく関係しており、その頻度、再来間隔、予測性、面積、強度といった攪乱レジームの状況に適応した植物からなる植生が形成されている(中静,2004)。今回、炭化材で確認された落葉広葉樹の樹種は、いずれも遷移の途中相をなす種類であり、ある規模・間隔の河川攪乱の影響を受ける領域で維持される植生の構成要素である。また、モミなどの温帯性針葉樹も斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壌が露出する攪乱地が生育適地とされる(中静,2004)。これらの点を踏まえると、今回の炭化材の種類が調査区近辺の植生に由来し、かつ人間に利用されたものだとすれば、当時の調査区周辺の植生は河川攪乱等の影響を受ける領域の植生であり、鬱蒼とした照葉樹林の成立領域でなかったことになる。この点は、縄文時代晩期の人間活動と地形変化や植生変化との対応関係を捉える上で重要な課題である。今回の調査では、花粉や大型植物化石の保存状態が悪く、植生の空間分布を推定することができなかったが、今後行われる低地の調査時に検証していく必要がある課題である。

引用文献

増田富士夫・伊勢屋ふじ子,1985,"逆グレーディング構造":自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造.堆積学研究会会誌,22・23,p.108-116.
 三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
 中静 透,2004,日本の森林/多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ.東海大学出版会,236p.
 坂本圭児,1987,滋賀県愛知川川辺におけるニレ科樹林の構造.緑化研究,第9号,50-60.
 谷口康浩,2001,縄文時代遺跡の年代.『季刊考古学』,77(17-21).

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょうにじょうさんぼういち・はっちょうあと、かみさといせき							
書名	長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-12							
編著者名	高橋 潔・大立目 一・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのかみさとみなみ 大原野上里南 のちょうちない ノ町地内	26100	1047	34度 56分 43秒	135度 41分 21秒	2007年4月 16日～2008 年1月10日	1,500m ²	道路新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡	都城跡	長岡京期	一条大路および南側溝、西三坊坊間東小路および東西両側溝、掘立柱建物、整地層など	土師器、須恵器、土製品、木製品、皮製品	八町の北部の概要判明、造営時排水に関する遺構の検出。			
上里遺跡	集落跡	長岡京期以前	溝など	土師器、須恵器				
		弥生時代前期	竪穴住居、土器棺墓、溝、土坑、柱穴、炉	弥生土器、石器	竪穴住居、土器棺墓を検出。			
		縄文時代晩期	竪穴住居、炉、土器棺墓、土坑、柱穴	縄文土器、石器、玉類	集落と東を限る溝などの検出。溝埋土内より炭化物多量に出土。穀類・堅果類など種実を検出。			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12
長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

発行日 2008年3月14日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961